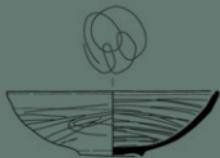


南都出土中近世土器資料集

—奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料—



奈良市教育委員会

2014

南都出土中近世土器資料集

—奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料—

奈良市教育委員会

2014



H J 第 559 次調査出土 土師器皿 (11世紀～19世紀)

例　言

- 1 本書は、奈良市教育委員会が平成 18 年度に実施した、平城京左京三条六坊十坪（H J 第 559 次調査）の発掘調査で出土した中近世土器の報告と、その関連資料をまとめ、南都出土中近世土器資料集として刊行するものである。
- 2 H J 第 559 次調査で出土した多量の遺物については、その大半を奈良県緊急雇用創出事業補助金の交付を受けて元興寺文化財研究所に整理作業を委託して行った。その委託内容は以下の通りである。

平成 21 年度 埋蔵文化財出土遺物洗浄・マーキング作業委託
平成 22・23 年度 「ならまち資料」整理活用事業

委事業の成果については、平成 23 年度秋季特別展『「奈良町」の考古学—発掘された近世・近代の奈良—』でその一部を公開した。本資料集は、事業成果の中から特に重要と考える土器資料を抽出してその概要を公表し、出土資料の活用を促進するために刊行するものである。
- 3 本書の写真図版に示した遺物番号は、土器図版に図示した遺物番号に対応する。
- 4 本書の遺構図、土層図に示した座標値は、平面直角座標系第IV系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の図中の標記については単位（m）を省略した。
- 5 本書で使用した遺物名称・型式は下記の論文に準拠した。

土師器羽釜　菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
瓦器（大和型）川越俊一 1983 「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
瓦器（和泉型）尾上 実 1983 「南河内の瓦器梶」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
肥前産陶磁器　九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
輸入陶磁器　横田賢次朗・森田勉 1978 「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集 4』
- 6 本書に使用した写真は、奈良市埋蔵文化財調査センターと元興寺文化財研究所、佐藤右文が撮影したものである。
- 7 本書の執筆は、奈良市埋蔵文化財調査センター主任中島和彦と、元興寺文化財研究所研究員佐藤重聖が共同で行い、中島が編集した。

目 次

卷首図版	
例言・目次	
第1章 遺跡・遺構の概要	
A 遺跡の概要	1
B 発掘調査の概要	2
C 検出遺構	6
第2章 出土土器	
A 報告の方法	14
B 出土遺物の概要	17
C 出土土器の時期的変遷	26
D 出土土器観察表	47
第3章 奈良町遺跡出土の土師器皿の編年	
A 奈良町遺跡出土の土師器の大分類と変遷	61
B 奈良町遺跡出土資料の編年	61
C 各段階の年代	68
D まとめ	69
写真図版	90

第1章 遺跡・遺構の概要

A 遺跡の概要

奈良町遺跡は、興福寺を中心として東西約2.5m、南北約2.7mに広がる都市遺跡である(図1)。その範囲はおおよそ奈良町205町内にあたり、明治23年の地籍図では、道路に面した短冊状の細長い宅地割りが見て取れる。

地形的には、春日山麓から西方に向かって伸びる台地上とその裾部に位置しており、中央部を東西に流れる率川の谷筋によって台地は南北に分断される。北側の台地上の中央には興福寺があり、その北東側に東大寺が位置し、南側の台地上の中央に元興寺が位置する。

これら古代寺院の存在が示すように、遺跡は奈良時代の都城遺跡である平城京跡と重複しており、発掘調査も平城京跡または古代寺院の調査として古くから行われてきた。奈良市教育委員会では、昭和54年度の東大寺旧境内(TD第01次)調査からはじまり、平成24年度現在で約130件の大小の発掘調査を行っている。図1は奈良町遺跡内で奈良市が行った発掘調査地点を○の分布で示しているが、遺跡内の調査に粗密があることがわかる。

今回報告するHJ第559次調査地は興福寺西側の高天町内で、北東方向にはしる台地の西縁辺部にあたり、その西側は西に下る斜面地となる。高天町内の発掘調査

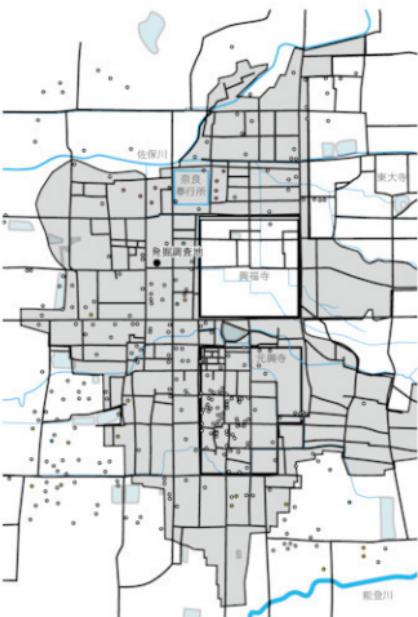


図1 奈良町遺跡の範囲とHJ第559次調査地 (1/25,000)



図2 HJ第559次調査地位置図 (1/10,000)

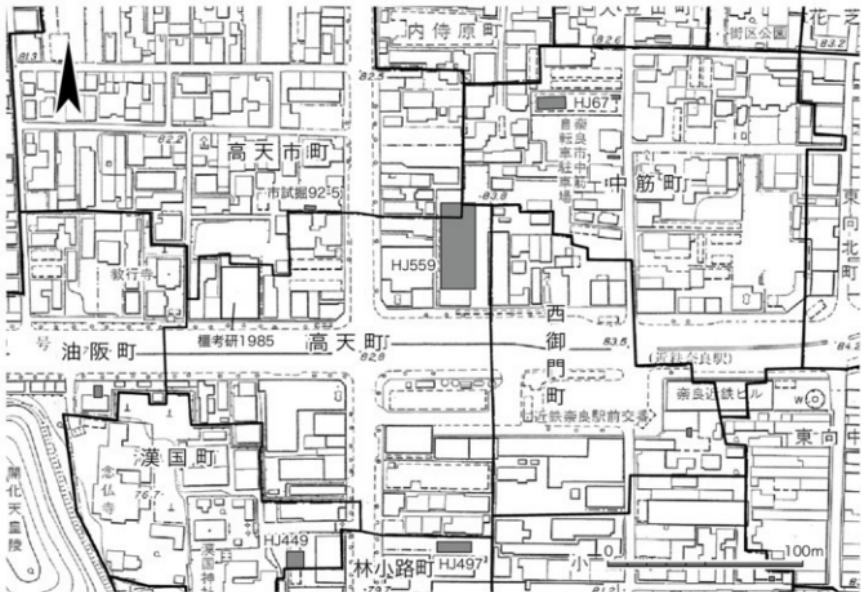


図3 発掘調査位置図(1/2,500)

は、権原考古学研究所が1985年度に1件行っており、奈良～江戸時代の各時期の遺構・遺物を数多く検出している。また南側の林小路町内の発掘調査でも奈良時代以降の遺構・遺物を数多く検出しており、奈良町遺跡においても比較的遺構密度の高い地域である(図2・3)。

B 発掘調査の概要

発掘調査は2006年度に奈良市埋蔵文化財調査センターが行い、その概要を「奈良市埋蔵文化財調査年報平成18(2006)年度」において報告している。810m²の発掘区を南北2回に分けて設定し、上層(室町～江戸時代)と下層(奈良～鎌倉時代)の2面の調査を行った(図6・9)。井戸9基はじめ土坑、小柱穴、石組遺構など約1,200基の大小の遺構を検出し、出土遺物は遺物整理箱で約1,200箱分が出土した。今回の報告はこの中から13基の遺構を抽出し、その出土土器を報告するものである。出土土器資料の報告に重点をおくため、選択した13基の遺構以外の詳述は避け、報告土器資料の性格を考える上で参考となる各時期の遺構の概要を以下に記す。

発掘区内では、奈良時代後半頃と考えられる掘立柱建物と土坑が最も古い遺構で、その後11世紀中頃と考え

られる井戸SE501までの間の遺構は確認していない。11世紀末頃から遺構の数が増加し、方形縦板組横枝留めの井戸SE502や、土坑SK604をはじめ16基以上の土坑が11世紀末頃のものである。この時期の遺構の特徴として、土師器の一括大量投棄が行われる土坑が多い点があげられ、今回報告する土坑SK613はその中の1つである。

以後、12～14世紀後半頃には、井戸をはじめとする遺構が各時期にあり、居住域として継続的な利用が想定できる。井戸SE506は14世紀後半頃のもので、平面八角形の立派な構造をした井戸枠で注目される。この時期の遺構として土坑SK618・635・636・638・639・642を選択した。いずれも土器を大量に廃棄する土坑であるが、出土状況は各々やや異なっている。

15～16世紀中頃にはほとんど遺構が確認できないうが、16世紀後半の5基の石組遺構の出現以降から17世紀中頃にかけては、再び遺構・遺物数が増加する。この時期の遺構としては、高天町と高天市町境界にある東西溝SD107があり、町境をはさみ南北に宅地を分筆していたことが確認できる貴重な遺構である。石組遺構SX808と土坑SK651がこの時期のものである。



図4 HJ第559次調査 発掘区全景 北半部下層（南西から）



図5 HJ第559次調査 発掘区全景 南半部下層（西から）

17世紀後半～18世紀後半までの遺構は、井戸SE507以外は確認できず、状況は不明。18世紀後半以降にはまた遺構・遺物が増加し、この時期の遺物が出土遺物の多くを占める。特に鹿苑処理用と考えられる土坑が多く、多量の土器・瓦などで埋まる。土坑はSK 655をはじめ11基あり、SK 656・662が最大規模である。

次に各時期の遺構の配置状況に注目すると、発掘区内の各時期の宅地割りがおぼろげながらも復原でき、町割りの変遷や宅地内の利用状況を考える上で貴重な資料と

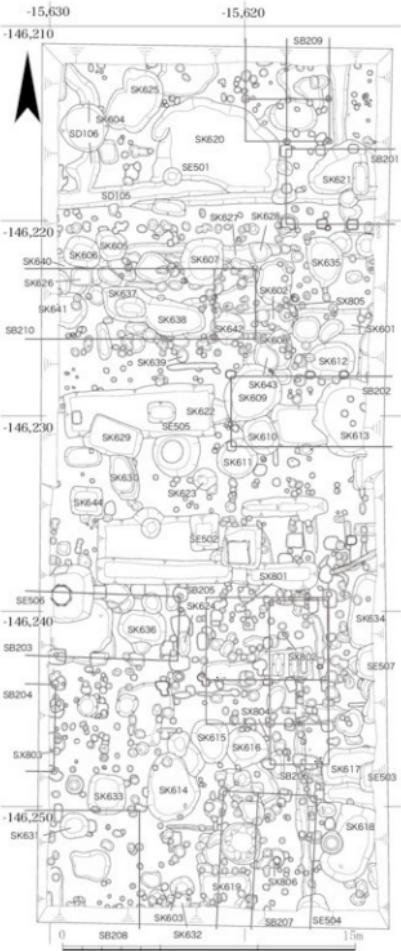


図6 HJ第559次調査 発掘区下層平面図 (1/250)

なる。

まず中世の遺構の分布を見ると、発掘区北側の東西溝S D 105をはさみ北側が約0.3m低いことから、この段差を境に南北の区画があったことが考えられる。奈良時代の整地土がS D 105の南側に存在し北側には存在しないこと、この整地土上に築かれる掘立柱建物S B 201が段差をまたいで建つことから、段差の時期が奈良時代にさかのぼるものではないことは明らかである。



図7 HJ第559次調査 発掘区全景 北半部上層（南西から）



図8図 HJ第559次調査 発掘区全景 南半部上層（西から）

SD 105 やその北に隣接する土坑 SK 620 の出土遺物が 12世紀前半頃のものであること、段差の南側に沿つて 11世紀末頃の小柱穴が東西にならんでいることから、この区画は 11世紀末～12世紀中頃に設けられたと考えられる。

段差の南側では、11世紀末～12世紀の土坑が集中する場所が 2カ所あり、さらにそれぞれの北側には小柱穴が集中するのが認められる。この土坑群と柱穴群が 1 セットで 1 区画を構成すると考えた場合、発掘区内には

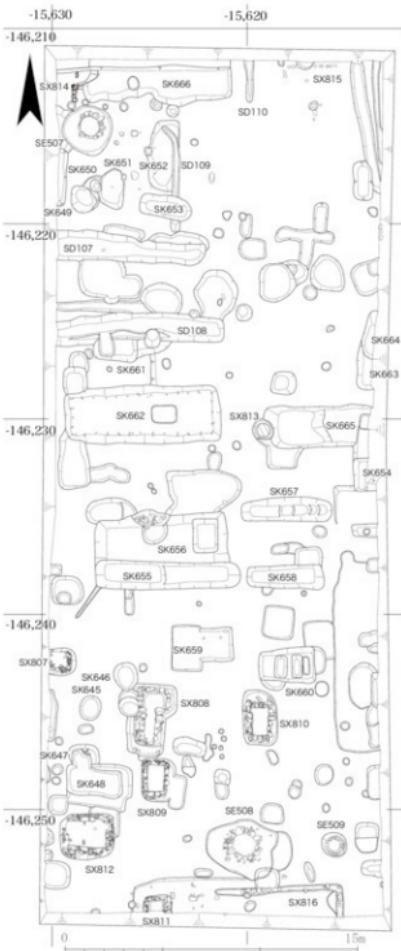


図9 HJ第559次調査 発掘区上層平面図 (1/250)

北側から 1～3 の 3 区画が南北に並び、各区画は西側の道路に間口を開いていたことが想定できる (図 11)。

江戸時代の宅地割りについては、文献・絵図と地籍図からある程度復原できる。

発掘調査地は現在おおよそ高天町内にあるものの、敷地の北西隅が高天市町、北東隅が中筋町に含まれる。地籍図をもとに現在の敷地に町境をおとすと、発掘区内に 3町の町境があることがわかる (図 3)。



図10 溝SD 105(中央)を挟む南北の区画(東から)

高天町内については、「奈良町北方式拾五町家職御改帳」(寛文10年(1670年))によって当時の町人合計50軒分の住人・職業・宅地の間口が判明する。この各宅地を地図上に配置してゆくと、おおよそ現在の高天町内の宅地の間口と等しいことがわかり、現在の宅地割りが17世紀中頃まで遡ることがわかる。これによると発掘調査地内には東西に南北方向の宅地が3軒ならぶことがわかる。

また高天市町内は、住人と間口幅・奥行きを記した幕末の町絵図によって、南北にならんだ東西方向の2軒の宅地の奥部分であることがわかる。

以上の史料と、明治23年の「奈良町全図」の地籍図から宅地の奥の形態を復原して発掘区内に宅地をおとしたのが図12の発掘区内宅地割図である。これによると、発掘区内には5軒分の宅地が復原でき、便宜上これらに宅地1～5の番号をつけた。

図12を見れば、各町境、宅地境は必ずしも区画を明瞭に示す遺構があるわけではないことがわかる。一方で宅地1と4の境には東西溝SD 107があり、宅地境を意識した遺構と考えられる。溝の年代は17世紀前半で、この時期には南北の宅地を分筆していたことがわかる。

また江戸時代後半の遺構の分布は、各宅地内に収まつておらず、宅地境界を越えて存在していない。特に発掘区中央に分布する大形の塵芥処理土坑は、宅地境をはさんで東西に分かれしており、その掘削にあたっては境界の認識のもと行われたことがわかる。

この結果、少なくとも17世紀以降の遺構については、宅地1～5までの各居住者に帰属するものであることがわかる。本報告で取り上げる遺構については、土坑SK 651と井戸SE 507が宅地4の、土坑SK 655・662が宅地1の居住者のものである。

以上のように江戸時代の各遺構の帰属先が判明すれば、居住者の変遷が追えるとともに居住者間の比較検討

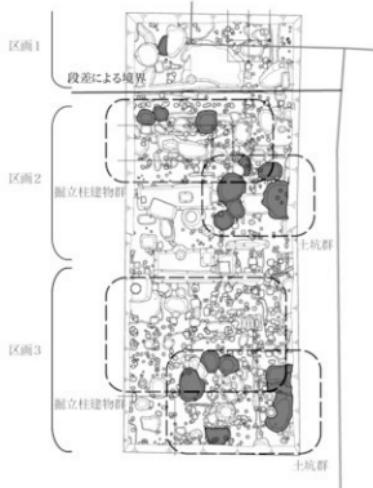


図11 HJ第559次調査 平安時代後期遺構配置図 (1/500)



図12 HJ第559次調査 発掘区内江戸時代宅地割図 (1/1,000)

も容易で、さらに検出遺構・出土遺物にもさらに進んだ評価を与えることができよう。

C 捜出遺構

抽出した13遺構について詳細を記すが、平面形と規模・出土遺物については各遺構ごとに表としてまとめた。

1 SE 501

平面形	円形		
平面規模 (m)	径 0.9	深さ (m)	0.8
出土遺物	土師器、黒色土器		

形態、深さから井戸と考えられる遺構であるが、井戸枠は確認していない。土器は底付近から出土した。出土遺物は少量であるが、調査地内において中世の土地利用の開始期を知ることができる遺構である。

2 SK 613

平面形	不整橢円形		
平面規模 (m)	東西 2.8 以上 × 南北 4.0	深さ (m)	0.4
出土遺物	土師器、瓦器、須恵器、白色土器、白磁、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、金属製品（刀子、鉄釘？）、鐵滓、石製品（砥石）		

土坑壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底付近から土器がまとまって出土した。埋土は暗灰褐色系の土で、地山の暗黄褐色粘土またはそれを含む土が間に数層堆積する。土師器皿が重なって出土するものの、秩序だって置かれたものではない。同時期の土坑が、周辺に4基ほどまとまって存在する（SK 609～612）。多数の土師器皿がまとまって出土すること、埋土の状況など類似する点が多い。



図 14 土坑 SK613 平面・土層図 (1/80)

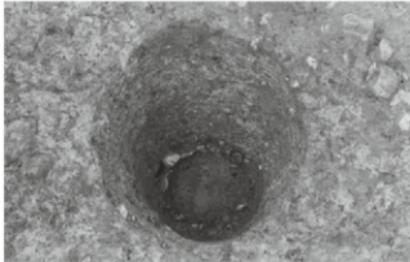


図 13 井戸 SE501 (東から)

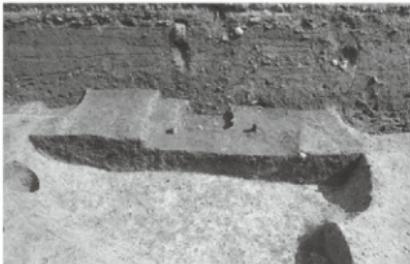


図 15 土坑 SK613 (西から)

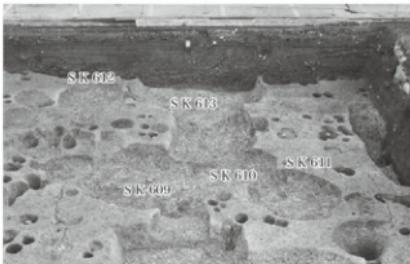


図 16 土坑 SK613 と周辺の土坑群 (西から)



図 17 土坑 SK609 土器出土状況 (南から)

3 SK 618

平面形	楕円形		
平面規模 (m)	東西 2.3 × 南北 4.0	深さ (m)	0.7
出土遺物			
	土師器、瓦器、須恵器、白色土器、白磁、青磁、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、金属製品（鉄釘）、鐵滓、石製品（石鍋）、木製品（漆椀、曲物、箸、下駄）、檜扇、櫛、しゃもじ、糸巻）		

断面形は箱掘り風に掘られており、埋土は暗茶褐色系の土で、数層に分層できる。底から 0.2 m 上までの層には木片が多く含まれ、多量の箸が出土した。土器は各層中から多数出土した。



図 18 土坑 SK618 土層断面（南から）



図 19 土坑 SK618（北から）

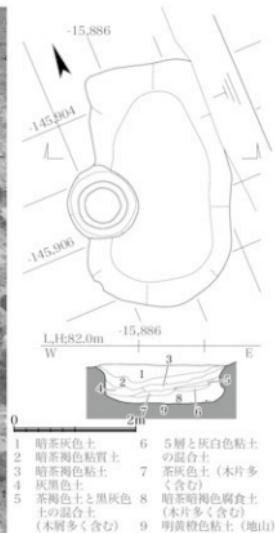


図 20 土坑 SK618 平面・土層図 (1/80)

4 SK 635

平面形	不整楕円形		
平面規模 (m)	東西 1.9 × 南北 2.6	深さ (m)	0.5
出土遺物			

断面形が鉢形の土坑で、暗灰褐色系の土で埋まる。土器は主に土坑の上層の中央付近からまとめて出土しており、土坑がある程度埋まってから土器が投棄されたものと考えられる。



図 21 土坑 SK635（東から）



図 22・23 土坑 SK635 土器出土状況

5 SK 636

平面形	楕円形	
平面規模 (m)	東西 2.5 × 南北 1.8	深さ (m) 0.25
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、国産陶器、白磁、青磁、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、金属製品（鉄釘）、鉄洋、石製品（砥石）	

断面形が皿状の土坑である。埋土は黒褐色粘質土の1層で、底から上面まで土器がぎっしり含まれる。遺物整理箱46箱分の土器が出土し、土器が完形である率も高い。土器は重なり合って出土するものもあるが、整然と配置されたものではない。南側には別の土坑が重複する。

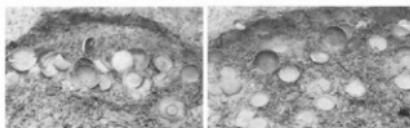


図 25・26 土坑 SK636 土器出土状況

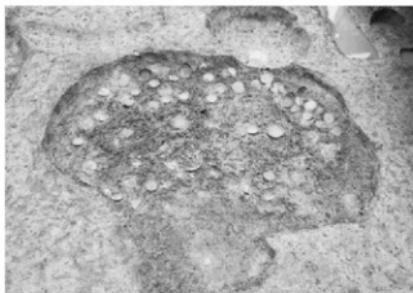


図 27 土坑 SK636 検出状況（南から）



図 28 土坑 SK636 土層断面（東から）

6 SK 638

平面形	副丸長方形	
平面規模 (m)	東西 3.4 × 南北 1.9	深さ (m) 0.4
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、白色土器、国産陶器、白磁、青磁、黄釉陶器、円盤形土製品、丸・平瓦、道具瓦、金属製品（鉄釘）、銅錢（漢通元寶）	

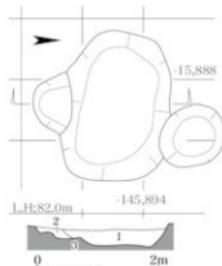


図 29 土坑 636 平面・土層図 (1/80)

いびつな長方形の土坑で、土坑底から土器がまとまって出土する。土器を投棄した後に土で埋めたと考えられる。西に隣接して同規模・同時期の土坑 S K 637がある。



図30 土坑SK638（北から）

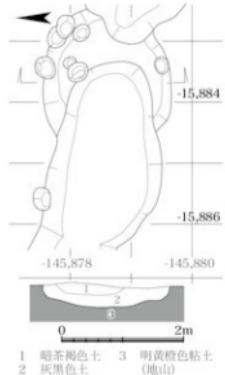


図31 土坑SK638 平面・土層図(1/80)

7 SK 639

平面形	楕円形
平面規模 (m)	東西0.4×南北0.4
深さ (m)	0.3
出土遺物	土師器、国産陶器

平面形は楕円形で、垂直に掘り込まれる土坑である。形態と規模は柱穴と似るが、底からまとまって多数の土師器皿が出土しており、土器を廃棄した土坑と考えた。

8 SK 642

平面形	円形
平面規模 (m)	径1.7
深さ (m)	0.45
出土遺物	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、白色土器、国産陶器、白磁、青磁、青白磁、円盤形土製品、丸・平瓦、金属製品（鉄釘）、銅錢（元祐通寶）、鉄滓、石製品（砾石他）。

断面形が桶鉢状の土坑である。埋土は灰黑色土の1層で、底から上面まで土器がぎっしり含まれる。土器は上に向いて重なり合って出土するものの、整然と配置されてはいない。同時期の遺構で土師器が多量に出土する土坑はこのSK 642のみである。



図32 土坑SK642 土層断面（北から）

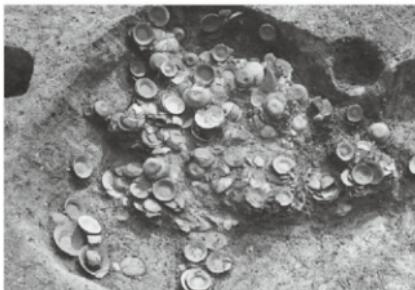


図33 土坑SK642（北から）

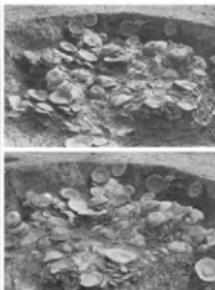
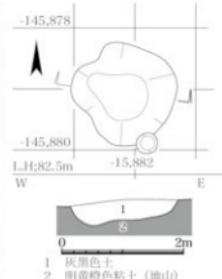


図34～36 土坑SK642 土器出土状況、平面・土層図(1/80)



9 S X808

平面形	逆L字形		
平面規模 (m)	東西 2.4 × 南北 3.8	深さ (m)	0.6
出土遺物			
	土師器、瓦質土器、国産陶器、白磁、青磁、青花、円盤形土製品、軒瓦、丸・平瓦、道具瓦、金属製品（鉄釘、不明鉄製品）、鐵滓		

石組遺構で、平面形は2つの長方形の石組遺構を接続したような逆L字形である。内法は南北が2.4m、東西が1.1mと0.5mで、石組は1～2段残る。南端の石は抜き取られたのか残存しない。石組遺構は他に4基確認しており、いずれもほぼ同時期で、発掘区南半部に集まる。



図37 石組遺構 SX808 (北から)

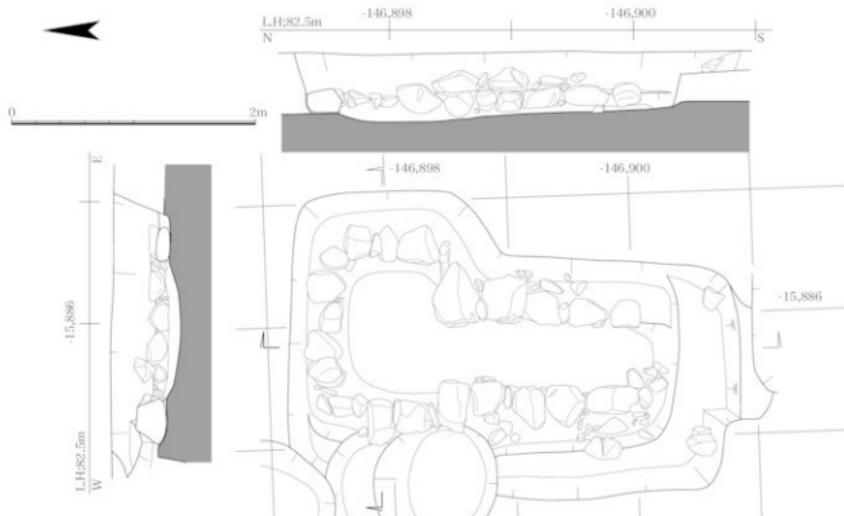


図38 石組遺構 SX808 平面・立面図 (1/40)

10 SK 651

平面形	楕円形		
平面規模 (m)	東西 1.3 × 南北 1.4	深さ (m)	0.35
出土遺物			
	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、丸・平瓦、道具瓦、金属製品（不明鉄製品）		

土師器皿を一括で投棄した土坑で、S D 107以北に存在する整地土を除去後に検出した。土坑の南側からまとまって土器が出土した。位置関係から、宅地4に帰属するもので、宅地4の整地時期を知る資料である。



図39 土坑 SK651 土器出土状況 (北から)

11 SE 507

平面形	円形
平面規模(m)	東西 2.6 × 南北 2.6
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、円盤形土製品、土人形、軒瓦、丸・平瓦、金屬製品（鉄釘、煙管、火箸、簪他）、石製品（砥石）、木製品（漆器椀、曲物、箸、屋根材（柿板）

円形石組の井戸で、上から約2.8 m分の井戸枠は抜き取られている。約3.6 m下まで掘削したが、底には到らなかった。井戸枠抜き取り痕からは、多量の遺物が出土した。埋土には焼土・炭が多く含まれ、火災後の廃棄物を投棄したものとも考えられる。報告の土器もこの抜き取り痕出土のものである。また井戸枠内からは、屋根材である柿板が多数出土しており、周辺に柿葺き建物の存在が想定できる。

井戸は宅地4の奥に位置し、出土遺物も宅地4の住人に帰属するものと考えられる。



図 40 井戸 SE507 (北東から)

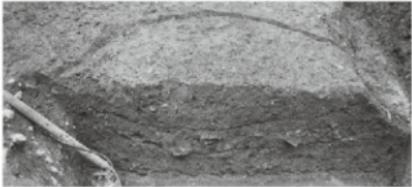


図 41 井戸 SE507 土層断面 (北から)

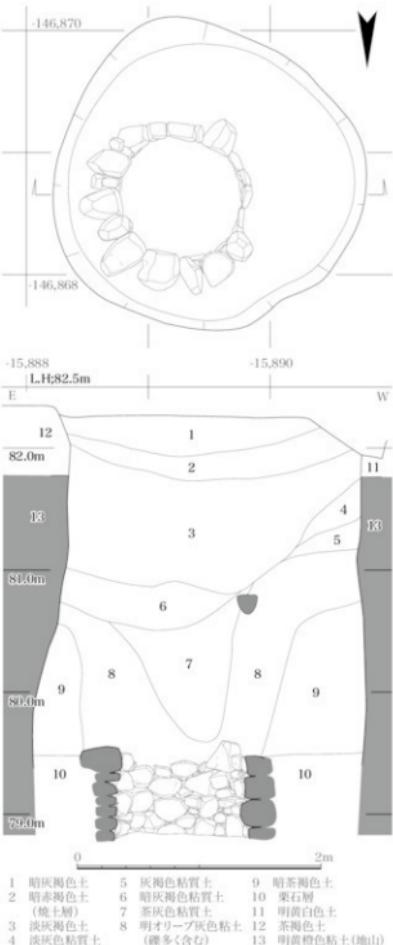


図 42 井戸 SE507 平面・立面・土層図 (1/40)

12 SK 656

平面形	隅丸長方形		
平面規模 (m)	東西 6.8 × 南北 3.8	深さ (m)	0.8
出土遺物	土師器、瓦質土器、国産陶器、国産磁器、白磁、青磁、青花、円盤形土製品、土人形、軒瓦、丸・平瓦、棟瓦、道具瓦、金屬製品（鉄釘、煙管、刀子、刃物、火箸、銅鋤、斧、鎗金具、銅線、耐板）、銅錢（伊武通寶、寛永通寶）、輪羽口、坩埚、鐵滓、石製品（砾石、火打石）、木製品（漆器（椀、浅鉢、鏡箱）、下駄、櫛、栓、建築部材）、ガラス製品		

土坑 SK 662 となるべく発掘区内最大規模の土坑で、大量の遺物が出土した。土坑底は平坦で、北東隅には 1.3 × 1.8 m、深さ 0.5 m の平面方形の土坑がある。土器、瓦の他に建築部材や鉄釘も多数出土しており、建物除却時の廢材を投棄しているようである。最終的に、これら遺物を含む暗灰褐色土で一度に埋められている。



図 43 土坑 SK656 (西から)



図 44 土坑 SK656 土刷断面 (西から)

南側には重複する土坑 SK 655 がある。この土坑もほぼ同時期のもので、塵芥処理用と考えられる。

SK 656 は、位置関係から宅地 1 に帰属する遺構で、宅地 1 では土坑埋没後にも同規模の土坑 SK 662 を宅地奥に新たに掘削している。SK 656 から多数の建築部材が出土することから、この時期に宅地 1 内で建物の除却・新築が行われたことが想定できる。紀年銘の墨書き土器から安永 2 年（1773 年）以降のものである。

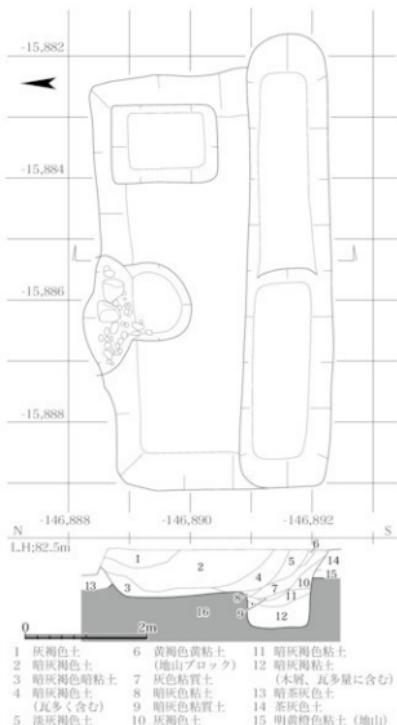


図 45 土坑 SK656 平面・土刷図 (1/80)

13 SK 662

平面形	圓丸長方形		
平面規模 (m)	東西 8.0 × 南北 3.0	深さ (m)	0.9
出土遺物	土師器、瓦質土器、國產陶器、國產磁器、白磁、青磁、青花、土人形、軒瓦、丸・平瓦、棟瓦、道具瓦、金銅製品（鉄釘、刀子、刷縫）、石製品（鏡）、木製品（漆器椀、曲物、蓋、箸、櫛）、ガラス製品		

発掘区内最大規模の土坑で、大量の遺物（遺物整理箱53箱分）が出土した。土坑の底は平坦で、中央部のやや東寄りには約1.3×0.9 m、深さ約0.2 mの平面隅丸方形の土坑がある。断面形は台形で、土坑底の周囲には壁面の法面にあわせて杭が打ち込まれている。柵や横板はなかったが、擁壁のためと考えられる。底には暗灰色粘土が約0.2 m堆積し、その上は大量の土器・瓦を含む灰色土で一度に埋まる。

土坑に擁壁があることから、一定の期間開口していたものと考えられる。土坑の機能が終了後に、廃棄物で埋めたものと考えられ、報告の土器もこの時期のものである。宅地1に帰属する遺構である。
（中島）



図46 土坑SK662 土層断面（東から）



図47 土坑SK662 土器出土状況



図48 土坑SK662（北西から）

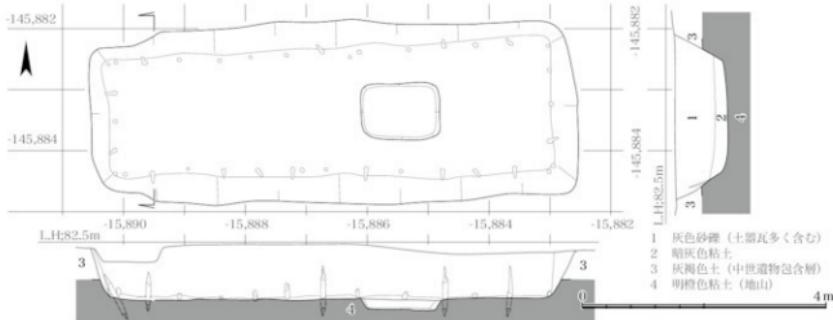


図49 土坑SK662 平面・立面・土層図 (1/80)

第2章 出土土器

A 報告の方法

a 報告資料の選択

HJ 第559次調査では、遺物整理箱 783 箱の遺物が出土した。その内訳は土器類が 566 箱、瓦類が 198 箱で、この他に 18 箱分の石製品、金属製品、木製品がある。出土遺物には奈良～近代までの各時期のものがあり、奈良町遺跡を考える上で重要な資料が得られている。今回の報告では、良好な土器の一括資料を選び、分類・計量・図化を行い、土器編年の基礎資料となるようつとめた。

資料の選択にあたっては各時期を万遍なく扱うこととし、およそ 11 世紀から 19 世紀までの 900 年間を量・質ともに良好な 13 個の資料で代表させたが、残念ながら他の重要な資料は保留せざるを得なかった。

b 土師器皿の大分類

奈良町遺跡出土の土師器皿は、基本的にすべて「手づくね」成形で、ロクロは使用していない。その製作技術については諸説あるが、奈良時代から江戸時代まで同一の製作技術で土師器皿を作りつづける点が、奈良の土師器生産の大きな特徴と言えよう。口縁部のヨコナデ調整と内面底のナデ調整だけが、観察される主要な調整である。外面底部には目立った調整ではなく、指または掌の圧痕がまれに見られる。また、まれに内面にハケメ調整や板状工具の痕跡が見られるものがある。

このような単純な製作方法の土師器皿であるが、仔細に観察すると、形態・ヨコナデ調整の範囲や施し方・胎土によって大きく以下の 6 群に分類できる。

・A群 古代から系譜の追える一群で、形態は古代の杯・皿の延長線上にあり、比較的平坦な底部から屈曲して口縁部となる。胎土は砂を含み、焼成は良好なものが多い。存続期間が長いため、各種の形態変化をつづけながら江戸時代に至る。

11～13 世紀前半頃は、胎土の色調や形態差が大きいが、13 世紀の後半頃には赤褐色系の胎土のものが主流となり、形態的にも一元化する。鎌倉・室町時代にはいわゆる赤土器となる。

・B群 胎土が白色を意識した色調の一群で、いわゆる白土器とされるもの。胎土・焼成とも意図的に白く仕上げており、同時期の A 群に比べ形態・法量分化が大きく異なる。年代的に京都の白色系の土師器皿（伊野編年 G タイプ、小森・上村編年 S タイプ）の影響を強くうけているものと考えられる。

・C群 灰白色の精良な胎土の一群で、形態的には比

較的平坦な底部と直線的な口縁部の大～中型の皿が特徴的である。焼成はやや軟質である。A・B 群いずれとも系譜関係が追えず、他地域からの影響についても不明である。15～16 世紀の土師器皿の半数ほどを占めるが、前代に比べ土師器皿全体の出土量は減少する。

・D群 形態と調整が特徴的な一群で、17～18 世紀の土師器皿の主体をなす。

底部の丸みが強く、底部と口縁部の境は不明瞭である。口縁部外面のヨコナデ調整の幅が狭く、口縁端部にしか調整が及ばない。内面は口縁端部にのみヨコナデ調整が施されるもの（d-1 群）と、幅広のヨコナデ調整で最後に口縁外側にナデ抜けるいわゆる「の」字ナデ調整のもの（d-2 群）がある。

一般的に器形の歪みが大きく、器壁も厚手である。胎土は砂の少ない精良なもので、黄橙色系の色調である。焼成はやや軟質気味で、時期によっては薄く層状に剥離するものも多い。

形態・調整に個々性を欠いており、生産集団は複数存在しているように見受けられる。

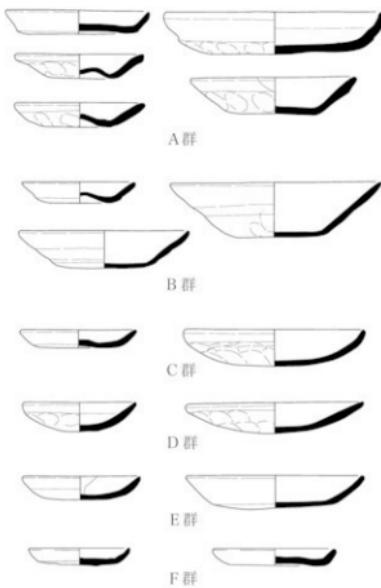


図 50 土師器皿の大分類

・E群 D群土師器皿に比べ歪みが少なく、器形・調整とも丁寧な一群である。器形は、やや平坦な底部と緩やかに湾曲する短い口縁部からなる。口縁部はヨコナデ調整で、口縁部内面は幅広の「の」字ナデ調整である。器壁は薄く、焼成もよく全体的に端正な作りである。胎土は黄橙色・灰白系の色調である。

18世紀代を中心で一定量出土しているが、遺跡・遺構によって出土量の差がはげしい。

・F群 褐色系の胎土で浅い皿の一群。平坦な底部と内湾する短い口縁部からなる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、この調整によって内面の底部と口縁部の境は浅く窪む。焼成は良好である。

胎土の特徴はA群土師器皿と類似しており、A群土師器皿が消滅後にF群土師器皿が出現することから、生産地が同一とも考えられるが、器形・製作技術など連続性が確認できておらず、別群として取り扱う。

・その他 これらに含まれない土師器皿も出土しているが、他地域からの搬入品であったり、生産が継続せず変化が追えないものと考えられる。

以上見てきた各群の特徴からは、伝統的な製作技術の共有、共通の意図または要求による器形、採取粘土からみた製作地の近似性が読み取れる。そしてこれらの条件を満たすものとして、一地域内の土器生産者集団が想定される。この土器生産者集団は、1人から複数の製作者で構成されると考えられ、各群内での細分は構成員の数を反映するものもあるろう。

c A群土師器皿の分類

中世の土師器皿の主流となるA群は、生産期間の長さと規模から、型式変化を遂げながら推移してゆく。その変遷を追るために、さらに分類することとした。分類は、遺物整理作業時に佐藤が作成したものをもとに、中島と佐藤が協議し、最終的に中島が調整した。

まず皿の形式によって以下のように分類する。

■A いわゆる「て」字状口縁の土師器皿

■B 平底の皿

■C 底部を押し上げる、いわゆる「へそ皿」

■D 口縁部を内側に折り返す、いわゆる「コースター状」皿

■E 平底だが底部が狭く、立ち上がり部から口縁部までが長いもの。奈良町遺跡内では一般的な形態ではないが、S K 636 から多量に出土している。

1) 伊野近富 1987 「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

2) 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』3 (財) 京都市埋蔵文化財研究所

また、皿Bについてはさらに細分類を行う。分類について、個別の土師器皿を構成する諸属性について軽重を設け、①器高、②口縁部の形態、③口縁部ナデの段数、の順に設定した。これら諸属性の組み合わせによって形式・型式を設定している(表1、図51)。各属性項目の細別は以下のとおりである。

①器高 各形態内における相対的な関係

I 普通の深さ。

II 口径に対し器高が高い。

III 口径に対し器高が低い。

②口縁部の形態

1 外反する (a端部のみ短く外反する b底部から口縁部にかけて広く外反する)。

2 丸く収める。

3 口縁部を引き上げ気味に収める。

4 口縁部外面を強いヨコナデ調整によって沈線風に窪ませ、外反または外反風の口縁部とするもの。基本的に二段ヨコナデ調整を伴う。

この2要素の組合せで、12種類の型式が設定でき、①と②の属性の組合せで型式名とした。しかし、実際に出土しない型式があるため、6種類の型式が確認でき、さらに細部の形態の変化を含めると、9種の型式となつた。

またこれらには、口縁部のヨコナデ調整の差によって次の2種に分け、必要と認められた場合、型式名の後に付す。

x 一段ヨコナデ調整。

y 二段ヨコナデ調整。

d 土師器皿計測の方法

各分類ごとに口径を計測し、細別・法量に従って破片数をカウントした。器高でのみ判別するA群皿B II類は小片では判別できないため、すべてI類にまとめた。なお計測対象としては、口径の8分の1以上が残存している破片を対象とした。破片数のカウントについては、接合個体も破片ごとに数量をカウントしている。

法量の計測に際しては1cm単位で読み取り、歪みの大きい破片については平均的数値を採用した。また口径は口縁部外側で、器高は中心線上を計測した。(中島・佐藤)

表1 A群土師器皿の分類表

形式	①器高	②口縁部形態	口縁部ナデ	大	小	その他	形式	細分	備考
皿A	I			○			I		「て」字状口縁
	II			○			II		「て」字状口縁・器高が高い
皿B	I	1	x+y	○	○		I-1a	a	口縁端部のみ外反させる
				○	○			b	口縁部全体を長く外反させる
		2	x+y	○	○		I-2a	a	通常の皿形態
				○			I-2b	b	成形やや粗く、杯形の器形。いわゆる赤土器
	I	3	x+y	○	○		I-3	a	口縁端部を上方へ引き上げる
				○	○			b	口縁端部を面取りする
		4	x+y	○	○			c	口縁端部を面取りの後ナデ仕上げし、端部下半を丸みをもつておさめる
				○	○		I-4		口縁端部を二段ナデ調整で外反風に仕上げる。
	II		x+y	○	○		II		口径に対し器高が高い
皿C					○			a	成形が丁寧で皿Bの小皿の底部を押し上げただけのもの
皿D				○	○			b	成形がやや粗く、胎土は赤褐色を呈するいわゆる赤土器の「へそ皿」
皿E				○					コースター状 底部が狭いもの

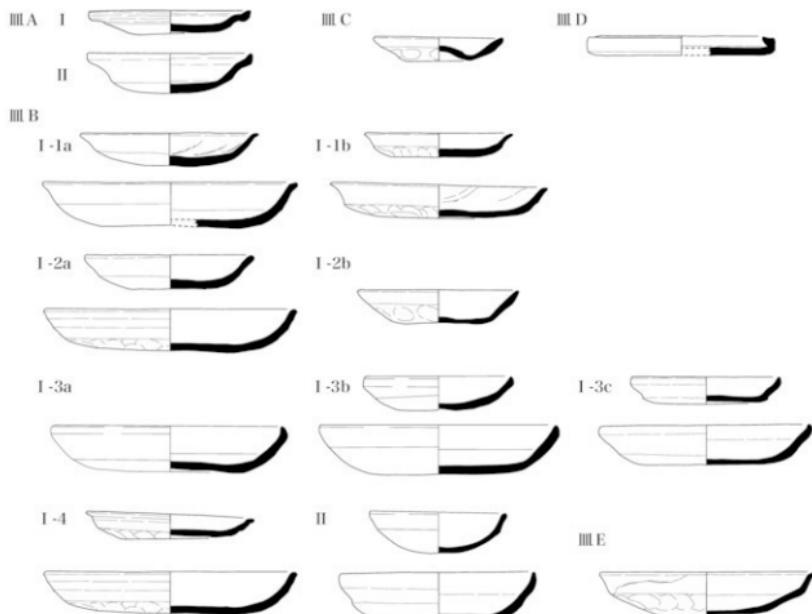


図51 A群土師器皿の分類図

B 出土遺物の概要

以下、各遺構の出土遺物について概要を報告したのち、土師器皿についてその様相を中心解説する。なお、近世の土師器皿については、型式分類が整理作業実施時に確定しておらず、型式毎の分析は行っていない。また各遺構出土の遺物組成の詳細は表2・3（P 24・25）に括して掲載しているので参照されたい。

1 SK 501 (図70)

a 遺物概要

土師器皿、黒色土器B類碗が出土した。破片総点数は16点。遺物総数が少なく組成比などを検討することはできない。

土師器皿I-I類（1・2）は口径11cm前後で、薄手で器高が低い。

黒色土器B類碗（3）は底部外面を除く内外面に丁寧なヘラミガキを行い、見込み部には放射状の丁寧な暗文を施す。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

土師器皿は完形品が二個体出土しているのみで、分析に耐えうる資料ではない。

2 SK 613 (図70)

a 遺物概要

土師器皿・羽釜・鍋、瓦器碗・皿、須恵器鉢、白色土器皿、高杯が出土した。破片総点数は7,482点。

出土遺物のうち土師器皿の比率が約96%と高率で、これに反比例するように瓦器碗の比率は3.5%と低い。輸入陶磁器の比率は0.2%で、すべて白磁である。

土師器皿はすべてA群で、皿A（4～12）、皿B・皿D（35）がある。皿Bにはさらに、I-1（13～15・28）・I-2（16～21・29・30）・I-4（22～26・31～35）型式がある。皿Aの7、皿B I-2の29はやや深い器形であるが前後の時期への継続性が認められず、13世紀に出現しているII型式とのつながりも不明である。

土師器釜（41）は大和B型のもので、頸部外面には連続する無文のタタキ板の痕跡が、内面には無文のタタキの当て具痕跡が見られる。

瓦器碗（36～38）はいずれも大和型のもので、38がII段階A型式、37がI段階D型式、36がI段階C型式のものである。いずれも高台接地面が摩滅し、37は内面に被熱痕が残る。

瓦器皿（39・40）はいずれも内面のみヘラミガキを施し、見込み暗文は格子状の暗文を施す。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が1,646点、その他の口縁部破片が2,412点、底体部片が3,108点すべてA群である。

形式ごとに見ると、皿Aと皿Bがそれぞれ1/3と2/3を占めている。主体となる皿Bは、口径が10cmと16cm代に集中し大小の皿を作り分けていることがわかる。一方皿Aは口径が10cm代に集中しており、明らかに小皿のみを製作している。

皿BはI-1、I-2、I-4が主体でそれぞれ約20%前後ある。一方皿Bを、小皿（13cm未満）、大皿（13cm以上）としてその比率を型式別にみると、I-1、I-2、I-4の小皿；大皿比が、それぞれ1:0.6、1:0.5、1:1.5となる。I-4型式内の大皿の比率の高さが目立ち、型式ごとの偏りが見て取れる。

3 SK 618 (図71)

a 遺物概要

土師器皿・高台付皿・碗・鉢・羽釜・瓦器碗・小椀・皿、須恵器鉢・壺、灰釉陶器碗・壺、山茶碗・白色土器皿・高杯、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿）が出土した。破片総点数は15,870点。

出土遺物のうち約97%を土師器皿が占める。土師器皿の比率はSK 613同様高い。瓦器碗はI段階D型式・II段階A型式の双方が混在する。その比率は2.1%と低い。白色土器の出土比率はSK 613とほぼ同じであるが、回転台成形土師器が出土するのは当遺構のみである。輸入陶磁器の比率は0.5%で、白磁が主体である。

土師器皿はすべてA群で、皿A（42・43）、皿B・皿D（60）がある。皿Bにはさらに、I-1（44～48・61・62）・I-2（49～54・63・64）・I-4（55～59・65～67）型式がある。

回転台土師器（69・70）はいずれも底部がへラ切りで、69はへラ切り後板目の圧痕が残る。胎土は手づくねのものと同じである。

土師器鉢（68）は三足を貼り付け、脚部に面取りを施す。内外面ナデ調整を施すが、内面下半には板状工具によるナデが確認できる。

白色土器（78）は削り出しの輪高台で、豊付部に回転系切痕を残す。

土師器釜（79）は大和B型のもので、頸部外面には連続する無文のタタキ板の痕跡が、内面には無文のタタキの当て具痕跡が見られる。

瓦器皿（71）は底部外面に放射状のユビオサエ痕が顯著にみられ、内面はジグザグ状の暗文を密に施す。

瓦器小椀（72）は体部外面に分割磨きを施し、口縁

部には使用痕と思われる5mm程度の欠損が見られる。

瓦器椀(73)は大和型I段階D型式のものである。口縁部外面に二段のナデを施し、高台接地部は使用のため、摩滅する。

輸入陶磁器は白磁で、75がII類、74がIV類である。

東播系須恵器鉢(77)は口縁端部が体部に対して直交し、内外両面に突出する。口縁部はわずかに「S」字状に屈曲する。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が4,021点、その他の口縁部破片が5,381点、底体部片が5,959点すべてA群である。

皿Aの出土量が減少し6%足らずとなり、皿Bが主体となる。皿Bの口径は15cmと10cm代が中心で、SK613に比べ大皿において縮小傾向が見て取れる。皿Aは口径10cm代が中心でSK613と同様の傾向である。

皿Bは型式別ではI-4が42%と最大で、I-1・2がそれぞれ25%前後でそれに次ぐ。小皿(13cm未満)・大皿(13cm以上)の比率は、いずれの型式も1:0.4~0.6と小皿が多数となる。

4 SK 635 (図72)

a 遺物概要

土師器皿・椀・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、須恵器皿・壺、白色土器椀、国産陶器(常滑産甕、東海産鉢)、輸入陶磁器(青磁碗・皿、白磁碗・皿)が出土した。破片総点数は3,205点。

土師器皿の出土比率は約72%で多数を占めるが、瓦器が約17%と報告資料中で最大の比率を占める。また瓦質土器も約0.25%と僅かながら出現している。輸入陶磁器は0.3%で、青磁と白磁がほぼ同率で出土する。

土師器皿はすべてA群で、皿B・皿C(93)・皿D(94)がある。皿Bにはさらに、I-2(80~88・95~97)・I-3(89~92・98~102)・II(103)型式がある。

土師器羽釜は大和H型(115)、大和B型(116)の他に、口縁部が直立する小型のもの(114)がある。115・116とも体部に無文のタタキ板と当て具痕跡がある。115は体部下半の被熱が著しい。

瓦器椀は口径13cm代・器高4cm代が中心でIII段階B型式のものである。

瓦質土器鉢(113)は、破片であるが方形になるものと考えられる。内外面を緻密なヘラミガキ調整する。

輸入陶磁器の白磁皿(166)は肉厚の削り出しの輪高台で、体部上半のみに釉を漬け掛けする。

東播系須恵器鉢(110~112)はいずれも口縁端部を内傾させ、外側部分をやや肥厚させる。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が810点、その他の口縁部破片が585点、底体部片が910点すべてA群である。

皿Aはほぼ姿を消し、新たに底部をやや上げ底状にする皿Cが出土する。皿Cは後代の「へそ皿」風のものではなく、底部全体が盛り上がる皿C-a型式である。「へそ皿」を意図したものというより、口縁部の成形手法の結果によるものと考えるが、詳細は不明である。

皿Bは出土量の9.7割と大多数を占める。口径は13cmと9cm代が中心で、大皿と小皿に分かれる。皿Cは9cm代の小皿のみである。

皿Bは型式別では、I-2とI-3で95%とほとんどを占める。また深い器形のII形式が出土している。出土比率は計測できなかったが、大型破片中に含まれる率から見て、出土量は非常に少ないものと想定できる。

5 SK 636 (図73・74)

a 遺物概要

土師器皿・椀・鉢・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、須恵器皿・壺、国産陶器(常滑産甕、東海産鉢・壺)、輸入陶磁器(青磁碗・皿、白磁碗・皿他)が出土した。破片総点数は14,749点。

土師器皿は約86%と大多数を占めるが、瓦器の比率が約13%とやや高めである。瓦質土器は約0.14%と僅かながらも占めている。輸入陶磁器は約0.14%で、青磁と白磁が同比率で出土する。

土師器皿はほぼすべてA群で、皿B・皿C・皿D・皿E(152~158)がある。皿Bにはさらに、I-1(117~122・143・144)・I-2(123~138・145~149)・I-3(139~142・150・151)・II(159)型式がある。また4点であるが京都産の白色系の皿が出土している。京都産の土師器皿は、年代を考える上で重要な資料となる。

墨書き土師器皿(160)は太い眉と大きな目、团子状の鼻を描き、口角部には上向きの牙が表現されている。鬼面を描いたものと考えられる。

土師器羽釜(161・162)はいずれも大和H型のものである。161は内面を板状工具によるナデ調整を行う。

土師器椀(169)は非回転台成形の輪高台のもので、内外面ナデ調整で仕上げる。

瓦器皿(168)は内面見込み部に12~15往復のジグザグ状暗文を十字状に交差させる。形態・調整からみ

て、典型的な大和型ではなく、形式は不明である。

瓦器椀は大和型（166・167）以外に、非常に特徴的な型式不明もの（163～165）がある。後者は口径13cm代を中心とし、外面のヘラミガキは体部下半に及び、内面見込み部には2～3回転のらせん状暗文を施す。口縁端部の沈線がなく、器壁が厚い。大和型は、口径13cm代、器高4cm代で、III段階B型式のものである。

瓦質土器鉢は楠葉産（172）と大和産（173）がある。173は内面をヘラミガキ調整し、見込み部には格子状の暗文を施す。外面はヘラケズリ調整後ヘラミガキ調整し、外底面には板压痕がある。

東播系須恵器鉢（170）は口縁端部が内傾し、外面に広い面をもつ。内面の使用痕が著しい。

常滑产陶器甕（171）は口縁緑帶部が上下方向に発達し出している。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が4,996点、その他の口縁部破片が3869点、底体部片が3,849点で京都産の4点を除きすべてA群である。A群には皿B・皿C・皿D・皿Eがある。

皿EはSK 636に特有の形式で、土師皿全体の15%を占める。他の遺構からの出土はほとんどない。口径は13cm前後が中心で小皿はない。

皿Bは土師器皿の84%を占める。口径は13cmと9cm代が中心で、大皿と小皿に分かれる。小皿はSK 635に比べ8cm代の量が多く、時期的にやや後出するものと考えられる。型式別では、I・2が44%、I・1が23%、I・3が15%の順となる。I・1の出土量が多い点も、この時期のものとしては特異である。II類も確認できるが、出土量は少量と考えられる。口径はSK 635に比べ縮小している。

6 SK 638（図75）

a 遺物概要

土師器皿・耳皿・羽釜、瓦器椀・小椀・皿、瓦質土器浅鉢・鉢類、白色土器椀、山茶椀、国産陶器鉢・鉢・甕、青磁皿・壺、白磁碗・皿・合子、黄釉盤・天目椀他が出土した。破片總点数は2,641点。

出土比率は土師器皿が約91%で、一方瓦器椀が約4%と著しく低下する。土師器が完形で出土する率が高いに対し、瓦器は破片資料が多く、両者のあり方は大きく異なる。また東播磨産の須恵器に対して、東海産の陶器の占める率が高い点も注目される。輸入陶磁器は約1.2%で、白磁が約2/3を占め、白磁の主体は12世紀頃の玉緑碗または端反り碗である。13世紀の奈良町遺

跡内では龍泉窯系の青磁に比べ白磁の出土率が高く、1つの特徴である。

土師器皿はA群の他に、少量の京都産の白色系の皿がある。A群には皿A・皿B（174～177・180～186）・皿C（178・179）・皿D（187）がある。皿BはI・2（174～177・180～184・186）が主体でI・3（185）も少量ある。京都産の白色系の皿は「へそ皿」の小皿（188・189）と口径11cmのもの（190）が出土している。

土師器羽釜は大和H型（198・200）と口縁部を直立させるもの（199）である。

瓦器椀（191）は復原径10cm前後で外側面に疎らなヘラミガキ調整を施す。

瓦質土器深鉢（201）は外側面を縱方向のヘラミガキ調整、内面をヘラケズリ調整の後横方向のヘラミガキ調整を施す。外底面には離れ砂が付着する。

白色土器（192）は削り出しの低い輪高台である。

東播系須恵器鉢（194）口縁端部を内傾させて外側を断面三角形状に肥厚させる。

白色土器（192）は削り出しの低い輪高台である。

東海系陶器鉢（202）は、内底面には重ね焼きの痕跡が残る。山茶椀（193）は南部系のものである。

輸入陶磁器の白磁皿（195）はIX類の口禿皿で、外底面の釉薬はかき取る。天目椀（196）は下地塗の後黒釉を施す。胎土は暗褐色で砂粒をやや多く含む。盤（197）は黄褐釉を施す。胎土中に長石粒を多く含む。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が944点、その他の口縁部破片が719点、底体部片が752点ある。この内A群が918点、京都産が26点である。A群には皿B・皿C・皿Dがある。ほとんどのA群の胎土は赤褐色を呈する。

皿B・Cの口径は8～9cm代と11cm代が中心だが、9・10cm代にも一定量の出土がある。口径による区別がやや不明確ではあるが、大皿と小皿の口径値が近接した結果であり、器形は明瞭に大小を作り分けている。大皿は平坦な底部と直線的な口縁部からなり、低い台形の器形になる。皿Cは口径が8cm代の小皿のみ出土する。京都産の「へそ皿」と比べると、器高が低い点・底部の押しあしが小さい点が見て取れる。

皿Bの型式はI・2が約73%を占め、特に大皿では85%と多数を占める。

7 SK 639（図75）

a 遺物概要

土師器皿・羽釜、国産陶器甕が出土した。破片総点数は190点。

土師器皿の出土比率は約99%と高比率である。遺物總量が少なく、遺構の形態や性格も他の土坑と異なり、単純な比較は出来ない。

土師器皿はほぼA群で構成され、加えて京都産の白色系の皿が少量出土する。A群には皿B（206～211）・皿C（203）がある。京都産の皿（204・205）には「へそ皿」と平底の小皿がある。

土師器羽釜（212）は大和H型で、鉢は短い断面台形のものである。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が120点、その他の口縁部破片が39点、底体部片が27点ある。このうち京都産のものが19点で、あとはA群である。A群には皿B・皿Cがあり、ほとんどの胎土は赤褐色を呈する。

皿B・Cの口径は8～9cm代と11cm代が中心である。皿Cは口径が8cm代の小皿のみ出土する。

S K 638とよく似た傾向を示しており、ほぼ同型式のものと考えられる。

8 SK 642 (図76・77)

a 遺物概要

土師器皿・高台付皿・羽釜、瓦質土器浅鉢・捕鉢・鉢類、山茶椀、国産陶器捕鉢・鉢・甕、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿、褐釉陶器壺他）が出土した。破片総点数は9,722点。

出土比率は、土師器皿が98%と高比率である。瓦質土器の比率は0.4%と低い。須恵器の出土比率が低下する一方、東海産の甕の率が高くなる。輸入陶磁器の比率は約0.16%で、青磁と白磁がほぼ同率で白磁の率がこの時期としては高い。

土師器皿は、A群（213～247）とB群（250～280）で構成され、京都産のもの（249）が少量加わる。A群は口径8cm代の小皿と、10cm代の大皿とからなり、小皿はすべて「へそ皿」である。胎土の色調は赤褐色で、いわゆる「赤土器」の典型例である。

B群皿は口径が7～16cm代まであり、種類が多い。胎土の色調はやや黄味を帯びた白色で、いわゆる「白土器」の典型例である。

256と257は白色系の色調をするものの、形態・調整手法が明らかにA群のものである。同様な例が他の資料にも確認できることから、A群土師器の生産者が意図的に白色に焼き上げたものと考えられる。一方で口径が同時期のA群皿と同じ9・10cm代のみしか出土してお

らず、A群皿の生産過程の製品を一部流用したものと想定できる。逆に、赤褐色に焼き上げたB群皿は現在確認していない。A群とB群の関係を知る上で興味深い事実である。

土師器羽釜は、大和H型（286）と大和H型（287）、直交する口縁でやや小型のもの（281）がある。286・287は体部をタタキ成形し外面には無文のタタキ板、内面には無文の当て具痕跡が残る。287の鉢は短く断面台形である。いずれも胎土は、浅黄色で精良である。281は体部外縁は未調整で、内面はナデ調整で部分的にハケメ調整がある。ややピンク味を帯びた白色の胎土である。

瓦質土器浅鉢（283）は内湾した口縁部で、内面と口縁端部外面に横方向のヘラミガキ調整をする。外面には菊花の大型單体スタンプ文を3つ一单位で施す。

山茶椀（285）は北部系のものである。内面は使用による摩減のため、非常に平滑である。

白磁碗（284）はIV類のもので、混入品か。

褐釉陶器壺（282）は外面に褐釉を施釉し、口縁端部の釉薬を搔き取る。口縁端部の一部には目跡が残る。胎土は灰色で、輸入陶磁器であるが、産地は不明。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が3,606点、その他の口縁部破片が3,816点、底体部片が2,142点である。A群が1,739点、B群が1,867点で、京都産が少量ある。

A群の皿の口径はグラフでは8～10cmまでが一つのまとまりになっているが、おおよそ8cm代の小皿と10cm代の大皿に明瞭に作り分けている。小皿はすべて「へそ皿」である。大皿は底部が狭くなる（底部径が縮小）とともに口縁部が長くなり、よりいつそう台形味を強く帯びた器形となる。また口縁端部のヨコナデ調整の幅も狭くなる。

B群の皿の口径は7～13cmまで万遍なく分布し、他の資料から見ても、7～16cmまで1cm単位で各口径が存在するようである。そのため、口径分布表に見られる口径の数値は、使用されたB群土師器の各口径ごとの多寡を示していることとなる。S K 642の場合は、口径7cm代と10cm代のものが最も使用されたものとなる。

9 SX 808 (図77・78)

a 遺物概要

土師器皿・羽釜、瓦質土器捕鉢・捏鉢・鉢類、国産陶器捕鉢・鉢・甕、輸入陶磁器（青磁碗、白磁碗・皿、青花碗・皿他）が出土した。破片総点数は1,640点。

土師器皿の出土比率が約45%と前段階に比して著し

く減少する。これに反して瓦質土器が比率を高め、約37%と増加している。国産陶器も信楽産陶器の出現によって比率を約5%に上げている。輸入陶磁器の比率は約1.3%で、この中では白磁の比率が高い。土師器は未だ過半数を占めるとはいえ、その優位性が大きく変質していることが見て取れる。

土師器皿は、A群(288~300)とC群(301~314)で構成される。

A群は口径が7~8cm代のもの他、20cm代の特大のものが1点ある。口縁部の強いヨコナデ調整によって、内面の底部と口縁部の境が沈線状に窪むものが多く、また底部もやや上げ底状になる。胎土の色調はにぶい黄橙色系で、赤褐色に焼き上がるものはない。

C群は口径が7~13cm代まで各種ある。胎土は灰白色系の色調で、砂分が少なく精良である。

323~325は土師器の蓋で、油煙墨製作時の採煤用の土器である。頂部に環状の取っ手があるが、欠損する。内面は密なヘラミガキ調整で、著しく煤が付着する。胎土は精良である。現在も油煙墨の採煙作業にはこの形態の土器が使用されており、現状では最古の類例の1つである。

土師器羽釜(316)は大和I型で、体部をタタキ成形し、外面上には無文のタタキ板、内面には無文の當て具痕跡が残る。(315)は大和H型であるが、この時期のものとしては珍しく混入品か。

瓦質土器鉢(327・328)は、縱方向のハケメ調整の後、口縁部外面に横方向のハケメ調整を施す。328の内面には10本一単位の瘤目がある。捏鉢(329)は、外表面が縱方向のハケメ調整、内面が横方向の幅広ヘラミガキを密に施す。風炉(326)は内面ナデ調整、外表面研磨を行う。内面には粘土接合痕が残る。

国産陶器には信楽産・備前産のものがある。319は信楽産の鉢鉢で、4本一單位の瘤目を有し内面下半は使用のため摩滅する。318は信楽産の壺で、肥厚するT字状口縁を持つ。年代的には古いものである。327は備前産の捏鉢で、体部外表面中央に粘土接合痕が残る。焼成は良好で、使用痕はほとんど見られない。

輸入陶磁器の青磁碗(320)は龍泉窯系のもので、ヘラ描きの細蓮弁を外側に描く。釉薬は厚く、貫入がある。青花碗(321)はE群、皿(322)はB群である。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が242点、その他の口縁部破片が246点、底体部片が240点ある。このうちA群が110点、C群が132点ある。

A群の皿は口径が7~8cm代のものが中心で、大皿と小皿の岐別はできない。

C群の皿はB群同様に、7~13cmまで1cmごとに各種の口径が存在している。S X 808では口径9cm代と12cm代の出土が多い。

10 SK 651 (図79)

a 遺物概要

土師器皿・羽釜、瓦質土器壺・鉢類、国産陶器椀・皿・国産磁器碗・皿が出土した。破片総点数は1,020点。

土器組成は土師器皿の出土比率が84.8%と同時期の他の遺構と比べ非常に高いが、出土遺構の特異性とも考えられる。国産磁器が出現はじめる時期である。

土師器皿はA群(330~335)が主体で、D群(336~339)が少量ある。

A群は口径が7~8cm代のもので、S X 808に比べ底部は平坦である。胎土の色調はやや橙色を帯びるものが多く、再び赤色を意図して焼き上げているようである。完形で出土するものが多い。

D群は口径が7~13cm代まで各種ある。胎土の色調は黄橙色系で、砂分を含まない精良な胎土である。

土師器羽釜(341)は、体部をタタキ成形するが、器壁は前代のものに比べ厚い。口径が大きくなり器高も縮小し、浅鍋化がすすむ。法量的に大和I型の最終末のもので、同形態・同法量の外型作りの炮烙が供伴する例がある。

瓦質土器壺(342)はいわゆる火消壺で、焼成は良好で種しがかかる。外底部付近に縱方向の板状工具のナデ調整痕が残る。内面は板状工具による横方向のナデ調整で、口縁付近はハケメ調整である。

国産磁器は肥前産のみで、丸碗(30)の他青磁染付の天目碗がある。

国産陶器は肥前産の椀のみである。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が120点、その他の口縁部破片が84点、底体部片が68点ある。A群が61点、D群が59点ある。

A群は口径が8cm代のもののみで、D群は7~13cm代まで各種あり、10cmと12cm代のものが多い。

11 SE 507 (図79)

a 遺物概要

土師器皿・炮烙、瓦質土器鉢類・火鉢類他、国産陶器椀・皿・摺鉢・甕他、国産磁器碗・皿他が出土した。破片総点数は3,993点。

出土比率は土師器が約58%と依然高く、土師器皿に

限っても約46%を占めている。残りの40%を瓦質土器と国産陶器が分け合う。陶器は信楽産、磁器は肥前産が主体である。

土師器皿はA(343)・D(346～362)・E(344・345・363～365)群で構成され、D群が主体となる。以下、江戸時代の土師器皿は、遺物整理時には型式の確定ができていなかったため、各群の出土点数・口径の分布は不明である。

A群は口径6～7cm代で、口径の縮小が進む一方、器高がやや高くなっている。胎土の色調は橙色系である。

D群は、口径が7・8・10・11・12cm代のものを確認している。胎土の色調は黄橙色系である。

E群は、口径が6～7・10・12cm代のものを確認している。いずれも底部には、掌の圧痕が規則的に連続してある。胎土の色調は黄橙色系である。

土師器泡壘(368・369)は、外型作りの底部に口縁部を作り付ける。口縁部と底部の接合方法には2種ある。底部の粘土円盤の端部を外反させその上に口縁部を接合するもの(A技法)と、底部の粘土円盤の内面端部の上に口縁部を接合し、その後接合部分の外面をヘラケズリ調整するもの(B技法)である。A技法は、口縁部と底部の境の突起部分または鉢の下面部分に、外型から外した痕跡が底部から連続してあり識別は容易である。またA技法では鉢を新たに貼り付ける必要がなく、B技法では新たに鉢を貼り付ける点で大いに異なる。

368は、A技法で鉢のない型式で、胎土の色調は橙色系である。369は、B技法で鉢のある型式で、胎土の色調は黄橙色系である。

370は土師器鉢で、平底で内湾した口縁部である。内外面を丁寧にヨコナデ調整し、底部は成形台から外したままの未調整である。胎土の色調は黄橙色系で、産地は不明である。内底面には煤が付着する。

国産磁器は肥前産のみである。366は、体部外面に草花文を描く丸碗である。

国産陶器には、肥前産・信楽産がある。367は肥前産のいわゆる「京焼風陶器」柄で、外面に山水文を描き高台内に印を押捺する。371は信楽産の捕鉢である。見込み部には格子状に捕目をいれる。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が1,332点、その他の口縁部破片が297点、底体部片が225点ある。D群を主とし、A群とE群が少量含まれるが、検討できるデータは限られる。

A群皿は口径6～7cm代のもののみ確認できる。

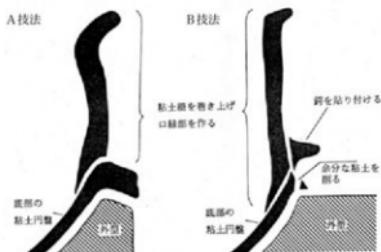


図52 土師器泡壘の製作技術模式図

D群の口径は、7～12cm代まで各種あるよう、7～8cm代のものが目立つ。E群については、数種類の口径が確認できるが詳細は不明である。

口径が7cm代のみのA群と、数種類の口径の皿を作りわけるD・E群が存在することは明らかである。

12 SK 656 (図80)

a 遺物概要

土師器皿・泡壘、瓦質土器鉢類・火鉢類他、国産陶器楕・皿・捕鉢・鍋他、国産磁器碗・皿他が出土した。破片総点数は11,087点。

出土比率は、土師器が約50%、瓦質土器が約4%と前代から減少する一方、国産陶器が合わせて約45%と大きく増加している。この時期としては土師器皿も多数出土しており、信楽産陶器と肥前産磁器の増加がそれを上回ったことが要因である。

土師器皿はA群(372～375)がわずかながら出土し、D群(382～394)とE群(376～380)が主体となる。

A群は、口径が7cm前後である。器高が高く深みのある皿形のもの他、扁平で板状の器形(372・373)がある。後者は口縁部のヨコナデ調整も施されておらず、胎土も砂礫の多い粗い作りである。他現場でもしばしば出土しており、何らかの用途で作り分けられているようである。胎土は橙色系の色調である。

D群は、口径7・9・10・11・12cm代のものを確認している。口径が7cm前後のもの出土が多く見られる。内面を「の」字状にヨコナデ調整するものの比率が高い。

E群は、口径7・10・11cm代のものを確認している。胎土は橙色系の色調である。

381は外型作りと考えられる土師器皿で、1点出土している。底面は未調整である。

土師器高台付皿(395・396)は手づくね成形で、内外面はすべてユビオサエ調整で、口縁端部や脚部の裾すら一切ヨコナデ調整しない。胎土に砂が多く、A群の土

師器皿に特徴が似る。

土師器炮烙は、外型作りの底部に口縁部を作り付ける。いずれも A 技法で、鈎を作るもの（398）と、鈎のないもの（397）とがある。橙色系の胎土である。

国産磁器は肥前産のもののみである。丸碗が多く、広東碗は出土していない。しかしながら丸碗には素描きの壽文（401）・梵字文などがあり、広東碗の出現時期の頃と考えられる。使用者の焼き物の嗜好を反映しているのであろうか。碗の 402・403 は、断面台形のどっしりとした高台で、疊付部は露胎である。403 の外面には神輿が描かれ、対面には宋の詩人杜甫の三体詩「華清宮」が書かれる。

国産陶器は信楽産のものが多数を占め、多くの器種をまかなっている。399 は鉄釉の仏飯具で、外底部には「安永貳癸巳/七月廿八日/イ奉徳/胤清无悦/尊前」と墨書きされる。安永 2 年（1773）の有紀年銘資料として貴重である。405 は信楽産の擂鉢で、見込み部には放射状の描目がある。404 は堺産の擂鉢で、見込み部にはウールマーク状の描目がある。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が 2,785 点、その他の口縁部破片が 920 点、底体部片が 767 点である。D 群を主とし、A 群と E 群が少量含まれるが、S E 507 同様検討できるデータは限られる。

A 群皿は口径 6 ~ 7 cm 代のもののみ確認できる。

D 群の口径は、7 ~ 12 cm 代まで各種あるようで、7 ~ 8 cm 代のものが目立つ。E 群も數種類の口径が確認できているが詳細は不明である。

S E 507 と同様に、口径が 7 cm 代のみの A 群と、數種類の口径の皿を作りわける D・E 群が存在することは明らかなるようである。

13 SK 662 (図 81・82)

a 遺物概要

土師器皿・炮烙・舌出し・瓦質土器鉢類・火鉢類他、国産陶器椀・皿・擂鉢・鍋他、国産磁器碗・皿他が出土した。破片総点数は 9,783 点。

出土比率は、土師器が約 20% に激減し、瓦質土器のもの約 5.8% と低い。これに対し国産陶器が約 54%、国産磁器が約 20% と、国産陶磁器が土師器に代わって土器組成の主体となる。特に施釉陶器の増加が目立ち、その多くは京焼系の信楽産陶器である。

土師器皿は F 群（406 ~ 426）が新たに出現する。D 群（427 ~ 432）と E 群（433 ~ 437）も引き続き存在する。各群の正確な比率は不明だが、F 群の比率が他

の群に比べ高いようである。

F 群は、口径が 6・7・12 cm 代のものがあり、6 cm 代のものが多い。胎土はすべて橙色系の色調である。

D 群は、口径 6 cm 代のもののみ確認している。いずれも内面を「の」字状にヨコナデ調整する。胎土は灰白色系の色調である。

E 群は、口径 6 cm と 11 cm 代のものを確認している。胎土は灰白色系の色調である。

土師器高台付皿は、手づくね成形で、内外面はすべてユビオサエ調整で、口縁端部や脚部の裾すら一切ヨコナデ調整しない。439 は、脚部内部に粘土板を重ね合わせた痕跡が残る。440 には脚部内部に「春日社」の墨書きがある。胎土の特徴が A 群に似るもの（438・440）と D 群に似るもの（439）とがある。

446 は土師器で、浅鉢の口縁部の一端を舌状にのばした麻浸しと呼ばれる器形である。本来は麻糸を紡ぐ際に使用される土器であるが、茶器の灰器・花活けに転用される例がある。なお 446 は舌部を欠損する。手づくね成形で、内面と口縁部をヨコナデ調整する。外面は未調整であるが表面が平滑で、皿状の外型を用いてるように見られる。

土師器炮烙は、外型作りの底部に口縁部を作り付ける。すべて A 技法で、鈎または鈎風のものを作るもの（447・500・501）と、鈎のないもの（448・449）とがある。500 と 501 の鈎の外側はヘラケズリ調整される。447 ~ 449 は橙色系の胎土で、500・501 は黄橙または灰白色系の胎土である。

国産磁器には肥前産と瀬戸産が多数を占めるが、三田産や产地不明のものもある。504・506 が肥前産、505・507 が瀬戸美濃産である。505 は同じ絵柄のものが数個体ある。

国産陶器は信楽産のものが多数を占め、そのほとんどは京・信楽系と称される製品である。442 ~ 445・441・510 は灰釉の灯明皿と灯明受けとカンテラ。511 は鉄釉の土瓶、512 は灰釉の行平鍋、513 は鉄釉の三耳壺でいわゆる腰白茶壺、515 は高台付の擂鉢で、見込み部には放射状の描目がある。外底面に「六つ口」と墨書きする。

508 と 509 は奈良の赤崩産の皿で、外面の高台付近くに瓢箪で囲われた「赤ハタ」の刻印がある。509 は赤褐色の胎土で、暗緑色の灰釉を掛け内面には鉄絵で草花文を描く。508 は黄橙色系の胎土で、灰オリーブ色の灰釉を掛け内面には白泥で文様を描く。この他「赤ハタ」の刻印があるものが 1 点、刻印はないが 508 と同一のも

表2 遺構出土土器組成表1

種類	產地等	器種	SE501		SK613		SK618		SK635		SK636		SK638		SK639	
			点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)
土師器	土師器	皿	6	60.00	7166	95.78	15361	96.80	2305	71.92	12714	86.20	2415	91.44	187	98.42
		高台付皿				1	0.01							1	0.04	
		耳皿				7	0.04									
		回転台皿														
		碗				1	0.01	1	0.03	3	0.02					
		鉢									29	0.20				
		香炉				7	0.04									
		甕				1	0.01									
		羽釜	32	0.43	53	0.33	242	7.55	37	0.25	44	1.67	1	0.53		
		鍋	2	0.03												
		不明				1	0.01			1	0.01					
		小計	6	60.00	7200	96.23	15470	97.24	2548	79.50	12784	86.67	2460	93.14	188	98.95
頭底器	頭底器	鉢				2	0.01	28	0.87	7	0.05	5	0.19			
		甕						15	0.47				1	0.04		
		器種不明			1	0.01					30	0.20	1	0.04		
		产地不明				3	0.02	8	0.25							
		小計			1	0.01	5	0.03	51	1.59	37	0.25	7	0.27		
黑色土器	黑色土器	B類碗	4	40.00												
		小計	4	40.00												
瓦器	瓦器	碗	217	2.90	305	1.92	545	17.00	1840	12.48	100	3.75				
		皿	46	0.61	33	0.21	6	0.19	29	0.20	3	0.11				
		小碗			1	0.01						1	0.04			
		小計	263	3.51	339	2.14	531	17.19	1869	12.68	104	3.90				
瓦質土器	瓦質土器	鉢					7	0.22	21	0.14	11	0.42				
		甕						1	0.03							
		不明			1	0.01										
		小計			1	0.01	8	0.25	21	0.14	11	0.42				
白色土器	白色土器	皿			1	0.01	5	0.03								
		碗						2	0.06				1	0.04		
		高杯	2	0.03	1	0.01										
		小計	3	0.04	6	0.04	2	0.06					1	0.04		
灰釉陶器	灰釉陶器	壺			1	0.01										
		碗			1	0.01										
		小計			2	0.01										
山茶園	山茶園	小計			1	0.01							2	0.07		
圓底陶器	圓底陶器	鉢類					1	0.03	1	0.01	8	0.30				
		甕類					34	1.06	14	0.09	15	0.57	1	0.53		
		壺類							2	0.01	1	0.04	1	0.53		
		小計					35	1.09	17	0.12	24	0.91	2	1.05		
		施釉陶器														
輸入 陶磁器	輸入 陶磁器	他						1	0.01							
		小計							1	0.01						
		白磁			2	0.01	3	0.09	6	0.04						
		青磁					1	0.03	3	0.02	1	0.04				
		合子										2	0.08			
		白磁	14	0.19	42	0.26	3	0.09	6	0.04	13	0.49				
		青磁	1	0.01	39	0.25	1	0.03	1	0.01	6	0.23				
		小計											3	0.11		
		陶器	15	0.20	82	0.52	6	0.19	9	0.06	24	0.91	1	0.04		
		碗											2	0.08		
		小計											2	0.08		
		他											1	0.01		
		小計											5	0.19		
		小計			15	0.20	84	0.53	10	0.31	20	0.14	32	1.21		
		合計			10	100.00	7482	100.00	15870	100.00	3205	100.00	14749	100.00	2641	100.00
													190	100.00		

表3 遺構出土土器組成表2

種類	產地等	器種	SK642		SX808		SK651		SE507		SK656		SK662	
			点数	比率(%)										
土師器		皿	9564	98.37	728	44.39	865	84.80	1854	46.43	4472	40.34	1521	15.55
		高台付皿	3	0.03			1	0.10	4	0.10	6	0.05	3	0.03
		羽釜・鍋	71	0.73	189	11.52	36	3.53	157	3.93	108	0.97	85	0.87
		炻器							262	6.56	749	6.76	350	3.58
		鉢類									114	1.03	7	0.07
		盤類									141	1.27	2	0.02
		他			8	0.49	1	0.10	5	0.13	16	0.14	8	0.08
		不明								17	0.43	2	0.02	
須恵器		小計	9638	99.14	925	56.40	903	88.53	2299	57.58	5608	50.59	1976	20.20
		鉢	5	0.05										
		甕	1	0.01										
		小計	6	0.06										
瓦器		陶	32	0.33										
		皿	3	0.03										
		他	1	0.01										
		小計	4	0.01										
瓦質土器		埴鉢・呪鉢	1	0.01	142	8.66			50	1.25	1	0.01	1	0.01
		鉢類	9	0.09	452	27.56	22	2.16	541	13.55	416	3.75	318	3.25
		浅鉢	4	0.04									25	0.26
		盤類											200	2.04
		他	3	0.03	8	0.49	13	1.27	18	0.45	26	0.23	4	0.04
		不明	22	0.23	7	0.43	1	0.10	1	0.03	36	0.32	15	0.15
		小計	39	0.40	609	37.13	36	3.53	610	15.28	479	4.32	563	5.76
		山茶柄	1	0.01										
燒結陶器		碗類	1	0.01	2	0.12								
		皿類	2	0.02										
		鉢類	1	0.01	34	2.07	4	0.39	45	1.13	129	1.16	99	1.01
		甕類	17	0.17	47	2.87	3	0.29	104	2.60	181	1.63	111	1.13
		他			1	0.06					2	0.02	3	0.03
		小計	21	0.22	84	5.12	7	0.69	149	3.73	312	2.81	213	2.18
		甌類					20	1.96	176	4.41	462	4.17	483	4.94
		皿類					5	0.49	53	1.33	74	0.67	177	1.81
圓底陶器		鉢類					16	1.57	199	4.98	583	5.26	452	4.62
		壺・瓶・瓶類					3	0.29	69	1.73	618	5.57	1404	14.35
		水注類									303	2.73	848	8.67
		鍋笠類					1	0.10	6	0.15	270	2.44	1172	11.98
		盞類					1	0.10	1	0.03	119	1.07	471	4.81
		他							1	0.03	11	0.10	35	0.36
		小計			46	4.51	505	12.65	2440	22.01	5042	51.54		
		小計	21	0.22	84	5.12	53	5.20	654	16.38	2752	24.82	5255	53.72
圓底鋼器		甌類					20	1.96	347	8.69	1778	16.04	1324	13.54
		皿類					29	0.73	138	1.24	177	1.81		
		鉢類			1	0.10	25	0.63	78	0.70	216	2.21		
		壺・瓶・瓶類					13	0.33	102	0.92	63	0.64		
		蓋類					3	0.08	92	0.83	157	1.60		
		水注類					5	0.13	12	0.11	17	0.17		
		他							4	0.04	3	0.03		
		小計			21	2.06	422	10.57	2204	19.88	1957	20.01		
輸入陶器		青磁	2	0.02			3	0.29	3	0.08	3	0.03	8	0.08
		皿			1	0.06								
		他	3	0.03							3	0.03		
		小計	5	0.05	1	0.06	3	0.29	3	0.08	6	0.05	8	0.08
		白磁	2	0.02	5	0.30	1	0.10	3	0.08	14	0.13	16	0.16
		皿	4	0.04	5	0.30	2	0.20	1	0.03	2	0.02	1	0.01
		他	2	0.02	4	0.24	1	0.10	1	0.03	8	0.07	2	0.02
		小計	8	0.08	14	0.85	4	0.39	5	0.13	24	0.22	19	0.19
青白磁		甌	1	0.01										
		皿			2	0.12					3	0.03	4	0.04
		他			3	0.18					8	0.07		
		小計			6	0.37					11	0.10	4	0.04
		陶器			2	0.02					2	0.02		
		甌			1	0.06								
		小計			2	0.02					2	0.02		
		小計	16	0.16	22	1.34	7	0.69	8	0.20	43	0.39	31	0.32
合計			9722	100.00	1640	100.00	1020	100.00	3993	100.00	11087	100.00	9783	100.00

のが1点ある。さらに508と似た胎土の製品が数多くあり、無刻印の赤膚産陶器が他にもあることが考えられる。514は堺産の捕鉢で、見込み部にはウールマーク状の捕目がある。502は北九州上野産の壺で、小倉名物の三官飴の容器である。1個体のみ出土した。

503は青花鉢で、古い型式で伝世品か。

b 土師器皿の組成内訳および口径分布

出土土師器皿は有効口縁部破片数が741点、その他の口縁部破片が466点、底体部片314を数える。D・E・F群から構成されるが、正確な比率は不明。概観すると、F群が主流を占めるようである。

F群の口径は6・7・12cm代が確認できるが、6cm代を主に生産しているようである。

D・E群は、口径6cmと11cm代のものを確認しているが、前代のように多様な口径が存在するかは不明。ただD群の口径は6cm代が多く、これ以上の口径はE群が占めており、D・E群間に作り分けがあるようにも見られる。いずれにしろ、江戸時代後半の報告資料は少なく、今後の課題である。

(中島・佐藤)

C 出土土器の時期的変遷

これら報告した13遺構の出土土器の組成を棒グラフ化したのが下図である。

土師器は、中世を通じて9割ほど占めており、江戸時代のSE507の頃から構成比を減少させてゆく。これは一見土師器の減少のように見られるが、江戸時代の

遺構からの土師器の出土量は約2,000～5,600点あり、中世の遺構と比べても遜色はない量である。土師器の比重の低下はむしろ、国産陶器の増加による出土量全体の増加が原因と考えられよう。しかし一方で、一万点を超すような土師器の出土がなくなつておらず、土師器の大量消費という行為も失われていったことが想定できる。その時期は、むしろ中世の後半のSK624の頃を最後とするようである。

(中島)

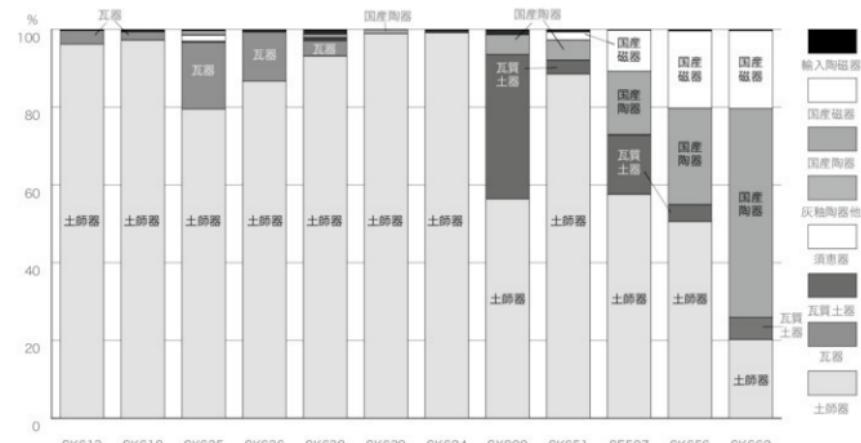


図53 HJ第559次調査 遺構別出土土器組成

表4 SK 613 土師器型別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	小皿	大皿	合計
ⅢA			13	49	381	35	12	1	1			490	2	492
I - 1			6	25	150	51	23	8	23	41	76	255	148	403
I - 2			6	12	133	27	15	4	28	29	193	90	283	
I - 3a					10		1	1	2		1	11	4	15
I - 3b											0	0	0	
I - 3c											0	0	0	無鉛硬片
I - 4			3	12	111	22	23	19	40	80	122	171	261	432 口縁
小計	0	0	15	49	404	100	62	32	93	150	228	630	503	1133 2412
ⅢC												0	0	0 体部
ⅢD					1	7	2	8	3			18	3	21 3108
ⅢE												0	0	0 合計
合計			28	99	792	137	82	36	94	150	228	1138	508	1646 7166

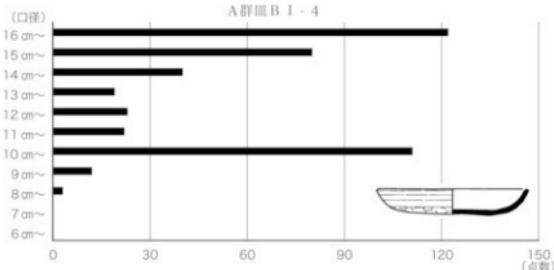
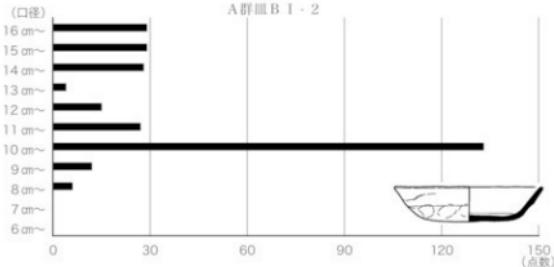
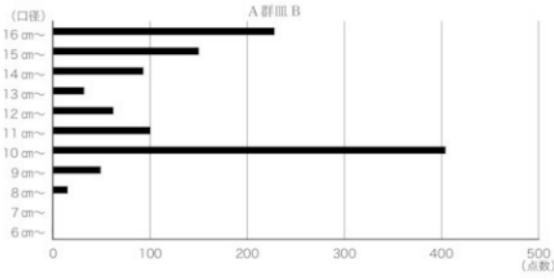


図54 SK 613 土師器型別口径分布

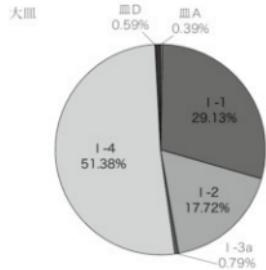
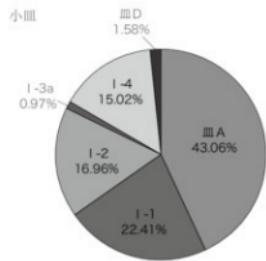
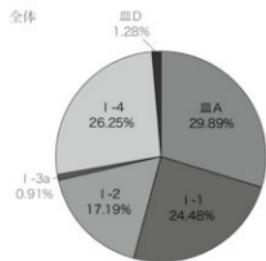


図55 SK 613 土師器型別出土比率

表5 SK 618 土師器型式別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	小皿	大皿	合計	
ⅢA				17	43	141	24	3				228	0	228	
I - 1				37	89	486	111	35	47	73	94	54	758	268	1026
I - 2				48	98	403	95	68	47	104	133	57	712	341	1053
I - 3a					1	5	4	1		1			11	1	12
I - 3b													0	0	0
I - 3c													0	0	0
I - 4				22	82	704	187	65	95	144	282	107	1060	628	1688
小計	0	0	107	270	1598	397	169	189	322	509	218	2541	1238	3779	5381
ⅢB													0	0	0
ⅢC													0	0	0
ⅢD													13	1	14
ⅢE													0	0	0
合計	0	0	124	313	1743	426	176	190	322	509	218	2782	1239	4021	15361

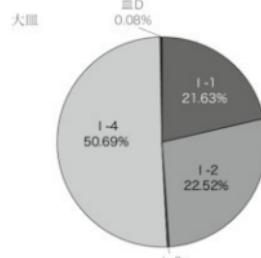
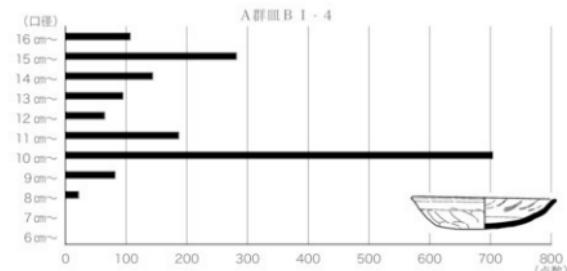
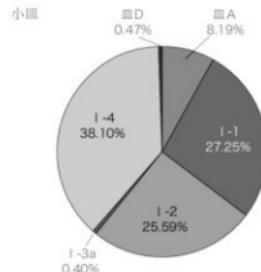
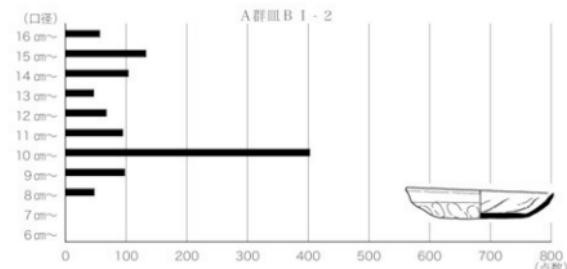
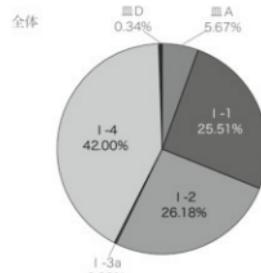
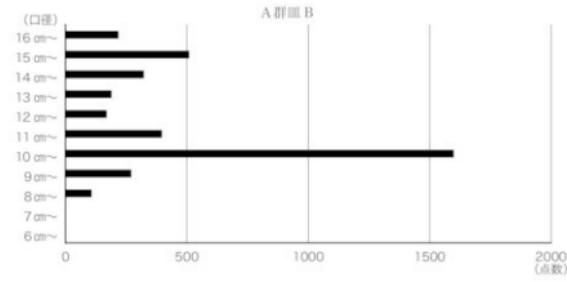


図56 SK 618 土師器型式別口径分布

図57 SK 618 土師器型式別出土比率

表6 SK 635 土師器型別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	小皿	大皿	合計	
■A			1		2							3	0	3	
I-1			4	2	3	2						11	3	14	
I-2			26	169	69	23	21	98	18	5	1	287	143	430	
I-3a								5				0	5	5	
■B			1	3	1	1	4	4				6	8	14	
I-3b			13	105	29	8	25	118	25	1	1	155	170	325 無鉢碗片数	
I-3c												0	0	0 口縁	
I-4												0	0	0	
小計	0	0	44	279	102	34	50	225	44	8	2	459	329	788 585	
■C						16		1				17	0	17	
■D			1	1								2	0	2 910	
■E												0	0	0 合計	
合計			1	46	295	104	35	50	225	44	8	2	481	329	810 2305

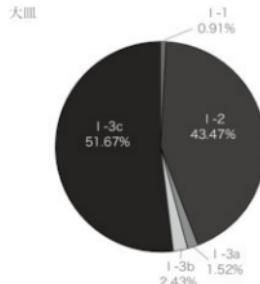
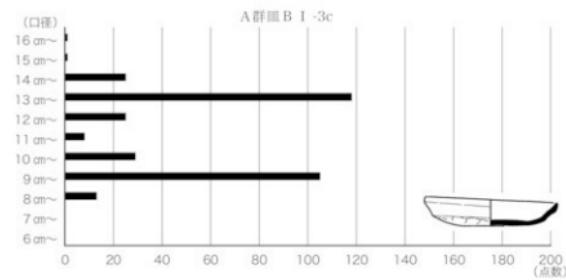
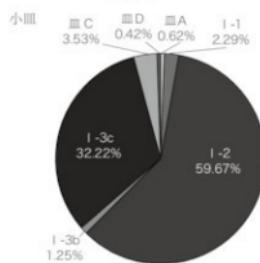
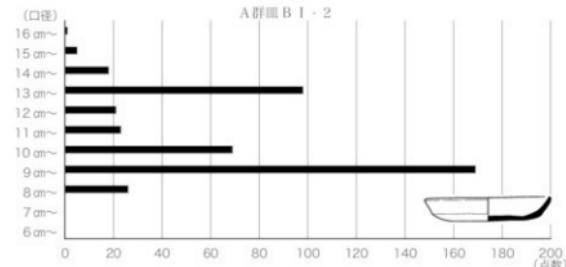
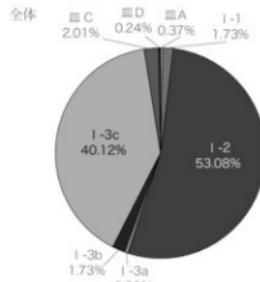
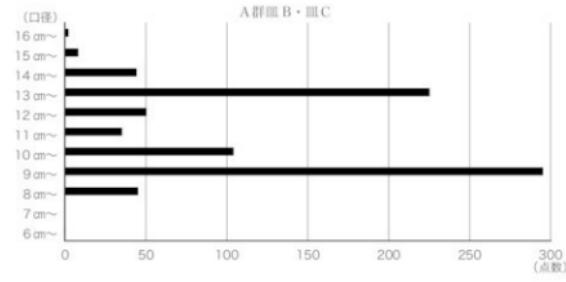


図58 SK 635 土師器型別口径分布

図59 SK 635 土師器型式別出土比率

表7 SK 636 土師器型式別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	小皿	大皿	合計	
Ⅲ A					1	1	1					2	1	3	
				217	406	177	95	52	183	35	1	895	271	1166	
				388	907	316	125	136	250	72	12	1736	470	2206	
						11	1					11	1	12	
												13	20	33	
Ⅲ B				6	5	2	6	12	2						
				61	255	78	38	100	192	30	11	432	333	765	
												0	0	0	
												3087	1095	4182	
	小計	0	0	666	1574	576	271	295	637	139	24	0	3869	12714	
Ⅲ C					19	2	1		2			22	2	24	
Ⅲ D				8	2							10	0	10	
Ⅲ E						4	57	204	387	96	24	1	61	773	
京都産							1	3				1	3	4	
合計				674	1595	583	331	503	1026	235	48	1	3183	1813	4996

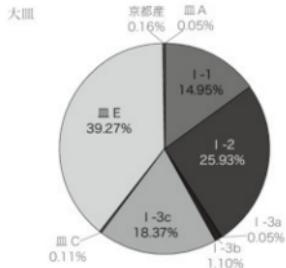
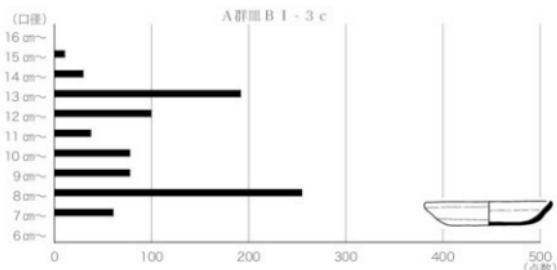
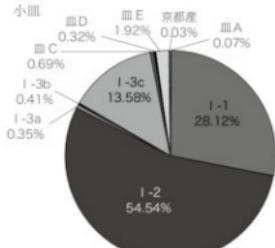
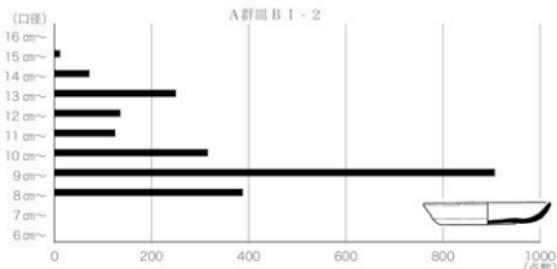
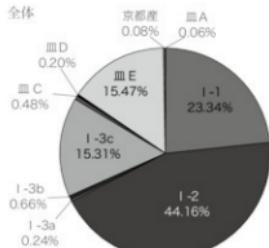
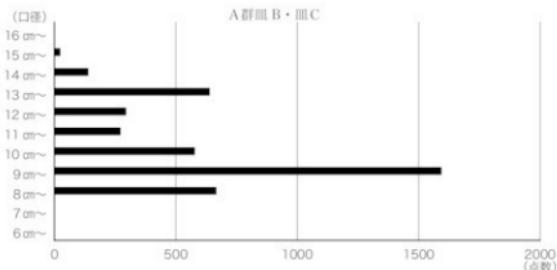


図60 SK 636 土師器型式別口径分布

図61 SK 636 土師器型式別出土地率

表8 SK 638 土師器型別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	小皿	大皿	合計
■A				1	1	1						3	0	3
I - 1			8	18	6	15	2		1	1		26	25	51
I - 2			117	126	122	234	49	30	8			243	443	686
I - 3a												0	0	0
■B			1		1	1	1	2				1	5	6
I - 3b			3	18	10	9	3	8	4			21	34	55
I - 3c												0	0	0
I - 4												0	0	0
小計	0	0	129	162	139	259	55	40	13	1	0	291	507	798
■C				95	20							115	0	115
■D				2								2	0	2
■E												0	0	0
京都産			9	2		1	14					11	15	26
合計	0	9	228	183	141	274	55	40	13	1	0	420	524	944
														2415

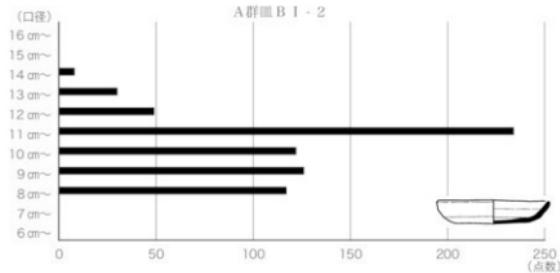
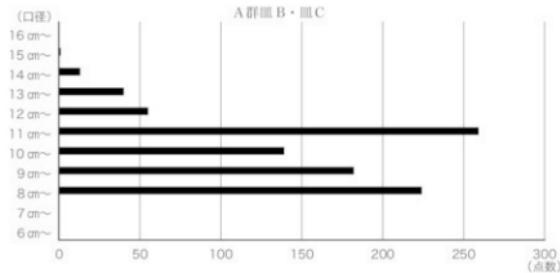


図62 SK 638 土師器型別口径分布

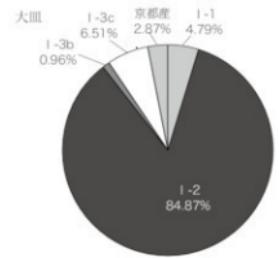
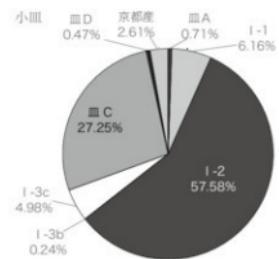
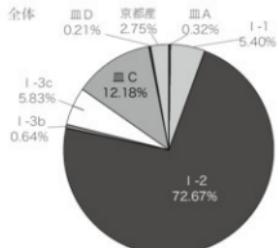


図63 SK 638 土師器型式別出土比率

表9 SK 639 土師器型式別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	小皿	大皿	合計
皿A					2	1	9					0	0	0
I - 1												2	10	12
I - 2				3	11	7	55					14	62	76
I - 3a												0	0	0
皿B												0	0	0
I - 3b												0	0	0
I - 3c												0	0	0
I - 4												0	0	0
小計	0	0	3	13	8	64	0	0	0	0	0	16	72	88
無効破片数												13	0	13
皿C				11	2							0	0	0
皿D												0	0	0
皿E												0	0	0
京都産	15					4						15	4	19
合計	15	0	14	15	8	68	0	0	0	0	0	44	76	120
														187

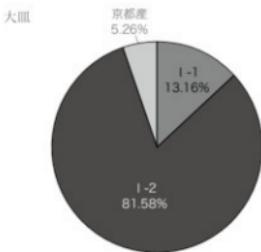
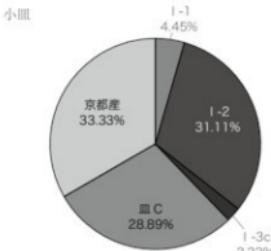
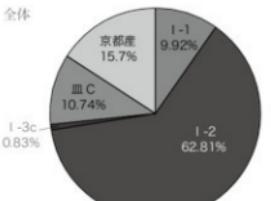
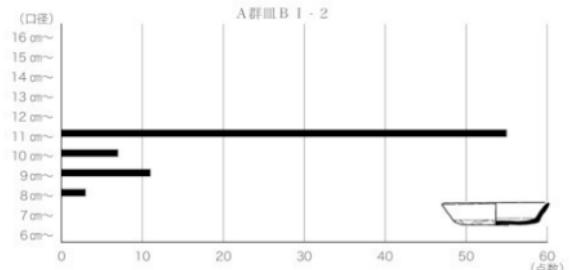
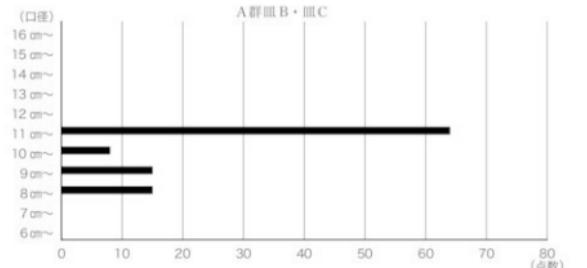


表 10 SK 642 土師器型式別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計	無効破片数
A群	1	251	451	456	462	94	20	1				3	1739 口縁
B群	11	322	129	280	428	225	198	225	30	3	13	1864	3816
京都産	2										1		3 体部
合計	14	573	580	736	890	319	218	226	30	4	16	3606	2142
												合計	9564

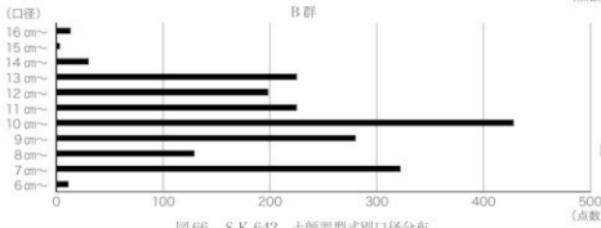
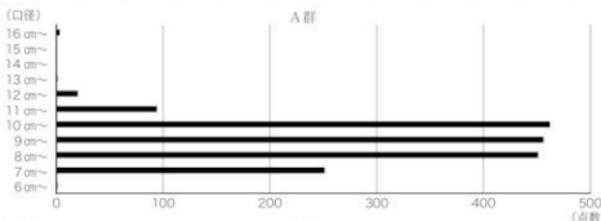


図 66 SK 642 土師器型式別口径分布

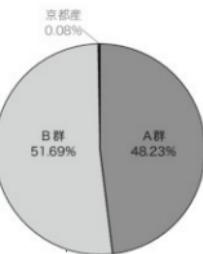


図 67 SK 642 土師器型式別出土比率

表 11 SX 808 土師器型式別出土表

分類	6cm~	7cm~	8cm~	9cm~	10cm~	11cm~	12cm~	13cm~	14cm~	15cm~	16cm~	合計	無効破片数
A群	3	64	37	5								1	110 口縁
C群	1	6	9	39	14	23	32	7	1			132	246
合計	4	70	46	44	14	23	32	7	1	0	1	242	体部
												240	合計
												728	

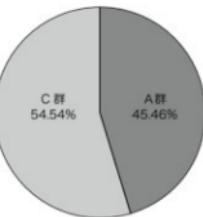
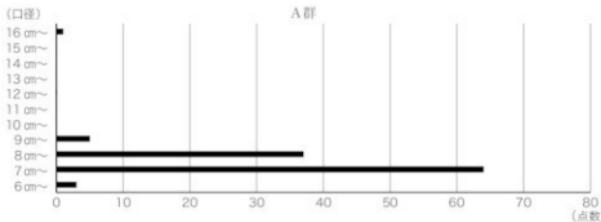


図 69 SX 808 土師器型式別出土比率

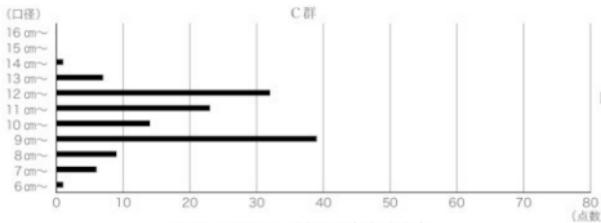


図 68 SX 808 土師器型式別口径分布

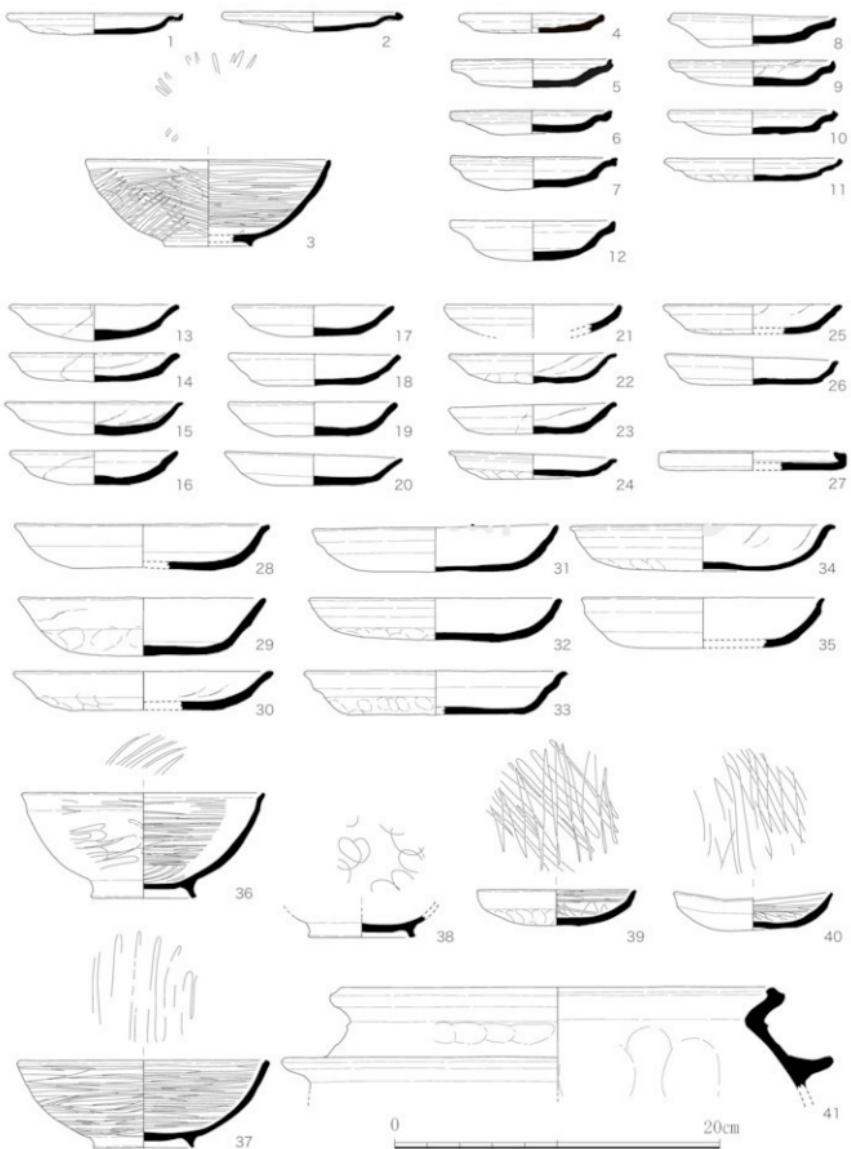


図70 SE 501 (1~3)・SK 613 (4~41) 出土土器 (S=1/3)

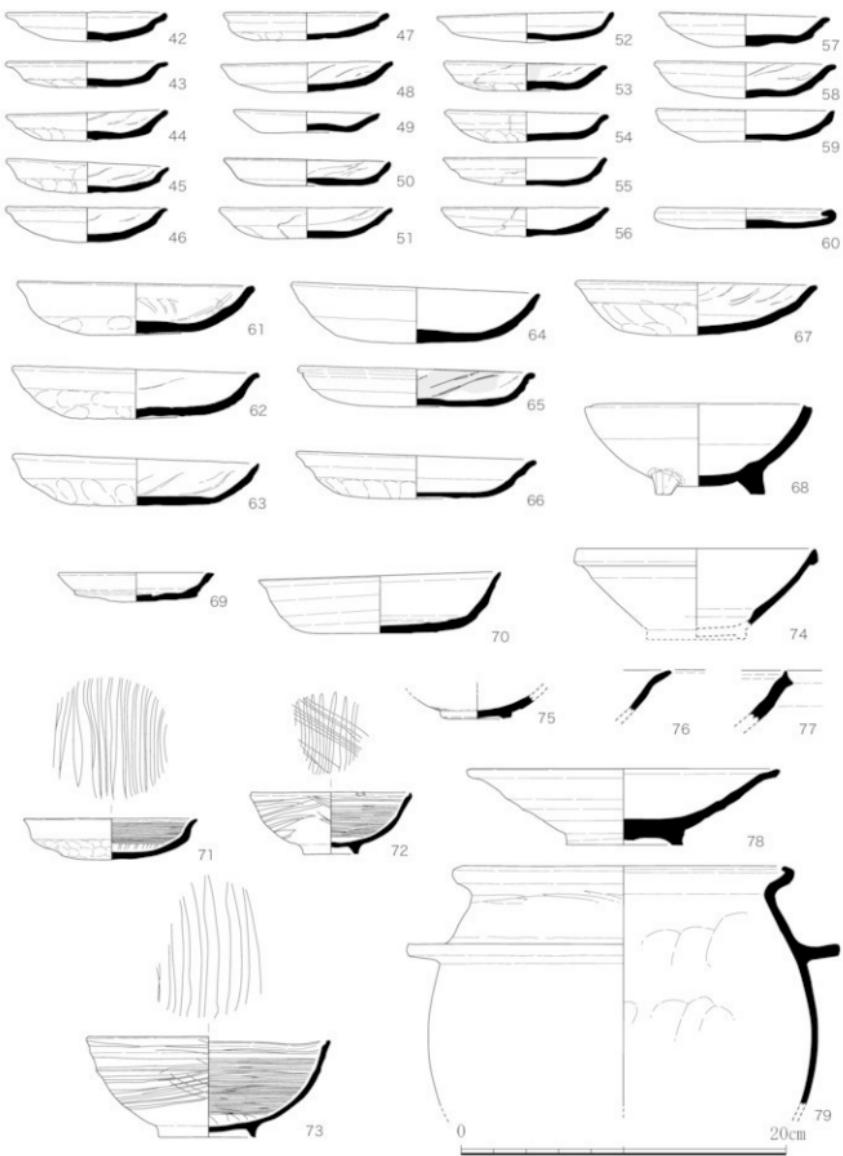


図71 SK 618 (42~79) 出土土器 (S = 1/3)

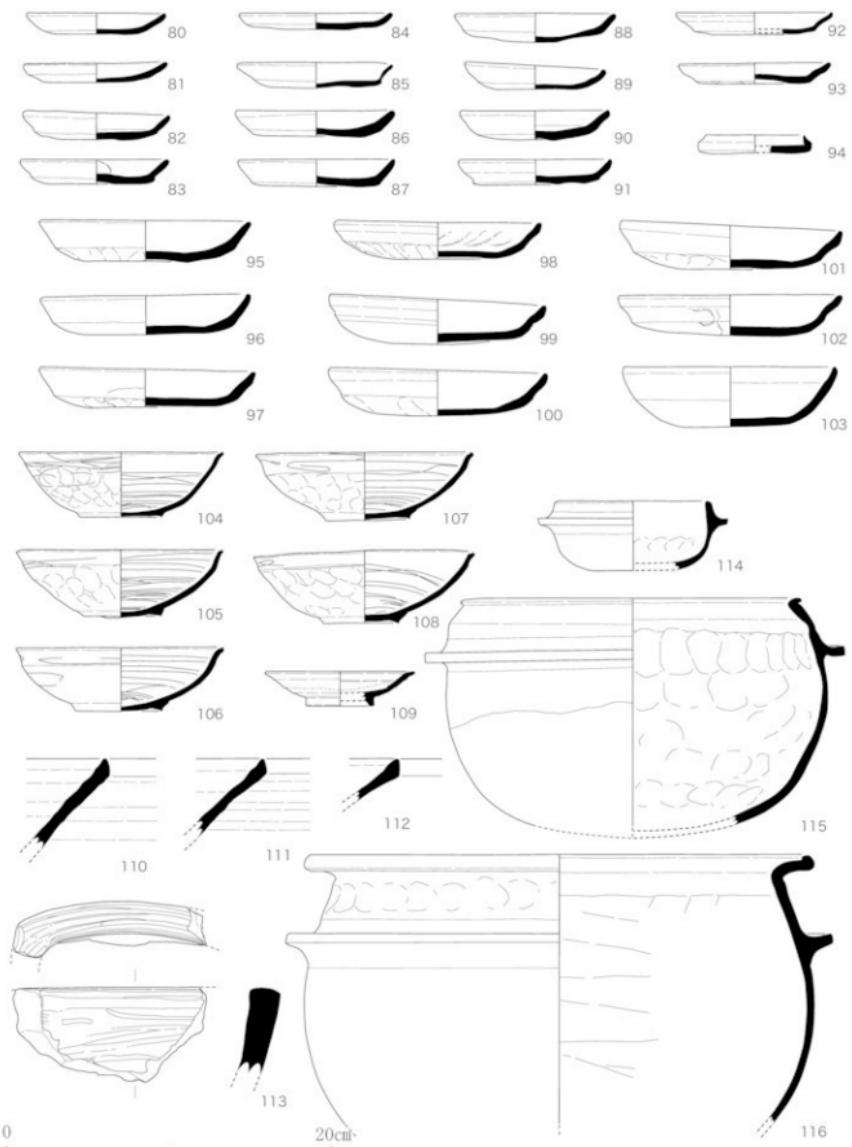


図 72 SK 635 (80 ~ 116) 出土土器 (S = 1 / 3)

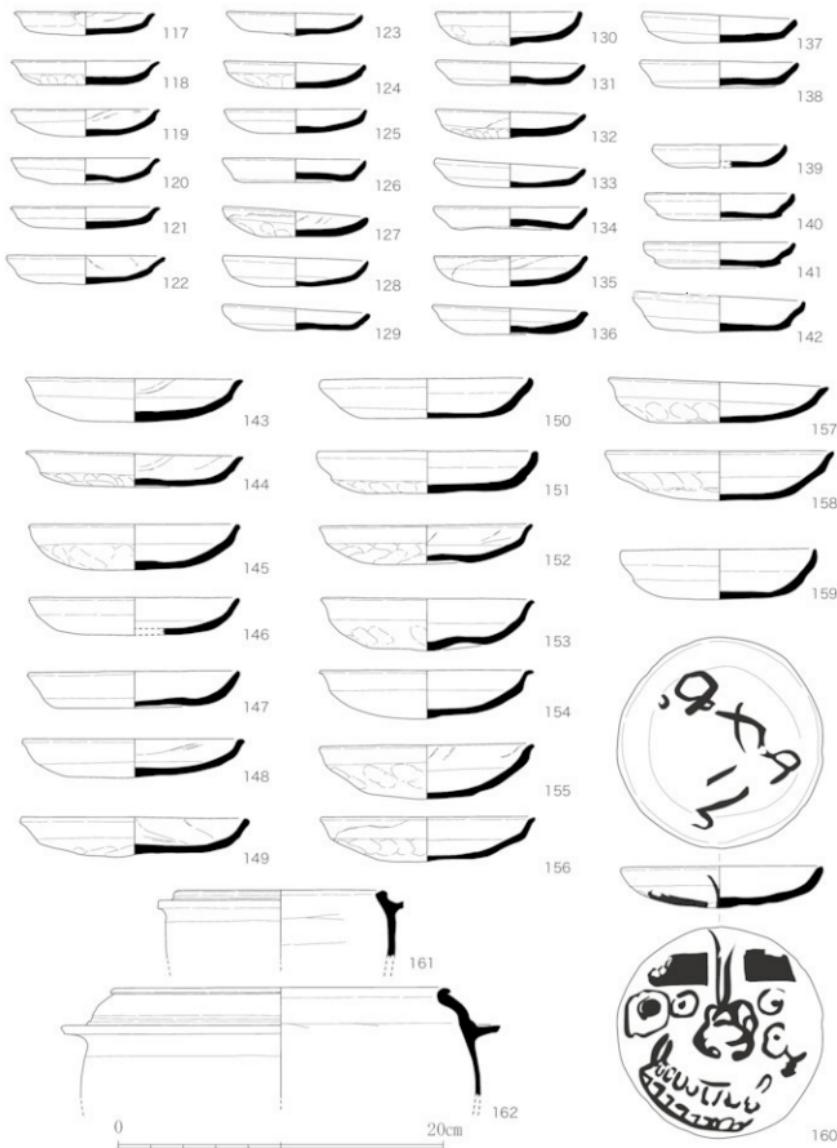


図73 SK 636 (117~162) 出土土器 (S=1/3)

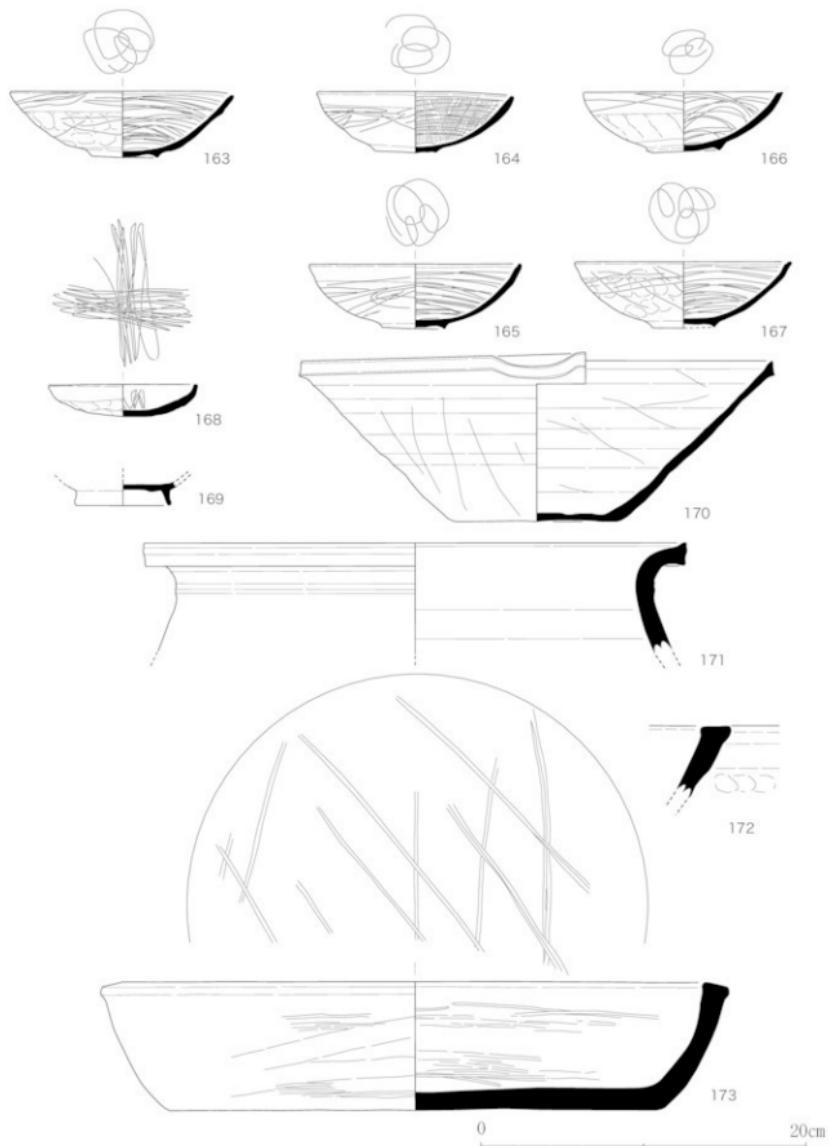


図74 SK 636 (163~173) 出土土器 (S = 1/3・173のみ S = 1/4)

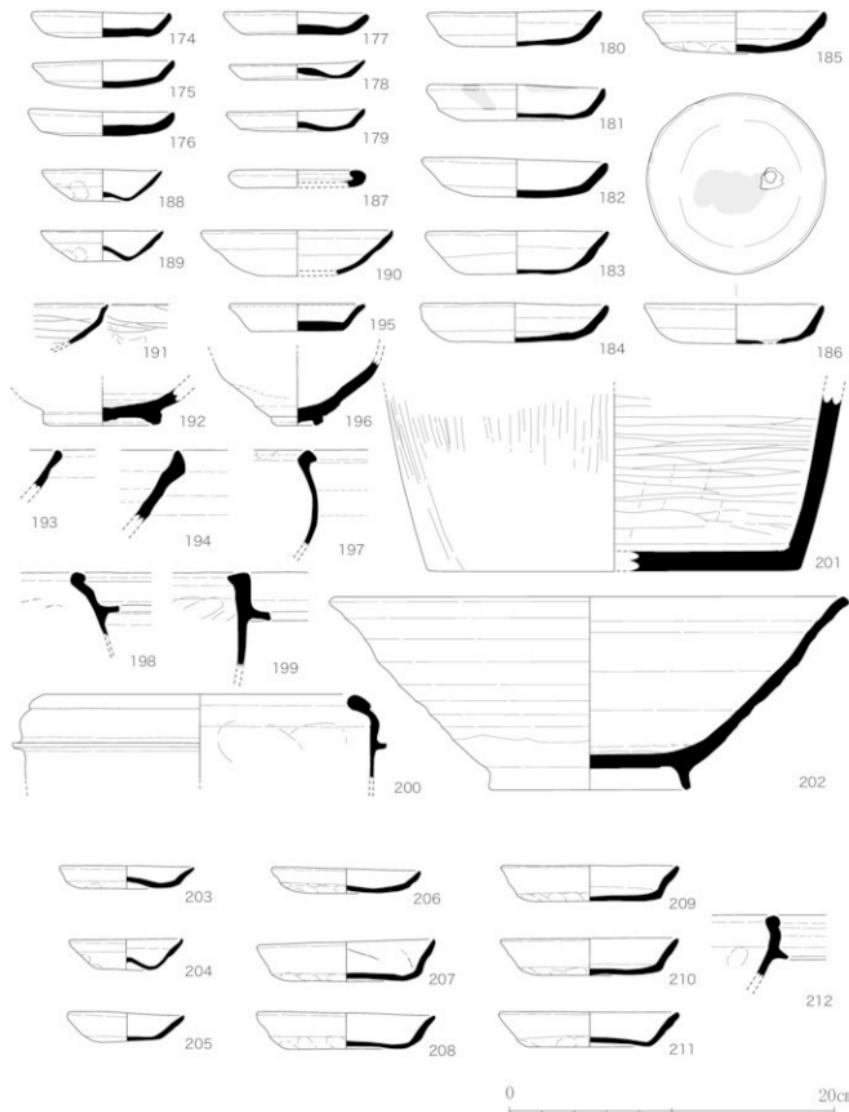


図75 SK 638 (174~202)・SK 639 (203~212) 出土土器 (S = 1/3)

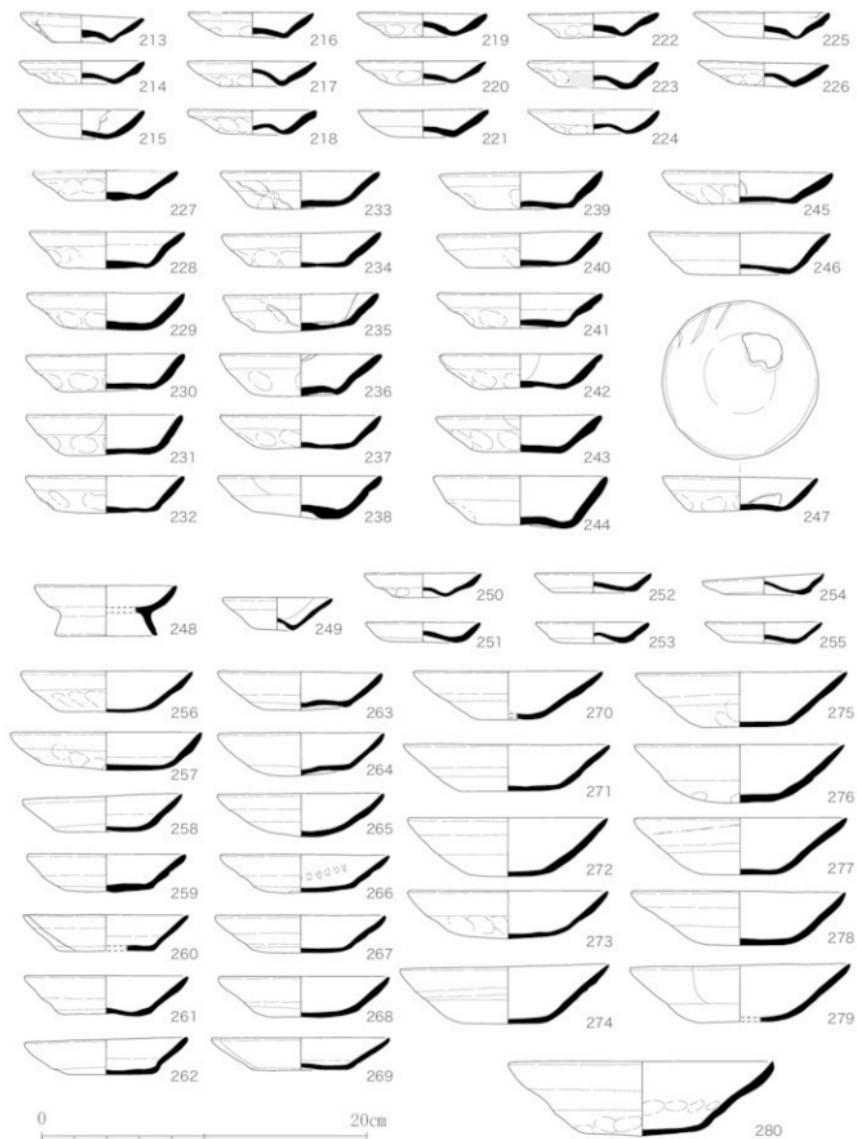


図 76 SK 642 (213~280) 出土土器 (S = 1/3)

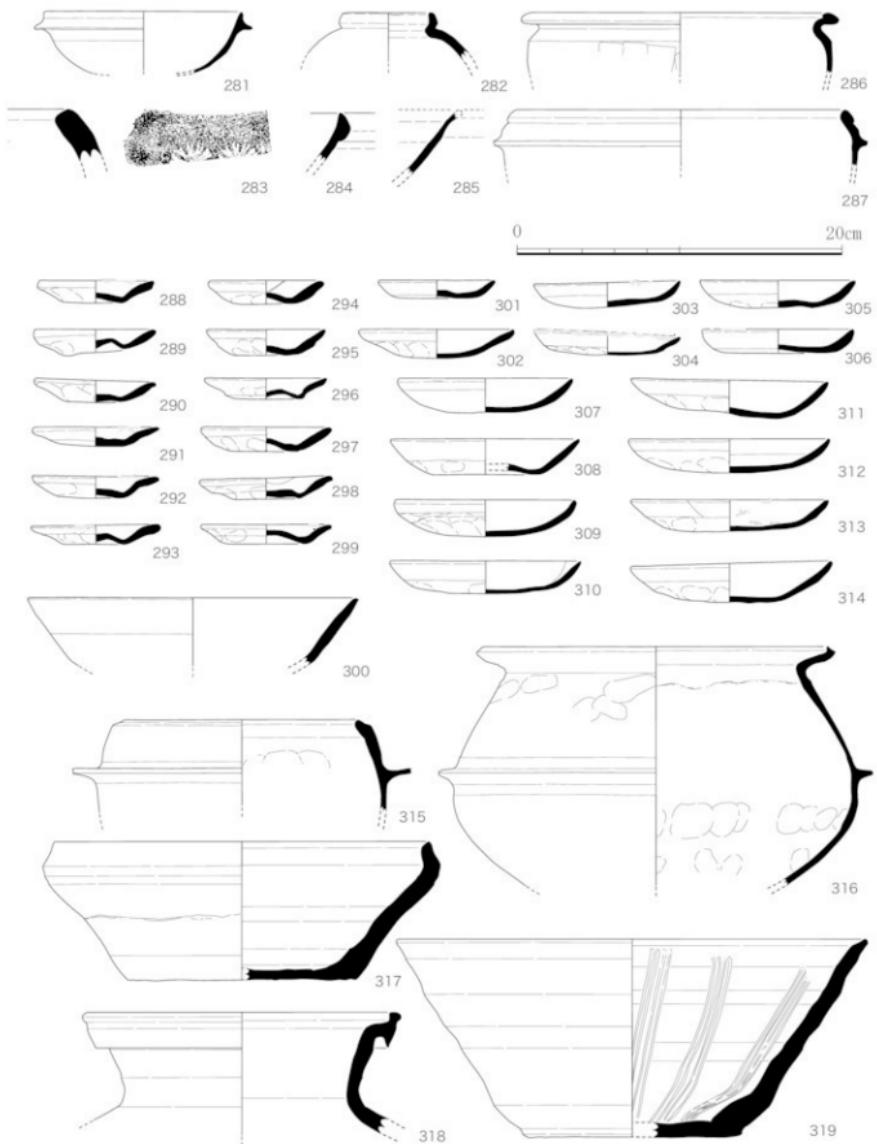


図77 SK 642 (281~287)・SX 808 (288~319) 出土土器 (S = 1 / 3)

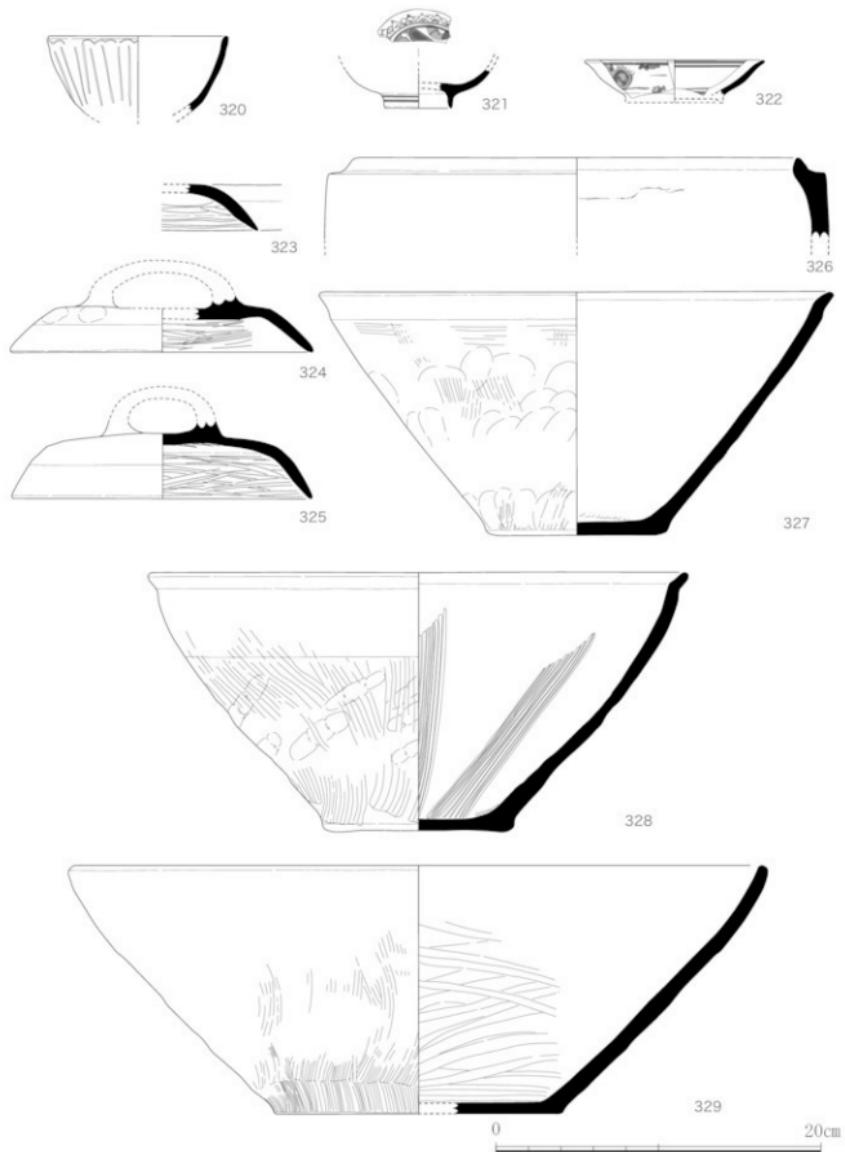


図78 SX 808 (320～329) 出土土器 (S = 1/3)

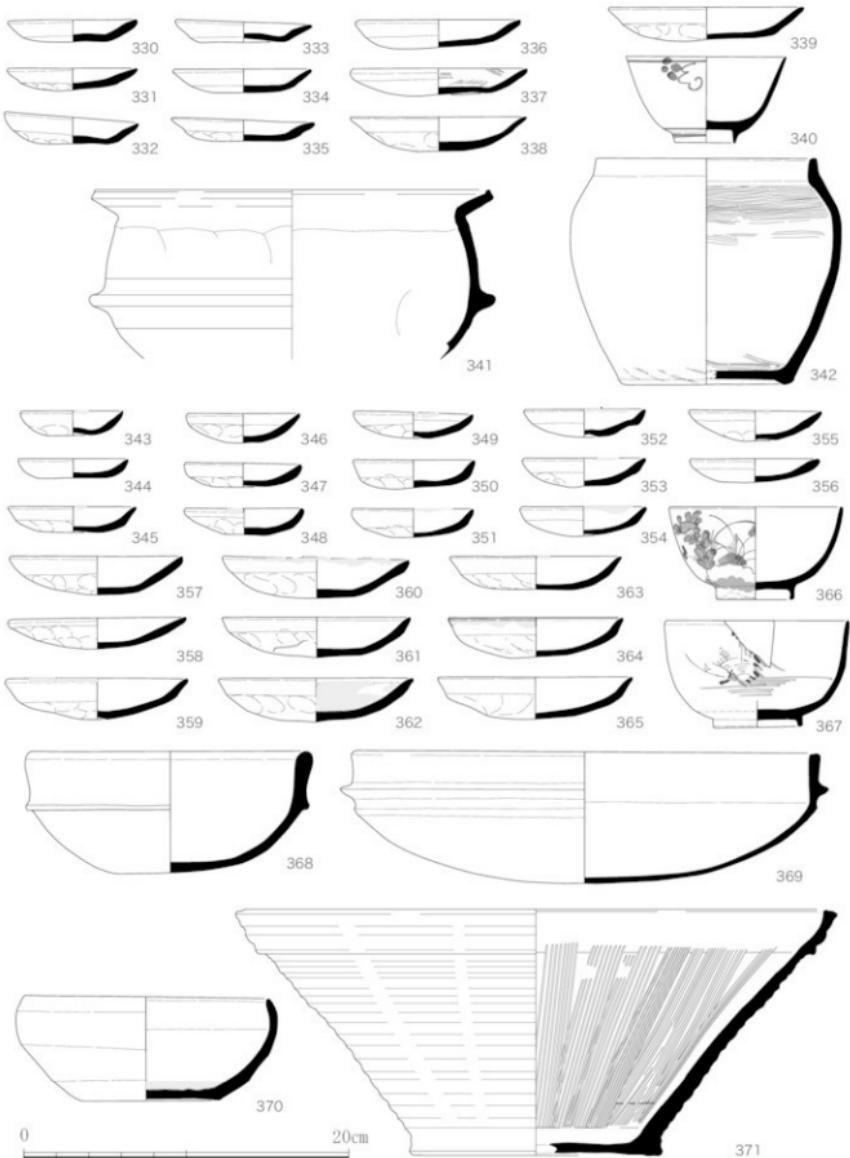


図79 SK 651 (330~342)・SE 507 (343~371) 出土土器 (S = 1/3)

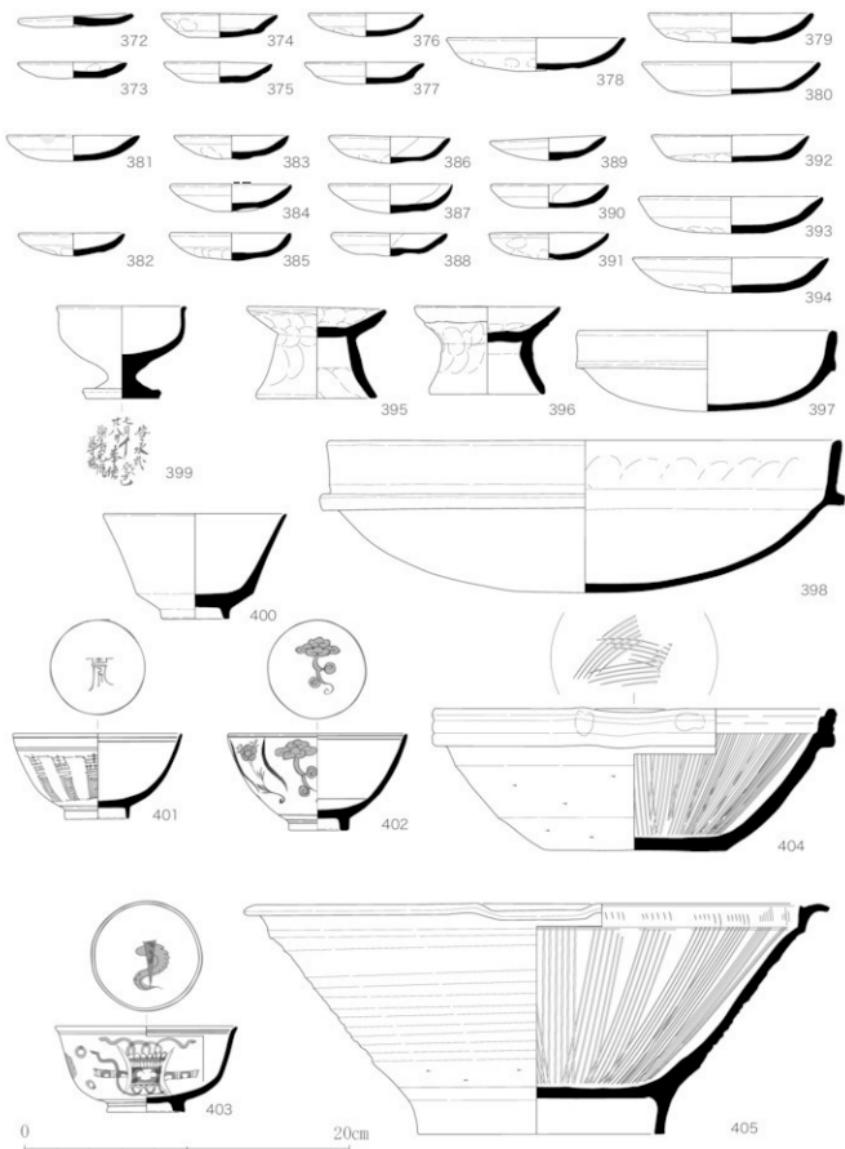


図80 SK 656 (372~405) 出土土器 (S = 1/3)

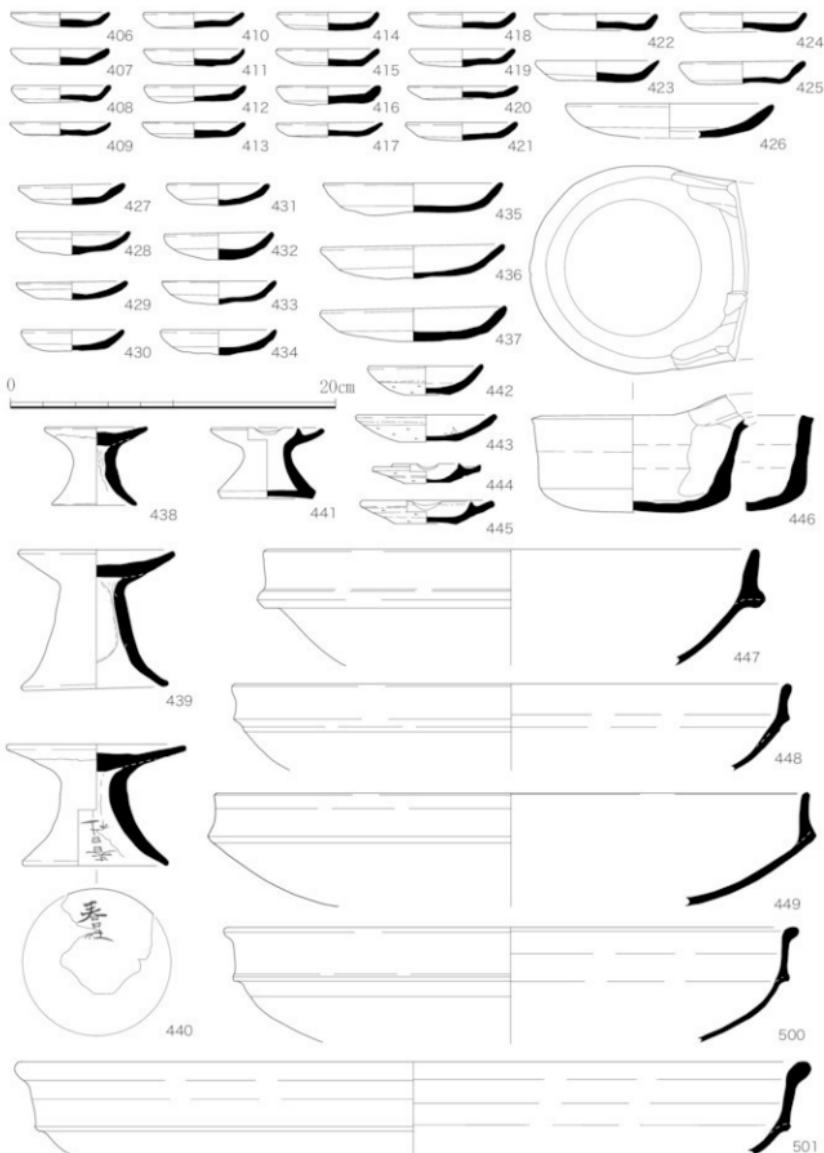


図81 SK 662 (406~501) 出土土器 (S = 1/3)

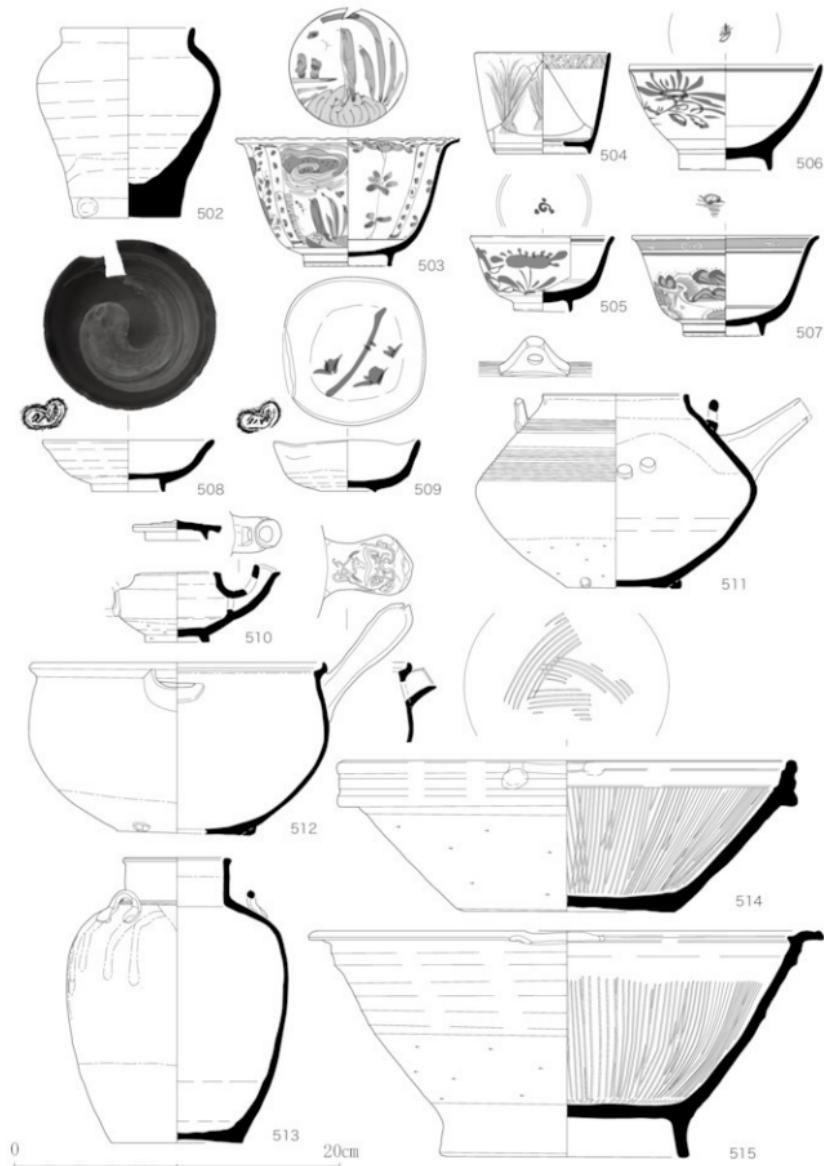


図 82 SK 662 (502~515) 出土土器 ($S = 1/3$)

D 出出土器観察表

表 12 S E 501 出出土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm			残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径				
1	SE501	土師器	■	10.9	1.3		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/1 灰白	角閃石
2	SE501	土師器	■	11.2	1.3		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	5Y7/1 灰白	
3	SE501	黒色土器	椀	(15.1)	5.4		70	内外面ミガキ(外面8分割ミガキ)	1.5/0 黒	B類

表 13 S K 613 出出土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm			残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径				
4	SK613	土師器	■	(9.0)	1.2		40	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■A I
5	SK613	土師器	■	10.0	1.8		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、■A I
6	SK613	土師器	■	10.0	1.6		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■A I 角閃石
7	SK613	土師器	■	10.3	2.1		80	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5YR8/3 淡黄	A群、■A I
8	SK613	土師器	■	10.4	2.0		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、■A I
9	SK613	土師器	■	10.4	1.6		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■A I 内面工具痕
10	SK613	土師器	■	10.5	1.5		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■A I
11	SK613	土師器	■	(11.0)	1.4		20	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■A I
12	SK613	土師器	■	10.2	2.5		60	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、■A II
13	SK613	土師器	■	10.4	2.2		100	内面・口縁部外面ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、■B I - 1 角閃石
14	SK613	土師器	■	10.5	1.8		90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■B I - 1、内面 工具痕、口縁部保付着
15	SK613	土師器	■	11.0	2.0		100	口縁部外面ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、■B I - 1 内面工具痕
16	SK613	土師器	■	10.4	2.1		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5YR8/1 灰白	A群、■B I - 2
17	SK613	土師器	■	10.0	1.9		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黃橙	A群、■B I - 2
18	SK613	土師器	■	10.6	2.0		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群、■B I - 2
19	SK613	土師器	■	10.6	2.1		90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/2 灰白	A群、■B I - 2
20	SK613	土師器	■	11.0	2.1		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、■B I - 2
21	SK613	土師器	■	(11.0)	1.8		20	口縁部外面ヨコナデ、外側ナデ	10YR8/4 浅黃橙	A群、■B I - 3
22	SK613	土師器	■	10.4	1.9		90	口縁部外面ヨコナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、■B I - 4 内面工具痕
23	SK613	土師器	■	10.4	2.0		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黃橙	A群、■B I - 4 内面工具痕
24	SK613	土師器	■	10.4	1.7		100	口縁部外面ヨコナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、■B I - 4
25	SK613	土師器	■	(11.0)	1.8		25	口縁部外面ヨコナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、■B I - 4 内面工具痕
26	SK613	土師器	■	10.9	1.9		80	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、■B I - 4
27	SK613	土師器	■	(11.6)	1.2		20	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR6/6 橙	A群、■D
28	SK613	土師器	■	15.7	3.8		70	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、■B I - 1
29	SK613	土師器	■	15.4	3.6		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	2.5Y8/2 灰白	A群、■B I - 2
30	SK613	土師器	■	(16.0)	2.4		20	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、■B I - 2 内面工具痕
31	SK613	土師器	■	15.2	2.9		75	口縁部外面ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、■B I - 4 口縁部保付着

出土土器観察表

番号	出土遺物	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
32	SK613	土師器	皿	15.6	2.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 4
33	SK613	土師器	皿	(16.2)	2.7			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	A群、皿B I - 4
34	SK613	土師器	皿	16.4	2.8			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 4、内面工具痕、口縁部焼付着
35	SK613	土師器	皿	(15.0)	3.1			20	口縁部内外面ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 4
36	SK613	瓦器	碗	(15.0)	6.5	(6.6)		20	内面ラミガキ、外面オサエ後へラミガキ、見込み平行線状暗文	N5/0 灰	大和I - D
37	SK613	瓦器	碗	(15.6)	5.4	6.2		20	内外面ラミガキ、見込み平行線状暗文	N4/0 灰	大和I - C 内面被熱
38	SK613	瓦器	碗		(1.5)	(6.3)		20	見込みらせん状暗文	N5/0 灰	大和II A
39	SK613	瓦器	皿	10.0	2.3			100	口縁部外面ナデ、内面ラミガキ、外面オサエ	N4/0 灰	
40	SK613	瓦器	皿	10.0	2.4			100	口縁部外面ナデ、内面ラミガキ	N5/0 灰	
41	SK613	土師器	羽釜	(26.6)	(6.4)	(34.0)	10	内外面無文のタタキ成形、口縁部と跨ヨコナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	大和B型、跨部以下焼付着	

表 14 S K 618 出土土器観察表

番号	出土遺物	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
42	SK618	土師器	皿	10.0	1.8			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群、皿A I
43	SK618	土師器	皿	10.0	1.6			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿A I
44	SK618	土師器	皿	10.0	1.9			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 1 内面工具痕
45	SK618	土師器	皿	10.0	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿B I - 1 内面工具痕
46	SK618	土師器	皿	10.0	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿B I - 1 内面工具痕
47	SK618	土師器	皿	10.2	1.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 1
48	SK618	土師器	皿	10.6	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 1 内面工具痕
49	SK618	土師器	皿	9.0	1.4			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
50	SK618	土師器	皿	10.3	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
51	SK618	土師器	皿	10.7	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/3 灰黃	A群、皿B I - 2 内面工具痕
52	SK618	土師器	皿	10.9	1.9			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
53	SK618	土師器	皿	10.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿B I - 4 内面工具痕、内面付着
54	SK618	土師器	皿	10.1	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 4
55	SK618	土師器	皿	10.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿B I - 4
56	SK618	土師器	皿	10.3	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 4 内面被熱
57	SK618	土師器	皿	10.5	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿B I - 4
58	SK618	土師器	皿	11.2	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 4 内面工具痕
59	SK618	土師器	皿	11.0	2.3			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿B I - 3
60	SK618	土師器	皿	11.2	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿D
61	SK618	土師器	皿	14.6	3.3			95	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿B I - 1 内面工具痕
62	SK618	土師器	皿	15.2	2.2			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 1
63	SK618	土師器	皿	15.1	3.2			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
64	SK618	土師器	皿	15.3	2.8			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿B I - 2
65	SK618	土師器	皿	14.6	3.0			80	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿B I - 4 内面工具痕、内外面付着

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
66	SK618	土師器	皿	14.8	2.9			80	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 4
67	SK618	土師器	皿	14.9	3.6			95	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 4 内面工具痕
68	SK618	土師器	鉢	14.0	5.6			25	口縁部内外面コヨナデ、内面板ナデ、脚部貼り付けケズリによる取取り	10YR7/2 にぶい黄橙	三星
69	SK618	土師器	皿	9.6	1.8			100	外面部底部同軸カラキ後オサエ、内面面クロコナデ	2.5Y7/1 灰白	回転台成形
70	SK618	土師器	皿	14.8	3.8			80	外面部底部ヘラタリ、内外面クロコナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	回転台成形、底部板目圧痕
71	SK618	瓦器	皿	10.7	2.5			80	内面ヘラミガキ、底部外面オサエ、見込み平行線状暗文	N3/0 暗灰	
72	SK618	瓦器	椀	10.0	3.8	3.4		60	外面部ヘラミガキ、見込み格子状暗文	N3/0 暗灰	
73	SK618	瓦器	椀	15.0	6.2	6.0		60	外面部ヘラミガキ、見込み平行線状暗文	N3/0 暗灰	大和I - D
74	SK618	白磁	碗	(15.0)	(4.8)			15	内外面施釉	7.5Y7/2 灰白	IV類
75	SK618	白磁	碗		(2.0)	4.3		60	外面部飛び出、削出高台、内外面施釉	10Y7/1 灰白	II類
76	SK618	山茶碗	椀		(2.6)			10	外外面クロコナデ	2.5Y8/2 灰白	
77	SK618	須恵器 (束縛症)	鉢		(3.2)			10	外外面クロコナデ	5Y5/1 灰	
78	SK618	白色土器	皿	(19.2)	4.7	6.2		40	外外面クロコナデ、削出高台、體付に押切切痕	2.5Y8/2 灰白	
79	SK618	土師器	羽釜	(21.0)	(14.8)		(26.6)	40	体部無文のタキ成形 口縁部・脚コナデ、	10YR7/3 にぶい黄橙	大和B型、外側保付着、角閃石

表15 S K 635出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
80	SK635	土師器	皿	8.6	1.3			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR7/3 浅黄	A群、皿B I - 2
81	SK635	土師器	皿	8.9	1.3			90	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
82	SK635	土師器	皿	9.1	1.8			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
83	SK635	土師器	皿	9.2	1.5			85	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2 角閃石
84	SK635	土師器	皿	9.4	1.1			90	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2
85	SK635	土師器	皿	9.5	1.6			60	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
86	SK635	土師器	皿	9.8	1.5			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2
87	SK635	土師器	皿	9.7	1.6			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2
88	SK635	土師器	皿	10.0	2.8			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
89	SK635	土師器	皿	8.7	1.7			90	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 3 c
90	SK635	土師器	皿	9.2	1.9			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 角閃石	A群、皿B I - 3 c
91	SK635	土師器	皿	9.5	1.6			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 3 c 角閃石
92	SK635	土師器	皿	(9.6)	1.4			25	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 3 c
93	SK635	土師器	皿	9.4	1.8			75	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿C a
94	SK635	土師器	皿	(7.0)	1.2			25	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	A群、皿D
95	SK635	土師器	皿	13.0	2.6			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2
96	SK635	土師器	皿	13.0	2.5			90	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2
97	SK635	土師器	皿	13.0	2.5			85	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2 内外面 被熱
98	SK635	土師器	皿	12.8	2.4			100	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 3 c 内面工具痕
99	SK635	土師器	皿	13.4	3.1			80	口縁部内外面コヨナデ、内面ナデ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 3 c

出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考	
				口径	器高	底径	脚部 最大径					
100	SK635	土師器	皿	13.5	3.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 3 c	
101	SK635	土師器	皿	13.7	3.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A群、皿B I - 3 c	
102	SK635	土師器	皿	13.9	2.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 3 c	
103	SK635	土師器	皿	13.2	2.8			75	口縁部内外面ヨコナデ、内外面ナデ	7.5YR6/6 橙	A群、皿B II	
104	SK635	瓦盤	椀	(12.6)	4.0	(5.0)		40	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ	N5/0 灰	皿-B	
105	SK635	瓦盤	椀	12.8	4.2	4.8		95	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外周オサエ	N6/0 灰	皿-B	
106	SK635	瓦盤	椀	13.3	3.9	(5.0)		75	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ後ヘラミガキ	N5/0 灰	皿-B	
107	SK635	瓦盤	椀	13.4	4.2	(5.2)		80	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、内周オサエ後ヘラミガキ	N6/0 灰	皿-B	
108	SK635	瓦盤	椀	13.6	4.5	4.6		80	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ	N5/0 灰	皿-B	
109	SK635	白磁	皿	(9.2)	2.1	(4.2)		25	内外面施釉、見込み蛇の目軸剥ぎ、削出台	2.5GY8/1 灰白		
110	SK635	須恵器 (束縛産)	鉢			(5.6)			口縁 部片	内外面クロナデ	5Y5/1 灰	
111	SK635	須恵器 (束縛産)	鉢			(5.0)			口縁 部片	内外面クロナデ	N5/0 灰	
112	SK635	須恵器 (束縛産)	鉢			(2.6)			口縁 部片	内外面クロナデ	N4/0 灰	
113	SK635	瓦盤	鉢 (方形)						口縁 部片	内外面ヘラミガキ	5YR7/6 橙	
114	SK635	土師器	羽釜	(9.6)	4.3	(11.8)		30	口縁内外面ヨコナデ、内面オサエ後ナデ、外面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	鰐部以下煤付着	
115	SK635	土師器	羽釜	21.0	(14.0)	(25.6)		70	口縁部・鰐ヨコナデ、体部文のみタタキ成形後	2.5YR8/2 灰白	大和日型、鰐部以下煤付着	
116	SK635	土師器	羽釜	(30.6)	(16.6)	(33.6)		10	口縁部・鰐ヨコナデ、体部文のみタタキ成形後 内面板状工具ナデ	10YR8/4 浅黄橙	大和B型	

表 16 S K 636 出上土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
117	SK636	土師器	皿	8.8	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	A群、皿B I - 1 外面工具痕
118	SK636	土師器	皿	9.2	1.5			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 1
119	SK636	土師器	皿	9.2	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿B I - 1 内面工具痕
120	SK636	土師器	皿	9.2	1.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR8/3 淡黄	A群、皿B I - 1
121	SK636	土師器	皿	9.2	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 1
122	SK636	土師器	皿	9.8	1.8			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 1 内面工具痕
123	SK636	土師器	皿	8.4	1.5			75	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2
124	SK636	土師器	皿	8.8	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
125	SK636	土師器	皿	8.8	1.5			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	A群、皿B I - 2
126	SK636	土師器	皿	8.9	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y5/1 灰黃	A群、皿B I - 2
127	SK636	土師器	皿	9.0	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
128	SK636	土師器	皿	9.0	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	2.5Y8/1 灰白	A群、皿B I - 2
129	SK636	土師器	皿	9.1	1.6			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
130	SK636	土師器	皿	9.1	3.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
131	SK636	土師器	皿	9.3	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2
132	SK636	土師器	皿	9.3	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2
133	SK636	土師器	皿	9.4	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部最大径				
134	SK636	土師器	皿	9.5	1.5			80	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
135	SK636	土師器	皿	9.5	1.9			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
136	SK636	土師器	皿	9.6	1.8			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/3 淡黄橙	A群、皿B I - 2
137	SK636	土師器	皿	9.6	1.9			60	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2
138	SK636	土師器	皿	9.8	1.7			80	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/ 4にぶい橙	A群、皿B I - 2
139	SK636	土師器	皿	8.4	1.4			20	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 3 c
140	SK636	土師器	皿	9.2	1.7			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 3 c
141	SK636	土師器	皿	9.4	1.6			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 3 c
142	SK636	土師器	皿	10.6	2.5			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿B I - 3 c 口縁部壓付着
143	SK636	土師器	皿	13.4	2.7			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 1 内面工具痕
144	SK636	土師器	皿	13.4	2.2			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	2.5Y7/2 灰黃	A群、皿B I - 1 内面工具痕
145	SK636	土師器	皿	13.0	2.8			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2
146	SK636	土師器	皿	13.0	1.3			25	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2
147	SK636	土師器	皿	13.1	2.3			70	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
148	SK636	土師器	皿	13.7	2.4			80	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	2.5YR8/3 淡黄	A群、皿B I - 2 内面工具痕
149	SK636	土師器	皿	14.1	2.5			95	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 淡黄橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
150	SK636	土師器	皿	13.1	2.5			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	5YR7/6 橙	A群、皿B I - 3 c
151	SK636	土師器	皿	13.6	2.6			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 3 c
152	SK636	土師器	皿	13.1	2.5			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	7.5YR8/6 淡黄橙	A群、皿E 内面工具痕、外面掌痕
153	SK636	土師器	皿	13.1	3.3			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	10YR8/4 淡黄橙	A群、皿E
154	SK636	土師器	皿	13.2	3.0			75	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿E
155	SK636	土師器	皿	13.2	3.4			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	7.5YR7/6 橙	A群、皿E 内面工具痕
156	SK636	土師器	皿	13.2	2.8			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	10YR8/4 淡黄橙	A群、皿E
157	SK636	土師器	皿	13.5	2.8			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、皿E
158	SK636	土師器	皿	14.1	3.1			70	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ・ナデ	7.5YR8/4 淡黄橙	A群、皿E
159	SK636	土師器	皿	12.1	3.2			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR8/6 浅黄橙	A群、皿B II
160	SK636	土師器	皿	12.5	2.6			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	7.5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2 内面工具痕
161	SK636	土師器	羽釜	(13.1)	(4.3)		(15.1)	10	口縁部・鶴ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	10YR7/4 にぶい黄橙	大和H型 角閃石
162	SK636	土師器	羽釜	(21.0)	(6.8)		(17.0)	100	口縁部・鶴ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	7.5YR8/1 灰白	大和B型 角閃石
163	SK636	瓦器	椀	13.7	4.1	4.1		90	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ キ、外側オサエ後ヘラミガキ	N6/0 灰	
164	SK636	瓦器	椀	12.1	3.8	3.7		100	口縁部外面ヨコナデ、内面イナタナデ後ヘラミガキ、外側オサエ後ヘラミガキ	N6/0 灰	
165	SK636	瓦器	椀	13.0	4.0	3.8		90	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ	N5/0 灰	
166	SK636	瓦器	椀	12.2	3.8	4.6		100	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外側オサエ・ナデ	N6/0 灰	外面掌痕
167	SK636	瓦器	椀	13.5	4.1			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外側オサエ後ヘラミガキ	N5/0 灰	
168	SK636	瓦器	皿	9.2	2.0			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外側オサエ	N5/0 灰	
169	SK636	土師器	椀			1.5	(6.0)	60	内面ナデ、外側オサエ、貼付高台	10YR7/4 にぶい黄橙	

出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考	
				口径	器高	底径	側部 最大径					
170	SK636	須恵器(束縛系)	鉢	(29.0)	10.4	(10.0)		30	内外面クロナデ、外面部回転系切り	N7/0 灰		
171	SK636	須恵器(常滑産)	甕	(33.5)	(6.9)			10	内外面クロナデ	5YR4/4 にぶい赤褐		
172	SK636	瓦質土器	浅鉢		(4.5)				口縁部片	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	N5/0 灰	焯葉産
173	SK636	瓦質土器	浅鉢	(47.5)	10.6	40.3		80	外面ヘラケグリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	N5/0 灰	底部板状圧痕、大和産	

表 17 S K 638 出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考	
				口径	器高	底径	側部 最大径					
174	SK638	土師器	皿	8.7	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/3 にぶい橙	A群、皿B I - 2	
175	SK638	土師器	皿	8.8	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2	
176	SK638	土師器	皿	9.0	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2	
177	SK638	土師器	皿	9.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 2	
178	SK638	土師器	皿	8.4	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2	
179	SK638	土師器	皿	8.6	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2	
180	SK638	土師器	皿	10.8	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2	
181	SK638	土師器	皿	11.1	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	2.5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 口縁部環付帯	
182	SK638	土師器	皿	11.5	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2	
183	SK638	土師器	皿	11.3	2.7			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2	
184	SK638	土師器	皿	11.6	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2	
185	SK638	土師器	皿	11.3	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群、皿B I - 3 c 角閃石	
186	SK638	土師器	皿	11.1	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A群、皿B I - 2 底部に焼成後穿孔あり	
187	SK638	土師器	皿	(8.4)	1.1			10	口縁部内外面ヨコナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿D	
188	SK638	土師器	皿	7.4	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	2.5Y8/1 灰白	京都産	
189	SK638	土師器	皿	(7.6)	1.9			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	2.5Y7/1 灰白	京都産	
190	SK638	土師器	皿	(11.8)	2.8			15	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナゲ、外面オサエ	5Y8/1 灰白	京都産	
191	SK638	瓦器	椀		(2.5)				口縁部片	内面・口縁部外面ナデ後ヘラミガキ、外面オサエ、貼付台高	N5/0 灰	
192	SK638	白色土器	椀		(2.4)	(7.2)			底盤片	内面ヨコナデ、削出高台	2.5Y8/2 灰白	
193	SK638	山茶桜	椀		(2.5)				口縁部片	内外面クロナデ	5Y6/1 灰	内面～口縁部に自然釉
194	SK638	須恵器(束縛系)	鉢		(4.6)				口縁部片	内外面クロナデ	10Y6/1 灰	口縁外面に自然釉
195	SK638	白磁	皿	(8.4)	1.7			20	内外面施釉、口唇部施剥ぎ、底部外面部施釉後フキトリ	5GY8/1 灰白	IX類	
196	SK638	鉢袖陶器(建窯)	天目椀	(4.3)	(3.2)			25	内外面施釉、削出高台、底部露胎	10YR7/2 にぶい黄橙(釉)		
197	SK638	黄釉陶器	盤		(6.0)				口縁部片	内外面外施釉、体部外面部剥ぎ	2.5Y7/2 灰黄(釉)	口縁部に重ね焼き目跡あり
198	SK638	土師器	羽釜		(4.1)				口縁部片	口縁部・斜ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	7.5YR6/1 海灰	大和日型
199	SK638	土師器	羽釜		(6.0)				口縁部片	口縁部・斜ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	2.5Y8/2 灰白	鰐部以下煤付着
200	SK638	土師器	羽釜	(19.0)	(5.2)		(23.0)	25	口縁部・斜ヨコナデ、体部無文のタタキ成形	10YR8/4 浅黄	大和日型	
201	SK638	瓦質土器	浅鉢?		(11.0)	(13.0)		40	内面ナゲ後ヘラミガキ・ケズリ、外面ヘラミガキ、底部内面ナゲ、底部外面部ナレスナ付着	N4/0 灰		
202	SK638	国産陶器(東海産)	鉢	(32.0)	11.9	(12.4)		10	内外面クロナデ、高台貼付ケズリ	2.5Y7/3 浅黄	体部内面に自然釉、見込みに重ね焼目跡あり	

表 18 S K 639 出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
203	SK639	土師器	皿	8.3	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿C a 角閃石
204	SK639	土師器	皿	7.0	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR8/1 灰白	京都産
205	SK639	土師器	皿	7.3	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5YR8/1 灰白	京都産
206	SK639	土師器	皿	9.2	1.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
207	SK639	土師器	皿	11.0	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A群、皿B I - 2
208	SK639	土師器	皿	11.0	2.3			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
209	SK639	土師器	皿	11.0	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/8 橙	A群、皿B I - 2
210	SK639	土師器	皿	11.0	2.3			70	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2
211	SK639	土師器	皿	11.1	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群、皿B I - 2
212	SK639	土師器	羽釜		(4.0)				口縁部・鶴ヨコナデ、部片	7.5YR7/4 にぶい橙	大和H型 被熱、角閃石

表 19 S K 642 出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
213	SK642	土師器	皿	7.7	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b、口縁部焼付着、外面植物圧痕
214	SK642	土師器	皿	7.7	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/4 にぶい赤褐	A群、皿B I - 2 b
215	SK642	土師器	皿	7.8	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR5/4 にぶい褐	A群、皿B I - 2 b
216	SK642	土師器	皿	7.8	1.6			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2 b 口縁部焼付着、角閃石
217	SK642	土師器	皿	(7.9)	1.7			50	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b
218	SK642	土師器	皿	8.0	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2 b
219	SK642	土師器	皿	8.0	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b
220	SK642	土師器	皿	8.0	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b
221	SK642	土師器	皿	8.1	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR4/6 赤褐	A群、皿B I - 2 b
222	SK642	土師器	皿	8.1	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b 鉄製品付着
223	SK642	土師器	皿	8.1	1.8			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b 口縁部焼付着、角閃石
224	SK642	土師器	皿	8.2	1.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2 b 口縁部焼付着
225	SK642	土師器	皿	8.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b
226	SK642	土師器	皿	8.1	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR4/3 褐	A群、皿B I - 2 b 外面焼付着
227	SK642	土師器	皿	9.0	1.8			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR4/4 にぶい褐	A群、皿B I - 2 b 口縁部焼付着
228	SK642	土師器	皿	9.6	2.3			95	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b
229	SK642	土師器	皿	9.8	2.4			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b
230	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2 b
231	SK642	土師器	皿	9.7	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2 b
232	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2 b
233	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2 b 底部板状圧痕
234	SK642	土師器	皿	9.9	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2 b

出土土器觀察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
235	SK642	土師器	皿	9.6	2.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b 底部に成後穿孔あり
236	SK642	土師器	皿	10.0	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b 内面工具痕
237	SK642	土師器	皿	10.0	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2b
238	SK642	土師器	皿	10.1	2.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2b
239	SK642	土師器	皿	10.1	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2b 底部板状圧痕
240	SK642	土師器	皿	10.2	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b
241	SK642	土師器	皿	(10.2)	2.1			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b
242	SK642	土師器	皿	10.1	2.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b 内面工具痕
243	SK642	土師器	皿	10.3	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b
244	SK642	土師器	皿	10.7	3.3			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR6/6 橙	A群、皿B I - 2b 角閃石
245	SK642	土師器	皿	10.5	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2b 内面工具痕、角閃石
246	SK642	土師器	皿	(11.2)	2.6			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群、皿B I - 2b
247	SK642	土師器	皿	9.6	2.2			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR5/6 明赤褐	A群、皿B I - 2b 底部に成後穿孔あり、内面工具痕
248	SK642	土師器	台付皿	(8.8)	3.1	(6.3)		100	内外面ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	脚部内面工具痕、角閃石
249	SK642	土師器	皿	6.8	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5YR8/3 淡橙	京都産
250	SK642	土師器	皿	7.3	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
251	SK642	土師器	皿	7.1	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
252	SK642	土師器	皿	7.2	1.2			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
253	SK642	土師器	皿	7.0	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
254	SK642	土師器	皿	7.5	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	B群
255	SK642	土師器	皿	7.2	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
256	SK642	土師器	皿	10.5	2.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群、A群Bと製作似る
257	SK642	土師器	皿	11.8	2.1			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群、A群Bと製作似る
258	SK642	土師器	皿	9.8	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	B群
259	SK642	土師器	皿	9.8	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
260	SK642	土師器	皿	(10.1)	2.3			45	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
261	SK642	土師器	皿	10.1	2.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/3 淡黃	B群
262	SK642	土師器	皿	10.1	2.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	B群
263	SK642	土師器	皿	10.2	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	B群
264	SK642	土師器	皿	10.3	2.7			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
265	SK642	土師器	皿	10.3	2.7			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
266	SK642	土師器	皿	10.5	2.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	B群、内面工具痕
267	SK642	土師器	皿	(10.5)	2.3			30	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
268	SK642	土師器	皿	10.5	2.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
269	SK642	土師器	皿	(11.0)	2.0			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群
270	SK642	土師器	皿	(11.7)	3.0			25	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	B群

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
271	SK642	土師器	皿	12.7	2.9			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	B群
272	SK642	土師器	皿	(12.3)	3.6			45	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	B群
273	SK642	土師器	皿	(12.4)	3.0			50	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群
274	SK642	土師器	皿	12.9	3.7			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	B群
275	SK642	土師器	皿	13.0	3.4			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	B群 内面被熱
276	SK642	土師器	皿	13.0	3.6			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	B群
277	SK642	土師器	皿	13.1	3.5			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	2.5Y8/2 灰白	B群
278	SK642	土師器	皿	13.3	3.4			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	B群
279	SK642	土師器	皿	13.6	3.7			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/3 浅黄橙	B群 内面被熱、鉄製品付着
280	SK642	土師器	皿	16.3	4.6			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、オサエ、外側オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	B群 鉄製品付着
281	SK642	土師器	羽釜	(12.2)	3.3		(13.4)	20	外外面ナデ	10YR8/3 浅黄橙	
282	SK642	海輪向器	壺	(5.0)	(3.0)				口縁部片 内外面施釉、口唇部釉剥ぎ	10YR3/3 暗褐(釉)	口縁部に 重ね焼き跡あり
283	SK642	瓦質土器	浅鉢		(3.2)				口縁部片 内外面ナデ後ミガキ	N4/0 灰	菊花文スタンプ
284	SK642	白磁	碗		(3.0)				口縁部片 内外面施釉	5Y7/2 灰白	
285	SK642	山茶桜	碗		(4.0)				体部片 内外面ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白	北部系
286	SK642	土師器	羽釜	(19.5)	3.7				口縁部ヨコナデ、 体部無文のタスキ成形	10YR8/3 浅黄橙	大和B型 外面保付着
287	SK642	土師器	羽釜	(24.0)	3.5		(23.0)		口縁部・ 体部無文のタスキ成形	10YR7/4 にぶい黄橙	大和H型 外面保付着

表20 S X 808出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
288	SX808	土師器	皿	7.2	1.4			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、 口縁部保付着
289	SX808	土師器	皿	7.5	1.6			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群
290	SX808	土師器	皿	7.5	1.5			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	A群、 口縁部保付着
291	SX808	土師器	皿	7.8	1.2			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、 口縁部保付着
292	SX808	土師器	皿	7.8	1.4			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	A群、 口縁部保付着
293	SX808	土師器	皿	8.0	1.7			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、 口縁部保付着
294	SX808	土師器	皿	(7.1)	1.5			30	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、 内面工具痕
295	SX808	土師器	皿	(7.3)	1.6			20	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群
296	SX808	土師器	皿	7.6	1.3			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群
297	SX808	土師器	皿	8.1	1.5			100	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群
298	SX808	土師器	皿	8.2	1.5			90	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	2.5Y5/1 灰黃	A群、 口縁部保付着
299	SX808	土師器	皿	(8.1)	1.2			60	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群、 口縁部保付着
300	SX808	土師器	皿	(20.3)	4.2			10	内面・口縁部外面ヨコナデ、外側オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	A群、 内面保付着
301	SX808	土師器	皿	(7.2)	1.1			40	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外側オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群
302	SX808	土師器	皿	(9.6)	1.8			30	内面・口縁部外面ヨコナデ、外側オサエ	10YR8/2 灰白	C群
303	SX808	土師器	皿	9.0	1.7			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、外側オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群、 口縁部保付着

出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	胴部 最大径				
304	SX808	土師器	皿	9.6	1.6			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	C群、 口縁部埋付着
305	SX808	土師器	皿	(9.6)	1.7			50	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	C群、 角閃石
306	SX808	土師器	皿	(9.3)	1.5			20	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5Y7/1 灰白	C群、 口縁部埋付着
307	SX808	土師器	皿	(10.8)	2.1			50	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	I C群、 口縁部埋付着
308	SX808	土師器	皿	(11.6)	2.2			15	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黃	C群
309	SX808	土師器	皿	(11.2)	2.3			40	内面・口縁部外面ヨコナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群
310	SX808	土師器	皿	(11.7)	2.1			50	内面・口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	2.5Y6/1 黃灰	C群、 内面被熱
311	SX808	土師器	皿	12.2	2.5			80	内面・口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ・ナデ	10YR6/1 褐灰	C群、 内面被熱
312	SX808	土師器	皿	(12.4)	2.1			30	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	C群
313	SX808	土師器	皿	12.2	2.0			70	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	C群、 口縁部埋付着、内面被熱
314	SX808	土師器	皿	12.5	2.6			80	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面オサエ	5Y7/1 灰白	C群
315	SX808	土師器	羽釜	(14.5)	5.8		(20.8)	10	口縁部・鷲ヨコナデ、体部文無のタキ成形	2.5Y7/1 灰白	大和H型 外面鷲部以下埋付着
316	SX808	土師器	羽釜	(22.0)	14.7		(26.7)	50	口縁部・鷲ヨコナデ、体部文無のタキ成形	2.5Y7/2 灰黃	大和I型 外面鷲部以下埋付着
317	SX808	国宝陶器 (鷲前座)	捏跡	(23.0)	8.5	(14.0)		20	内外面クロナデ	10YR5/3 にぶい褐	
318	SX808	国宝陶器 (鷲坐座)	轍	(19.6)	(7.5)			20	内外面クロナデ	2.5YR4/4 にぶい赤褐	
319	SX808	国宝陶器 (鷲坐座)	捺跡	(29.0)	12.2	(13.4)		20	内面面クロナデ 内面ナデ 1単位の捺目	5YR6/6 橙	
320	SX808	青磁	碗	(11.1)	4.7			20	内外面施釉 盤足窓系、外面部圓形連弁文	2.5Y7/3 浅黃(釉)	
321	SX808	青花	碗	(9.5)	2.1			10	内外面施釉	9/0 白(胎)	
322	SX808	青花	皿	(11.0)	2.3			口縁 部片	内外面施釉	9/0 白(胎)	
323	SX808	土師器	採掘用 土器			(2.9)		口縁 部片	口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ・ナデ、 内面ヨコナデ後ミガキ	2.5Y7/2 灰黃	内面埋付着
324	SX808	土師器	採掘用 土器			(18.6)	3.5	10	口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ、内面ミガキ	2.5Y7/2 灰黃	内面埋付着
325	SX808	土師器	採掘用 土器			(18.5)	4.4	30	口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ後ナデ、内面ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	内面埋付着
326	SX808	瓦質土器	楕	(27.4)	5.0		(31.0)	口縁 部片	内面ヨコナデ、外面ミガキ	N4/0 灰	
327	SX808	瓦質土器	椭	(31.6)	15.0	(11.0)		40	口縁外面ヨコナデ、 外面ハケ後オサエ、内面摩滅	5Y8/1 灰白	
328	SX808	瓦質土器	椭	(33.2)	16.0	(11.8)		60	口縁部外面ヨコナデ、外面部ハケ後季 正直、内面10条1単位の捺目	N3/0 褐灰	
329	SX808	瓦質土器	捏跡	(43.0)	15.3	(17.4)		30	外面部ハケナデ、内面ミガキ、 口縁部付近内外面摩滅・剥落	N3/0 暗灰	

表21 S K 651出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	胴部 最大径				
330	SK651	土師器	皿	8.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR7/6 橙	A群
331	SK651	土師器	皿	8.0	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/6 橙	A群
332	SK651	土師器	皿	8.3	2.0			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群
333	SK651	土師器	皿	8.4	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	5YR7/6 橙	A群
334	SK651	土師器	皿	8.5	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群
335	SK651	土師器	皿	8.8	1.5			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群
336	SK651	土師器	皿	10.2	1.8			60	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ	10YR8/4 浅黄橙	D群、外面布痕
337	SK651	土師器	皿	10.9	1.7			60	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ハケナデ	10YR8/3 浅黄橙	D群

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
338	SK651	土師器	皿	(10.8)	2.1			30	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群、 底部内面煤付着
339	SK651	土師器	皿	12.0	2.1			90	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群、 破損後被熱
340	SK651	国産磁器 (肥前窯)	碗	9.8	5.3	3.6		80	内外面施釉、器付輪剥ぎ	9/0 白(釉)	
341	SK651	土師器	羽釜	(24.8)			(25.0)		口縁部・鶴ヨコナデ、 体部無文のタキ成形	7.5YR7/3 にぶい橙	大和I型
342	SK651	瓦質土器	甕	(13.4)	13.9	(10.2)	(15.6)	50	口縁部外面・外面ヨコナデ、 内面ハケ、底部外面ハナレスナ付着	N5/0 灰	外面工具痕

表22 S E 507出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
343	SE507	土師器	皿	6.3	2.5			100	内面ナデ、外面オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	A群、 口縁部煤付着
344	SE507	土師器	皿	6.8	1.2			100	内面ヨコナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	E群
345	SE507	土師器	皿	7.9	1.6			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	D群、 口縁部煤付着、外面掌痕
346	SE507	土師器	皿	7.0	1.8			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	D群
347	SE507	土師器	皿	7.2	1.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群、 口縁部煤付着
348	SE507	土師器	皿	7.4	1.7			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群、 口縁部煤付着
349	SE507	土師器	皿	7.4	1.7			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	2.5Y7/3 浅黄	D群、 口縁部煤付着
350	SE507	土師器	皿	7.5	1.8			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群
351	SE507	土師器	皿	7.5	1.8			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	2.5Y8/3 淡黄	D群、 口縁部煤付着
352	SE507	土師器	皿	7.5	1.7			100	内面・口縁部外面ヨコナデ	10YR6/2 灰褐	D群、 口縁部煤付着
353	SE507	土師器	皿	7.6	1.8			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群、 口縁部煤付着
354	SE507	土師器	皿	7.8	1.8			100	内面・口縁部外面ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	D群、 口縁部煤付着
355	SE507	土師器	皿	8.2	1.9			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	D群、 口縁部煤付着
356	SE507	土師器	皿	8.0	1.5			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ	2.5Y7/3 浅黄	D群
357	SE507	土師器	皿	10.7	2.4			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/3 にぶい黄橙	D群
358	SE507	土師器	皿	11.0	2.0			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群
359	SE507	土師器	皿	11.3	2.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群、 外面掌痕
360	SE507	土師器	皿	11.5	2.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	D群、 口縁部煤付着
361	SE507	土師器	皿	11.6	2.5			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR8/3 浅黄橙	D群
362	SE507	土師器	皿	12.0	2.7			100	口縁部外面ヨコナデ、 内面ナデ、外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	D群、 口縁部煤付着
363	SE507	土師器	皿	10.6	2.0			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	E群、 口縁部煤付着、外面掌痕
364	SE507	土師器	皿	10.8	2.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/4 浅黄橙	E群、 口縁部煤付着、外面掌痕
365	SE507	土師器	皿	12.0	2.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	E群、 掌痕
366	SE507	国産磁器 (肥前窯)	碗	10.7	5.7	4.8		80	内外面施釉、器付ハナレスナ付着	9/0 白(釉)	
367	SE507	国産陶器 (肥前窯)	碗	11.0	6.6	5.3		80	内面・口縁部・体部外面施釉、 削り出し高台	5Y7/3 浅黄(釉)	高台内鉢あり
368	SE507	土師器	炮烙	17.0	7.5		17.0	100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外型成形	5YR6/6 稍	底部内面煤付着 底部外表面被熱
369	SE507	土師器	炮烙	28.8	8.2		30.0	75	内面・口縁部外面ヨコナデ、 底面は耗す	10YR7/4 にぶい黄橙	底部内面煤付着 底部外表面被熱
370	SE507	土師器	鉢	16.1	6.5	8.5	16.1	70	内面ヨコナデ、 底面は耗す	10YR8/3 浅黄橙	底部内面煤付着 底部外表面被熱
371	SE507	国産陶器 (信楽窯)	橘鉢	(27.0)	15.2	(15.6)			内外面クロコナデ、内面8条1単位 の目模様、見込みは格子状に模様	10YR4/2 灰赤	

出土土器觀察表

表 23 S K 656 出土土器觀察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	側部 最大径				
372	SK656	土師器	皿	7.1	0.7			90	内外面オサエ	7.5YR5/3 にぶい黄褐色	A群
373	SK656	土師器	皿	6.7	1.0			100	内外面オサエ	10YR6/3 にぶい黄橙	A群
374	SK656	土師器	皿	7.2	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群
375	SK656	土師器	皿	6.7	1.3			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面ナナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	A群
376	SK656	土師器	皿	7.1	1.5			90	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	A群
377	SK656	土師器	皿	7.3	1.4			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	E群
378	SK656	土師器	皿	11.0	2.1			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	E群
379	SK656	土師器	皿	10.2	1.9			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面オサエ	7.5Y7/6 橙	E群
380	SK656	土師器	皿	11.0	2.1			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/2 灰白	E群
381	SK656	土師器	皿	8.2	1.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外型成形	7.5YR7/4 にぶい橙	外型作り 口縁部埋付着
382	SK656	土師器	皿	6.6	1.4			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群 口縁部埋付着
383	SK656	土師器	皿	7.1	1.5			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面オサエ	5YR6/6 橙	D群
384	SK656	土師器	皿	7.5	1.7			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y8/2 灰白	D群 口縁部埋付着
385	SK656	土師器	皿	7.5	1.2			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
386	SK656	土師器	皿	7.5	1.8			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰白	D群
387	SK656	土師器	皿	7.7	1.3			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
388	SK656	土師器	皿	7.2	1.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
389	SK656	土師器	皿	7.2	1.6			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
390	SK656	土師器	皿	7.3	1.5			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	2.5Y7/2 灰黄	D群
391	SK656	土師器	皿	7.4	1.7			100	口縁部内外面ヨコナデ、 内面ナゲ、外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群
392	SK656	土師器	皿	9.7	1.7			90	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR8/2 灰白	D群
393	SK656	土師器	皿	11.4	2.3			100	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群
394	SK656	土師器	皿	12.1	2.2			90	内面・口縁部外面ヨコナデ、 外面オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	D群
395	SK656	土師器	高台付皿	8.8	5.7	7.4		90	内面・外型オサエ、 脚部内面オサエ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	
396	SK656	土師器	高台付皿	(9.0)	5.4	(7.0)		40	外型オサエ	2.5Y7/2 灰黄	
397	SK656	土師器	壺烙	15.8	5.0			90	内面・口縁部ヨコナデ、 外型成形	7.5YR6/4 にぶい橙	鰐部以下埋付着、角閃石
398	SK656	土師器	壺烙	31.4	9.4		32.3	95	内面・口縁部ヨコナデ、 外型成形	7.5YR7/4 にぶい橙	鰐部以下埋付着
399	SK656	国産陶器 (信楽産)	仏飯器	8.0	5.7	4.5		80	内外面施釉、底部糸切	5YR4/4 にぶい赤褐(輪)	底部墨書き、 欠損部に漆黒痕あり
400	SK656	国産陶器 (肥前産)	碗	(11.2)	6.5	(4.2)		40	内外面施釉、豊付ハナレスナ付	9/0 白(輪)	
401	SK656	国産陶器 (肥前産)	碗	10.4	5.3	3.9		70	内外面施釉、豊付釉剥落	2.5GY8/1 灰白(輪)	
402	SK656	国産陶器 (肥前産)	碗	11.0	6.0	3.8		90	内外面施釉、豊付釉剥落	9/0 白(輪)	
403	SK656	国産陶器 (肥前産)	碗	11.2	5.3	4.8		100	内外面施釉、豊付釉剥落	5GY8/1 灰白(輪)	
404	SK656	国産陶器 (那珂産)	壺烙	24.6	8.8			100	口縁部内外・底部外面ケズリ、 底部内面ナデ、底部外面静止ケズリ	10R5/6 赤	8条1単位の標目
405	SK656	国産陶器 (信楽産)	壺烙	36.0	14.2	15.2		70	内外面クロナデ、外面ケズリ、 内面摩滅、高台ハナレスナ付着	7.5R2/2 極暗赤褐	6条1単位の標目 見込みは放射状に標目

表24 S K 662 出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存%	技法の特徴	色調	備考
				口径	器高	底径	脚部 最大径				
406	SK662	土師器	皿	6.1	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/2 灰褐	口縁部厚付着1箇所、F群
407	SK662	土師器	皿	6.1	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	F群
408	SK662	土師器	皿	6.1	1.6			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/6 橙	F群
409	SK662	土師器	皿	6.2	0.8			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部厚付着2箇所、F群
410	SK662	土師器	皿	6.2	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/4 にぶい橙	F群
411	SK662	土師器	皿	6.2	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部厚付着1箇所、F群
412	SK662	土師器	皿	6.3	1.1			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/6 橙	F群
413	SK662	土師器	皿	6.3	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部厚付着1箇所、F群
414	SK662	土師器	皿	6.3	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F群
415	SK662	土師器	皿	6.4	1.2			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部厚付着1箇所、F群
416	SK662	土師器	皿	6.4	1.1			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部厚付着1箇所、F群
417	SK662	土師器	皿	6.5	0.8			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F群
418	SK662	土師器	皿	6.6	1.1			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/3 にぶい橙	口縁部厚付着3箇所、F群
419	SK662	土師器	皿	6.6	0.9			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F群
420	SK662	土師器	皿	6.8	0.7			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F群
421	SK662	土師器	皿	6.9	1.1			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	F群
422	SK662	土師器	皿	7.6	1.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部厚付着1箇所、F群
423	SK662	土師器	皿	7.6	1.3			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/4 にぶい橙	F群
424	SK662	土師器	皿	7.8	1.2			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	F群
425	SK662	土師器	皿	7.8	1.4			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/6 橙	F群
426	SK662	土師器	皿	(12.8)				12.5	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR6/4 にぶい橙	口縁部厚付着2箇所、F群
427	SK662	土師器	皿	6.3	1.3			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR7/4 にぶい橙	D群
428	SK662	土師器	皿	6.3	1.3			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/2 灰白	口縁部厚付着、D群
429	SK662	土師器	皿	6.6	1.7			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/2 灰白	D群
430	SK662	土師器	皿	6.7	1.6			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/1 灰白より白い灰	D群
431	SK662	土師器	皿	6.9	1.1			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/2 灰白	D群
432	SK662	土師器	皿	7.0	1.4			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/2 灰白	D群
433	SK662	土師器	皿	7.0	2.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	D群
434	SK662	土師器	皿	7.1	1.6			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	10YR8/2 灰白	口縁部厚付着、D群
435	SK662	土師器	皿	11.0	1.8			75	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/2灰白	E群
436	SK662	土師器	皿	11.3	2.0			66	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	2.5YR8/3淡黄	E群
437	SK662	土師器	皿	11.5	2.0			100	口縁部内外面コナデ、内面ナデ、外面未調整・オサエ	5YR8/2灰白	E群
438	SK662	土師器	高台付皿	6.4	4.8	6.3		100	内外面未調整、脚部内面に粘土板接合痕	10YR7/4にぶい 黄橙	胎土A群に似る
439	SK662	土師器	高台付皿	9.7	8.5	9.0		50	内外面未調整、脚部内面に粘土板接合痕	2.5YR8/3淡黄	胎土D群に似る
440	SK662	土師器	高台付皿	11.0	7.3	9.0		66	内外面未調整	7.5YR8/2灰白	脚部内面に墨書き「春日社」、胎土A群に似る

出土土器觀察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量(復原)cm				残存 %	技法の特徴	色調	備考	
				口径	器高	底径	削部 最大径					
441	SK662	国產陶器 (信楽窯)	灯明受け	7.0	4.35	6.0		100	内外面施釉、底部露胎・クロヘラケズリ	7.5Y8/2 灰白		
442	SK662	国產陶器 (信楽窯)	灯明皿	7.1	1.8	3.7		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ、見込みトチノ痕3つ	5Y8/3 淡黄		
443	SK662	国產陶器 (信楽窯)	灯明皿	8.7	1.7	3.4		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・ロクロヘラケズリ、見込み梅目1条・トチノ痕4つ	7.5Y7/2 灰白よりやや黄味強い		
444	SK662	国產陶器 (信楽窯)	灯明受け	6.6	1.2	2.8		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・クロヘラケズリ	7.5Y7/2 灰白		
445	SK662	国產陶器 (信楽窯)	灯明受け	8.3	1.4	3.7		100	内面・口縁部施釉、底部露胎・クロヘラケズリ	7.5Y8/2 灰白		
446	SK662	土師器	舌出し	12.5	6.0			100	口縁・内面ヨコナデ調整、外紙面未調整	2.5Y8/2 灰白	舌部欠損	
447	SK662	土師器	炮烙	(30.6)		(31.2)	25	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR7/4 に赤い模			
448	SK662	土師器	炮烙	(49.2)		(46.6)	12.5	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR7/3 に赤い模			
449	SK662	土師器	炮烙	(35.4)		(34.6)	16	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	2.5YR8/2 灰白			
500	SK662	土師器	炮烙	(34.6)		(34.3)	12.5	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR7/3 に赤い模			
501	SK662	土師器	炮烙	(36.8)		(37.5)	8	内面・口縁部ヨコナデ、外型作り	7.5YR8/3 浅黄模			
502	SK662	国產陶器 (上野窯)	水飴壺	(8.3)	11.3	6.6	11.65	50	内外面施釉、外面下半～底部露胎	やや黄味をおびた暗オリーブ色	三官飴壺	
503	SK662	青花	鉢	13.8	7.9	5.4		90	内外面施釉、豊付輪剥ぎ	7.5GY8/1 明緑灰(釉)		
504	SK662	国產磁器 (肥前窯)	猪口	(8.2)	6.3	(5.8)		50	内外面施釉、底部蛇の目輪剥ぎ	9/0 白(釉)	燒繼痕あり	
505	SK662	国產磁器 (瀬戸窯)	碗	8.9	4.6	3.5		100	内外面施釉、豊付輪剥ぎ	明緑灰		
506	SK662	国產磁器 (肥前窯)	碗	11.9	6.5	5.7		100	内外面施釉、豊付輪剥ぎ	白色		
507	SK662	国產磁器 (瀬戸窯)	碗	11.6	6.2	5.0		100	内外面施釉、豊付輪剥ぎ	7.5GY8/1 明緑灰(釉)		
508	SK662	国產陶器 (赤堀窯)	皿	10.6	3.2	4.5		100	内外面施釉、外面下半～底部露胎	淡緑	内面白泥で済み文描く	
509	SK662	国產陶器 (赤堀窯)	皿	9.0	3.2	3.4		100	内外面施釉、外面下半～底部露胎	暗緑	見込みに鉄線で草花文描く	
510	SK662	国產陶器 (信楽窯)	カンテラ	5.3	7.1	4.0			内外面施釉、底部露胎・クロヘラケズリ	7.5Y8/2 灰白	取手欠損	
510	SK662	国產陶器 (信楽窯)	カンテラ 蓋	5.5	3.8	1.2			外表面施釉。	7.5Y7/2 灰白		
511	SK662	国產陶器 (信楽窯)	土瓶	9.0	11.9	6.2	17.3	100	外表面施釉、褐釉	淡茶褐色		
512	SK662	国產陶器 (信楽窯)	行平鍋	18.3	10.6	7.6		100	外表面施釉、底部露胎	7.5Y5/3 灰オーライ		
513	SK662	国產陶器 (信楽窯)	三耳壺	6.8	17.7	8.1	13.6	100	外表面施釉、上半褐釉、下半白色釉	2.5Y6/8 明黄褐	腰白茶壺	
514	SK662	国產陶器 (伊賀窯)	桶鉢	28.4	9.4	13.6		100	内面クロコナデ、外面下半クロコケズリ、底部はなれ砂	10R4/2 灰赤	内面9条1単位の桶目、見込み8本1単位の桶目	
515	SK662	国產陶器 (信楽窯)	桶鉢	31.7	14.0	15.4		66	内外面クロコナデ、外面下半クロコケズリ、底部未調整	10R3/2 暗赤褐	内面7条1単位の桶目、見込み9本1単位の桶目	

第3章 奈良町遺跡出土の土師器皿の編年

中近世土器の編年研究における土師器皿の重要性は、過去の研究からも高いことは明らかである。奈良においては、植垣晋也氏、森下惠介氏、立石堅志氏らの編年研究が知られる。これらの研究からすでに20年ほど経過し、その間新資料や良好な資料が蓄積してきた。今回報告したHJ第559次調査出土の資料に加えて、改めて奈良町遺跡出土の資料を概観し、土師器皿の編年を考えてみたい。

A 奈良町遺跡出土の土師器皿の大分類と変遷

遺跡出土の土師器皿が、形態・製作技術・胎土等から大きく6群に分かれることを、第2章で明らかにした。改めて記すと

- ・A群 古代から系譜の追える一群で、形態は比較的平坦な底部から屈曲して口縁部となる。
- ・B群 胎土の色調が白色を意識した一群で、いわゆる白土器とされるもの。
- ・C群 灰白色の精良な胎土の一群で、形態は比較的平坦な底部に直線的な口縁部がつく。
- ・D群 底部の丸みが強く、底部と口縁部の境は不明瞭な形態の一組。口縁部のヨコナデ調整が口縁端部にしあ及ぼない。
- ・E群 D群土師器皿に比べ歪みが少なく、形態・調整とも丁寧な一群である。形態はやや平坦な底部と緩やかに湾曲する短い口縁部からなる。
- ・F群 褐色系の胎土で浅い皿の一群。平坦な底部と内湾する短い口縁部からなる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、この調整によって内面の底部と口縁部の境は浅く産む。

これらの土師器群の組合せは、次の5つの組合せが確認できる。

- 1 A群のみの資料
- 2 A群とB群からなる資料
- 3 A群とC群からなる資料
- 4 A群とD群とE群からなる資料
- 5 D群とE群とF群からなる資料

さらに、A群土師器皿の形態変化と併存する土器から、組合せは1から5へと時期的に変化することがわかり、以下1段階から5段階と称する。

(中島・佐藤)

B 奈良町遺跡出土資料の編年

各段階の一括資料をさらに型式的に細分し、序列立てたものが表25である。各資料の位置付けについては、中島と佐藤が協議して行い、最終的に中島がまとめた。

また1段階のA群土師器皿の変遷図については、佐藤による変遷図をもとに中島が再構成した。以下各段階ごとに概観する。

1段階

A群土師器皿のみで構成される資料で、その開始を週れば奈良時代の土師器に連なる。ここでは資料の制約上、瓦器碗出現以降の資料から取り扱うこととする。

A群土師器皿は、主体をなす皿Bの口径が縮小化してゆき、大皿は16cm代から11cm代に、小皿は10cm代から8cm代へと推移する。

1 HJ第490次調査SK 07⁴⁾

素掘りの井戸出土で、未報告資料である。

土師器皿は、口径16cm代の大皿と口径10cm代の小皿からなる。小皿は皿Aと皿B、大皿は皿Bからなる。大皿の口縁部形態は数種類あり、外反するものの率が高い。併存する瓦器碗はI・A・B型式である。

2 HJ第559次調査SK 613

本報告資料で、土器廐棄土坑出土である。

土師器皿は、口径16cm代の大皿と口径10cm代の小皿からなる。小皿は皿Aと皿B、大皿は皿Bからなる。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を2段ナデ調整するものも多い。

併存する瓦器碗はI・C型式である。

3 HJ第559次調査SK 618

本報告資料で、土器廐棄土坑出土である。

土師器皿は、口径15cm代の大皿と口径10cm代の小皿からなる。小皿は皿Aと皿B、大皿は皿Bからなるが、皿Aの出土比率は減少する。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を2段ナデ調整するものも多い。2の資料に比べ大皿の口径の縮小化がうかがえる。

併存する瓦器碗はI・DとII・A型式である。

4 HJ第228次調査SK 03

土器廐棄土坑出土の資料である。

土師器皿は皿Aがなくなり、以後皿Bが主となる。口径15cm代の大皿と口径10cm代の小皿からなる。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を2段ナデ調整するものは減少する。

併存する瓦器碗はI・D型式である。

5 HJ第232次調査SE 02⁵⁾

素掘りの井戸出土の資料である。

土師器皿Bは、口径15cm代の大皿と口径10cm代の小皿からなる。大皿の口縁部形態は多様で、口縁部を2

表25 奈良町遺跡 遺構編年表

	大和型 (川越)	大和型 (近江)	和泉型 (尾上)	森下・ 立石	肥前產 鉢器		HJ559	標識資料	参考資料
							SE501		
	I - A / B	I - 1			奈良 II - A			HJ490 SK01 (未)	
1100	I - C	I - 2					SK613		HJ97 SE11 (延久3年)
	I - D II - A	I - 3			奈良 II - B		SK618	HJ89 SK03	
	I - D新 II - B	I - 4						HJ228 SK03 HJ232 SE02	
	II - B								
1200	III - A古	I - 5			奈良 II - C			HJ258 SE03	
	III - A新	(III - 1)							
	III - B	I - 6	III - 3		奈良 II - D		SK635	HJ11 SE05	
	III - C	I - 7	(IV - 1)				SK636	HJ269 SE03	
1300	(III - D?)	II - 1	(IV - 2)					GG07 SE13	
	(III - E)		(IV - 3)		奈良 III - A			HJ531 SK16 HJ287 SK10	
	III - E		(IV - 3)				SK638 SK639	GG64 SK06	
	(IV - A)		IV - 4					HJ232 SK03	
1400	IV - B		(IV - 5)		奈良 III - B			GG31 SK03	
	IV - C	II - 3			奈良 III - C			GG38 SK03	
	IV - D							SD26 SD05	
1500					奈良 IV - A		SK642		
								L5.2.6 SK07	
								GG63 SE01	L5.2.6 SK08 奈良公園 SK11
									県重大寺 89 次 SX01
								GG48 SK15	
									(HJ232 SK50) (未)
1600					奈良 IV - B				
								HJ482 SX14	
								SY02 SK07	
							SX808	HJ605 SD05/ SX06/09	
								GG48 SE16	HJ424 SE16
1700					奈良 IV - C	II - 1 II - 2		GG04 SX06	
							SK651	GG48 SE26 HJ651 SK24	GG9 近世土坑 HJ449 SK04 (未)
								HJ332 SE06	HJ658 SK06 (未)
							SE507	HJ424 SE17	
								HJ332 SK16	
								HJ531 SK178 (未)	
1800							SK656		
								HJ228 近世土坑 (未)	
							SK662		

表26 奈良町遺跡 土師器皿型式別消長表

遺構名	造形	A群										B群	C群	D群	E群	F群		
		Ⅲ A		Ⅲ B						Ⅲ C		Ⅲ D	Ⅲ E					
		I	II	I			2			3		4						
		a	b	a	b	c	d	a	b	c				a	b			
HJ559 次 SE501																		
HJ559 次 SK613																		
県L.2.7.9・10SK01																		
HJ559 次 SK618																		
HJ228 次 SK03																		
HJ232 次 SE02																		
元興寺精業坊 8次 SK105																		
興福寺普提院大御堂地鉢具																		
元興寺精業坊 8次 SK108,114																		
元興寺精業坊 8次 SK112																		
HJ258 次 SE03																		
HJ11 次 SE03																		
HJ559 次 SK635																		
HJ559 次 SK636																		
HJ269 次 SE03																		
GG07 次 SE13																		
HJ531 次 SK16																		
HJ287 次 SK10																		
HJ559 次 SK638																		
HJ559 次 SK639																		
HJ232 次 SK03																		
GG64 次 SK06																		
GG31 次 SK03																		
GG14 次 SK05																		
HJ258 次 SK12																		
GG38 次 SK03																		
SD26 次 SD05																		
2段階 HJ559 次 SK624																		
県L.2.7.9・10SE02																		
県R.5.2.6SK07																		
県R.5.2.6SK08																		
名勝奈良公園SK11																		
GG63 次 SE01																		
県東大寺 89 次 SX01																		
GG48 次 SK15																		
県東大寺 82 次 土坑 5																		
HJ482 次 SX14																		
3段階 SY2 次 02																		
HJ559 次 SX808																		
HJ605 次 SD05 他																		
GG48 次 SE16																		
HJ258 次 SE16																		
GG4 次 SX06																		
HJ559 次 SK651																		
GG48 次 SE26																		
4段階 HJ332 次 SE06																		
HJ559 次 SE507																		
HJ332 次 SK16																		
HJ559 次 SK656																		
5段階 HJ559 次 SK662																		

図中の黒いトーンは主体として出土、淡いトーンは少量の出土を示す。

段ナデ調整するものもある。

供伴する瓦器椀はI - DとII - B型式である。

6 HJ第258次調査SK E 03

素掘りの井戸出土の資料である。

土師器皿Bは、口径14cm代の大皿と口径9cm代の小皿からなる。深い器形のII型式の大皿が、わずかだが初めて現れる。

供伴する瓦器椀はIII - A型式である。

7 HJ第559次調査SK K 635

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿Bは、口径13cm代の大皿と口径9cm代の小皿からなる。深い器形のII型式の大皿が、わずかだが出土している。

供伴する瓦器椀はIII - B型式である。

8 HJ第559次調査SK K 636

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿Bは、口径13cm代の大皿と口径9cm代の小皿からなる。同時期の資料のHJ第269次調査SK E 03からは、深い器形のII型式の大皿と小皿が少量出土している。

供伴する瓦器椀はIII - B型式である。

9 GG第07次調査SE 13

円形石組井戸の埋土上部からの出土資料である。

土師器皿Bは、口径12cm代の大皿と口径9cm代の小皿からなる。また深い器形のII型式の大皿と小皿が少量出土している。II型式の口径はI型式のものに比べやや小さい。

供伴する瓦器椀はIII - C型式である。

10 HJ第531次調査SK 16

土器廃棄土坑出土の資料である。

土師器皿Bは、口径12cm前後の大皿と口径9cm前後の小皿が主体である。深い器形のII型式が一定量出土する点が特徴である。小皿には新たに皿C bが現れる。

II型式の皿は、口径が6~11cm代まで9cm代を除き1cmごとに分布する。これまでI型式と同じく大小2種類の口径であったが、新たに別の法量分布を見せることは、I型式とは別の機能が要求されたからであろうか。また作りは丁寧で、器壁が薄く歪みも少ない。I・II型式いずれも胎土の色調は、すべて橙色系である。

また京都産の白色系の土師器皿が、少量出土する。瓦器椀はほとんど含まず、III - C頃の破片が少量ある。奈良町遺跡ではこの時期以降、瓦器椀の出土量が激減する。

11 HJ第559次調査SK 638・639

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

土師器皿Bは、口径11cm前後の大皿と口径9cm前後の小皿からなる。小皿には皿Bと同じ口径の皿Cがある。胎土の色調は、すべて橙色系である。

また京都産の白色系の土師器皿が、少量出土する。

12 HJ第232次調査SK 03

土器廃棄土坑出土の資料である。

土師器皿Bは、口径11cm前後の大皿と口径8cmの後半代の小皿からなる。小皿には皿Bと同じ口径の皿Cがある。器形・胎土の画一化がすすみ、色調はすべて橙色系で、2段階以降のA群（赤土器）のものと同じである。

2段階

A群土師器皿に新たにB群土師器皿が加わる段階である。いわゆる「赤土器」「白土器」の時期である。A群とB群の出土比率は各遺構ごとまちまちであるが、概してA群の率が高く、B群が半分以上を占める遺構は奈良町遺跡内では珍しい。

A群土師器皿Bは、前段階から引き続き大皿と小皿の2種類からなり、口径・形態・胎土等の画一化が完了する。口径の縮小はさらにすすみ、大皿は当初の口径が10cm代だったのが最後には9cm代に、小皿は9cm代だったのが8cm代となる。また小皿は「へそ皿」の形態の皿Cのみへと変化する。

B群土師器皿は、当初から数種の口径の皿が存在しており、口径毎に出土量の差はあるものの、口径の種類は2段階を通じて維持されている。口径の変化は追えないが、器高は縮小の傾向にあるようである。

一方、胎土が白色系のA群土師器皿が確認される資料があるが、その逆の赤色系の胎土のB群土師器皿は確認していない。

13 GG第31次調査SK 03¹³⁾

土器廃棄土坑出土の資料である。

A群土師器皿Bは、口径10cm代の大皿と口径8cm代の小皿からなる。大皿は底部がやや狭く口縁部が長く直線的になり、断面形が低い逆台形の器形へと形態変化をおこす。大皿は以後この形態がしばらくつづく。小皿には皿Bと同じ口径の皿Cがある。

B群土師器皿は、口径7cm代から16cm代まで各種あり、7cm代と11cm代が多い。

A群とB群の出土比率は、破片点数で約7対3である。供伴する瓦器椀はIII - E型式である。

14 GG第38次調査SK 03¹⁴⁾

土器廃棄土坑出土の資料である。

A群土師器皿Bは、口径10cm代の大皿のみとなり、小皿は口径8cm代の皿Cのみとなる。大皿は逆台形の器

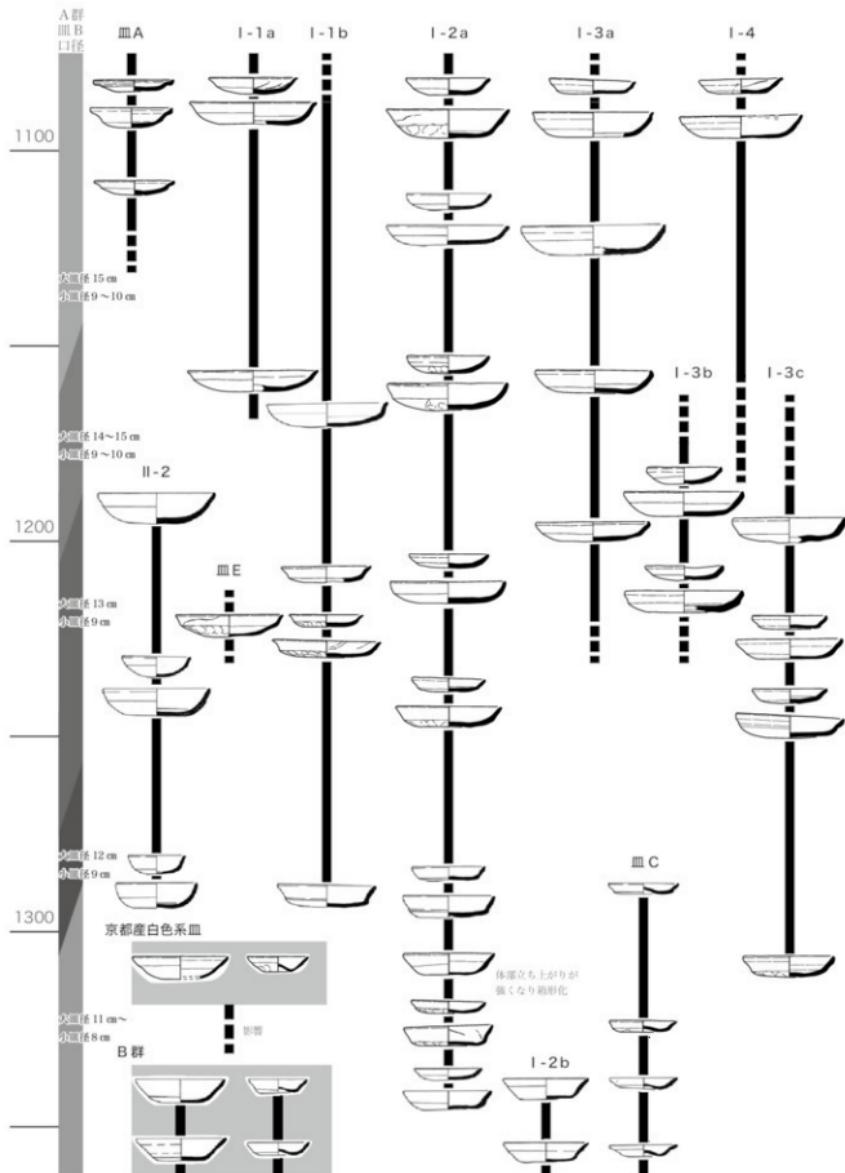


図83 奈良町遺跡 A群土師器皿変遷図（原佐藤）

形が定着する。口縁部外面のヨコナデ調整は幅を狭め、端部から1cmほどとなる。

B群土師器皿は、口径5cm代から12cm代まで各種あるが、出土量が少量のため傾向はうかがえない。

A群とB群の出土比率は、破片点数で約8.5対1.5である。供伴する瓦器椀はIII-E型式の小片と和泉型のIV-A型式である。和泉形瓦器椀は一定量出土しており、供伴関係を知る上で良好な資料である。

15 SD第26次調査SD05¹⁰⁾

溝出土の資料である。奈良町遺跡外の資料であるが、大和型瓦器椀との供伴例のため紹介する。

A群土師器皿は、口径10cm代の皿Bの大皿と口径8cm前後の皿Cの小皿からなる。

B群土師器皿は、口径6cm代から12cm代まで各種あり、7cm代・10cm代・12cm代の出土が多い。

A群とB群の出土比率は、破片点数で約4対6でB群の方が多い。奈良町遺跡外ではB群が多い例が見られ、その利用の差は興味深い。

供伴する瓦器椀はわずか1点であるが、IV-B型式である。同調査区の小土坑SK03からは、IV-B型式の瓦器椀が瓦質土器鉢鉢と供伴して出土している。

16 HJ第559次調査SK642¹⁰⁾

本報告資料で、土器廐棄土坑出土である。

A群土師器皿は、皿Bの大皿が口径10cm前後でさらに9cm代のものが、皿Cの小皿は口径8cm前後でさらになつてのものが加わりだし縮小化がうかがえる。

B群土師器皿は、口径6cm代から16cm代まで各種ある。7cm代・10cm代の出土が多いが、9~13cm代のものも一定量出土している。

A群とB群の出土比率は、破片点数で約4.8対5.2でややB群が多い。

17 GG第63次調査SE01¹⁰⁾

素掘りの井戸出土の資料である。

A群土師器皿は、口径9cm代の皿Bの大皿と口径7cm代の皿Cの小皿からなり、口径の縮小化は明らかである。皿Bは、口縁部のヨコナデ調整が強く施されるものがあり、口縁部が外反氣味になる。2段階の中では、口径が最小の資料である。

B群土師器皿は、口径7cm代から15cm代まで各種ある。7cm代・10cm代の出土が多い。

A群とB群の出土比率は、破片点数で約5対5である。

3段階

B群土師器皿がなくなり、新たにC群土師器皿が現れる。A群土師器皿は引き続き存在するが、胎土の色調は

灰色に変化し、口径は縮小化に向かう。2段階では大皿小皿の区別があったが、この時期の終わりにはほとんど区別がなくなり、口径8cm前後に収束する。大皿は小型化と扁平化がすむとともに、口縁部のヨコナデ調整に変化が現れる。強いヨコナデ調整によって内面の口縁部のと底部境が凹線状に窪み、上げ底状になる。

C群土師器皿は数種の口径のものを作り分けしており、B群土師器皿の用途を引き継いでいるようである。C群については、型式細分・変化の方向性等不明な点が多く今後の課題である。

以後4段階以降も、法量が1種類のみのA群土師器皿と、法量が多種類のその他の群の土師器皿の関係がつづく。このようにA群とその他の群には、明瞭な使い分けが想定できる。また時期が下るとA群の出土比率が低下してゆき、その比重も下がっていったと想定できる。

18 GG第48次調査SK15¹⁰⁾

土器廐棄土坑出土の資料である。多量の土師器皿が完形で出土した。

A群土師器皿は、大皿が口径8cm代で、小皿は口径7cm前後である。口縁部の強いヨコナデ調整により、大皿の底部が上げ底状になり、小皿も底部の押し出しが低くなり、形態の差が不明瞭となる。胎土の色調は灰色系となり、2段階の赤褐色系から大きく変化する。この間に漸移的な色調のものがほとんど見られないことから、変化は意図的なものと考えられ、2段階以前の赤褐色系の色調には必要性があったことがわかる。

C群土師器皿は、口径6cm代から14cm代まで各種あり、8~9cm代の出土が多い。

A群とC群の出土比率は、破片点数で約7.5対2.5である。

A群土師器皿の形態・法量から、GG第63次調査SE01との間にはもう1型式ほど設定できそうである。

19 HJ第482次調査SX14¹⁰⁾

埋葬構造出土の資料である。

A群土師器皿は、口径7cm代で大皿と小皿の区別はつかない。扁平化がすみ、口縁部の強いヨコナデ調整により、内面の口縁部と底部境が凹線状に窪む。

C群土師器皿は、口径6cm代から19cm代まで各種あり、8cm代の出土が多い。口径が大きなものがある点や耳皿もあり、やや特異な構成と考えられる。

内面に圓線がある京都産の土師器皿が供伴している。

A群土師器皿の形態・法量から見て、GG第48次調査SK15との間には数型式設定できそうである。

20 SY第02次調査SK07¹⁰⁾

土器廃棄土坑出土の資料である。

A群土師器皿は、口径7cm代と10cm代のものがあり、一見大皿と小皿を作り分けているようである。しかし、先のHJ第482次調査S XI4資料の段階で大皿と小皿が統合されていることから見て、10cm代の大型の皿が新たに製作されたと考えられよう。

C群土師器皿は、口径6cm代から12cm代まであるが、破片の統計データがなく量の多寡は不明。A群とC群の出土比率も、同じくデータがなく不明。

21 HJ第559次調査SX 808

本報告資料で、石組遺構出土である。

A群土師器皿は、口径7cm代で大皿と小皿の区別はつかない。口縁部外面のヨコナデ調整の範囲が狭いものと幅広のものがある。

C群土師器皿は、口径6cm代から14cm代まで各種あり、9cm代と12cm代の出土が多い。

A群とC群の出土比率は、破片点数で約4.5対5.5である。

22 HJ第605次調査SD 05、SX 06・09⁽¹⁰⁾

中世の道路側溝出土の資料である。

A群土師器皿は、口径7cm代で大皿と小皿の区別はつかない。口縁部外面のヨコナデ調整の範囲は5mm前後と幅が狭い。

C群土師器皿は、口径6cm代から16cm代まで各種あり、8cm代と11cm代の出土が多い。

A群とC群の出土比率は、破片点数で約4対6である。肥前産陶器が出現していない。大和I型羽釜の型式は、HJ第559次調査SX 808と同じ。

23 GG第48次調査SE 16

素掘りの井戸出土の資料である。

A群土師器皿は、口径8cm代で大皿と小皿の区別はつかない。扁平化は極限まで進み、ほとんど板状に近いものもある。また口縁部外面のヨコナデ調整の範囲が狭いものと幅広のものがある。口径7cm代で、底が丸くやや深い器形のものもある。

C群土師器皿は、口径6cm代から13cm代まで各種あり、9cm代の出土が多い。

A群とC群の出土比率は、破片点数で約3対7である。内面に圈線がある京都産の土師器皿が併存している。肥前産陶器が出土しており、奈良町遺跡では出土例の最も古いものに属す。

4段階

C群土師器皿がなくなり、新たにD群土師器皿が現れる。D群もC群と同様に、数種の口径を作り分けおり、

機能としての継続性がうかがえる。この段階の主流となるのはD群であるが、歪みがあり器壁が厚いなど、製作にやや難な点が指摘できる。

これに対してE群土師器皿は、器壁も薄く端正な作りであるが主流とはならない。口径ごと出土比率もD群と似ており、E群はD群の補完的な存在のようである。一方、A群土師器皿は出土量が減少し、口径をさらに縮小させ陳腐化してゆく。しかしながら生産が続くことから、一定の需要があるようである。

24 GG第04次調査SK 05

素掘りの井戸出土の資料である。森下・立石論文ではSX 06として報告されているが、調査報告書ではSX 05出土となっており、ここで訂正しておく。また改めて再整理をしたため、調査報告以外の新たな資料も今回掲載した。

A群土師器皿は、口径8cm代の1種類のみである。GG第48次調査SE 16資料に比べ、器形にやや深みがもどるようである。

D群土師器皿は、口径6cm代から12cm代まで各種ある。D群の形の特徴の1つである丸い底部の他、平底のものもある。また口縁端部のヨコナデ調整の幅もやや広めである。

E群土師器皿は出土していない。

肥前産磁器が、僅ながら初めて出土する。

25 GG第48次調査SE 26

素掘りの井戸出土の資料で、未報告であり本報告が初出である。

A群土師器皿は、口径8cm前後の1種類のみである。さらに器形が深くなり、皿らしくなるが、歪みが多く雑な作りである。

D群土師器皿は、口径6cm代から12cm代まで各種ある。丸い底部からそのまま口縁部につながる器形が中心となるが、口縁部の作りなどにかなりのばらつきがある。

E群土師器皿は出土していない。

大和I型羽釜の最終の型式が併存する。

26 HJ第559次調査SK 651

本報告資料で、土器廃棄土坑出土である。

A群土師器皿は、口径8cm前後の1種類のみである。25の資料同様、器形が深く皿らしくなる。胎土は橙色系の色調である。

D群土師器皿は、口径7cm代から13cm代まで各種ある。胎土は黄橙色系の色調である。

A群とC群の出土比率は不明だが、A群の出土が多い。

27 HJ第332次調査SE 06⁽¹¹⁾

石組井戸の井戸枠抜き取り痕からの出土資料である。A群土師器皿は、口径7.7cmの1点が報告される。深みをとりもどした皿形で、胎土は橙色系の色調である。D群土師器皿は、口径6cm代から13cm代まで各種ある。細部の作りなどには、かなりのはらつきがある。土師器皿はA群の出土量が激減し、D群が主体となる。E群土師器皿は出土していない。

28 HJ第559次調査S E 507

本報告資料で、石組井戸の井戸枠抜き取り部分からの出土である。

A群土師器皿は、口径7cm代で、前代からあまり変化がない。出土量は激減しており、土師器皿の2%にすぎない。

D群土師器皿は、口径6cm代から13cm代まで各種あり、7cm代が最も多く、8・10・11cm代も一定量出土する。口縁部内面を「の」字にナデ調整するD-2群もある。

E群土師器皿が出土している。底部と口縁部の境はやや屈曲し、器皿も凹凸が多くD群に比べ歪みが少ない。

29 HJ第332次調査SK 16²⁰⁾

平面方形の土器廐棄土坑出土の資料である。

A群土師器皿は出土を確認しておらず、消費者の意図がはたらいた結果であろうか。

D群とE群が出土しており、口径6cm代から10cm代まで各種ある。D群はD-2群が多くなる。またE群には器壁が薄いものもある。

30 HJ第559次調査SK 656

本報告資料で、平面方形の土器廐棄土坑出土である。

A群土師器皿は、口径9cm前後の1種類のみである。口縁部のヨコナデ調整がやや強くなり、内面の底部との境に浅い沈線風の跡が残るものもある。出土量は少ない。

D群とE群土師器皿は、口径6cm代から14cm代まで各種あり、7cm代が最も多い。D群はD-2群が多い。

5段階

A群土師器皿がなくなり、F群土師器皿が出現する。F群は胎土の様子・色調がA群と似ているが、器形は4段階のA群とは全く異なり連續性は認められない。一方F群は口径6cm代の小皿が主体で、口径の法量の単純さの点ではA群と同じ特徴である。D群・E群も出土するが、各々の比率を示す資料はない。出土状態をみると、F群が半分前後を占めるようである。

この時期の資料は出土例が少ないと訳ではなく、整理報告例が少ないので、さらに検討が必要である。国産磁器の型式からみて、2型式以上は存在するものと考えられる。

31 HJ第559次調査SK 662

本報告資料で、平面方形の土器廐棄土坑出土である。

F群土師器皿は、口径6cm代と7cm代の2種類がある。D群とE群土師器皿は、口径6cm代から15cm代まで各種あり、7cm代が最も多く11cm代がこれに次ぐ。D群はD-2群が多い。

(中島・佐藤)

C 各段階の年代

1段階の年代

HJ第97次調査S E 11²¹⁾は、井戸枠の曲物に「延久3年」(1072年)の墨書きがあり、井戸から出土している瓦器椀はI-C型式である。この型式の瓦器椀を出土するHJ第559次調査SK 868が、1072年頃であるのは間違いかろう。

終末については、京都産の白色系の土師器皿との併伴関係から追ってみる。HJ第559次調査SK 636とHJ第531次調査SK 16、HJ第559次調査SK 638・639から、京都産の白色系の土師器皿が出土しており、SK 638・639からはへそ皿が出土している。京都でへそ皿は、小森・上村編年の²²⁾VII期中以降に出現しており、14世紀の前半頃の年代である。京都の年代を当てはめると、HJ第559次調査SK 636が13世紀中頃で、SK 638・639が14世紀前半以降となる。

一方、大和型瓦器椀の年代では、当麻寺曼荼羅堂基壇下土坑出土の瓦器椀が、寛元元年(1243年)の須弥壇改造に伴うものとされている。この瓦器椀の型式を川越氏はIII-B型式、近江氏はI-7期(III-C型式並行)の古い様相としている。HJ第559次調査SK 636出土の瓦器椀は実測図を比較するかぎり、型式的にこの当麻寺資料より古いものと考えられよう。

HJ第559次調査SK 636資料は、瓦器椀・土師器皿とともにやや特異な型式様相のため判断に苦しつむが、大和型瓦器椀と京都産土師器の年代観の差が認められるようだ。また川越・近江両氏の年代観もここからずれが生じているが、おおよそIII-E型式を14世紀前半頃としている。しかしながら、奈良町遺跡内ではIII-D型式以降の瓦器椀の出土が非常に少なく、検討できる資料が見いだせない。ここでは京都の土師器皿の年代をもとに、1段階の終末を概ね14世紀前半頃と考える。

2段階の年代

直接年代を知る資料がなく、年代については未確定なところが多い。1段階終末の年代から見て、その開始は14世紀の前半でも新しい頃か。

2段階終末の資料の、GG第63次調査S E 01からは、古市城山遺跡出土の15世紀中頃～後半の紀年銘資料の土師器羽釜の型式(H3型)が出土しておらず、15世

紀前半頃が終末に近い時期であろうか。

この場合14世紀前半～15世紀前半の100年間に7個の資料が存在することになる。資料の統合や年代について、さらなる検討が必要である。

3段階の年代

HJ第482次調査S X14は焼土層で埋まる遺構である。「奈良坊目拙解」によると、天文年間の一一向一揆により椿井町が焼失した記録がある。焼土層の由来をこれに求めた場合、16世紀の第2四半期頃のものとなる。

また肥前産陶器の出現年代から、GG第48次調査SE 16が17世紀の第1四半期頃となる。

両資料の間のSY第02次調査SK 07とHJ第559次調査SX 808は、16世紀後半の頃となる。

4・5段階の年代

肥前産陶磁器の編年を参考にすると、

GG第04次調査SK 05が肥前産磁器の出現時期で、17世紀の第2四半期頃。

GG第48次調査SE 26は、「大明成化年製」銘や網目文磁器碗などが出土し、17世紀の第3四半期頃。

HJ第332次調査SE 06は、「大明年製」銘や網目文碗などの他、京焼風陶器、内野山系の銅線釉陶器碗が出土する。17世紀の第4四半期頃と考えられる。

HJ第559次調査SE 507は、型紙擠の磁器碗、京焼風陶器が出土しており、18世紀の第1四半期頃。

HJ第332次調査SK 16は、コンニャク印判のくらわんか碗が出土し、18世紀の第2四半期頃。

HJ第559次調査SK 656は、蓋付の磁器碗、壽文や梵字文の磁器碗、瀬戸産磁器が存在しないことから、18世紀の第4四半期頃であろう。

HJ第559次調査SK 662は、肥前産の広東碗、瀬戸産の端反り碗等の国産磁器から19世紀の第2四半期頃である。
(中島)

Dまとめ

以上、奈良町遺跡出土の土師器皿の編年を概観してきた。型式的に空白の期間があるものの、平安時代から江戸時代まで、途切れることなく土師器生産をつづけていた奈良の姿が明らかになった。特に江戸時代後半まで生産をつづけたA群土師器皿は、奈良の土器生産の象徴とも言えよう。かくも生産が長られた理由は、土師器皿の需要が奈良に常にあったためと考えられる。この需要は、中世以来の社寺に由来するものと考えられ、町内にもその影響が及んでいる点は、奈良の町と社寺との関連の深さがうかがえよう。近代をむかえた後の奈良の土師器生産については不明な点があるものの、その生産は奈良時代から現在に至るまでの、約1,300年の歴史を有する一大伝統産業といえよう。
(中島)

- 1) 福垣晋也 1963 「赤土器・白土器—中世「かわらけ」の編年ー」『大和文化研究』第7巻7号
- 2) 森下恵介・立石堅志 1987 「大和北部における中世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』
- 3) 森下恵介 1992 「南都土器編年再検討」「大和の中世土器Ⅱ」大和古び研究会
- 3) 立石堅志 1989 「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会
- 4) 奈良市教育委員会 2007 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成15年度
- 5) 奈良市教育委員会 1991 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度
- 6) 5)と同じ
- 7) 奈良市教育委員会 1992 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度
- 8) 奈良市教育委員会 1987 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和61年度
- 9) 奈良市教育委員会 2008 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成17(2005)年度』
- 10) 5)と同じ
- 11) 5)と同じ
- 12) 奈良市教育委員会 1993 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度
- 13) 奈良市教育委員会 2012 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成21(2009)年度』
- 14) 奈良市教育委員会 2010 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19(2007)年度』
- 15) 奈良市教育委員会 1999 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成11年度
- 16) 奈良市教育委員会 2006 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成14年度
- 17) 奈良市教育委員会 1989 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和63年度
- 18) 奈良市教育委員会 2008 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成20(2008)年度』
- 19) 15)と同じ
- 20) 奈良市教育委員会 1983 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和57年度
- 21) 15)と同じ
- 22) 奈良市教育委員会 1995 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成7年度
- 23) 22)と同じ
- 24) 奈良市教育委員会 1987 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和60年度
- 25) 小森俊寛・上村憲章 1996 『京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究』『研究紀要3』(財)京都市埋蔵文化財研究所

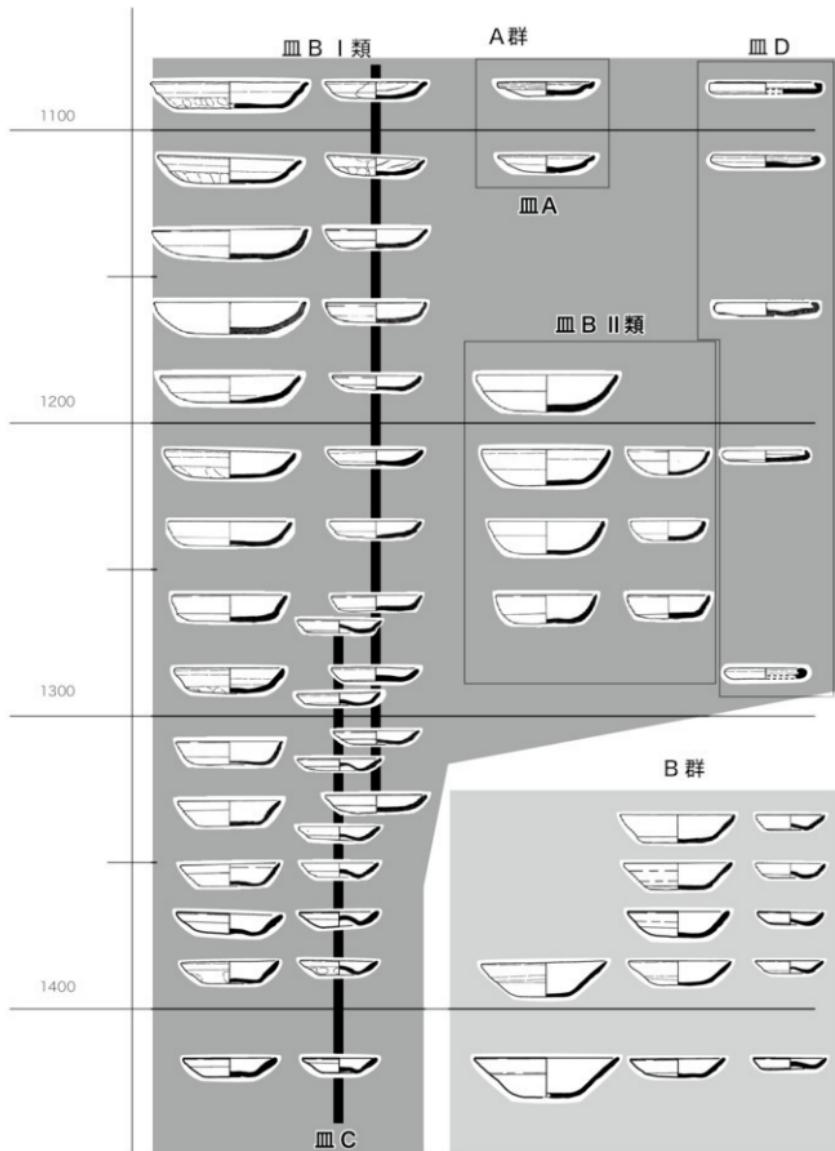


図 84 奈良町遺跡 土師器皿変遷図 1 (原図中島)

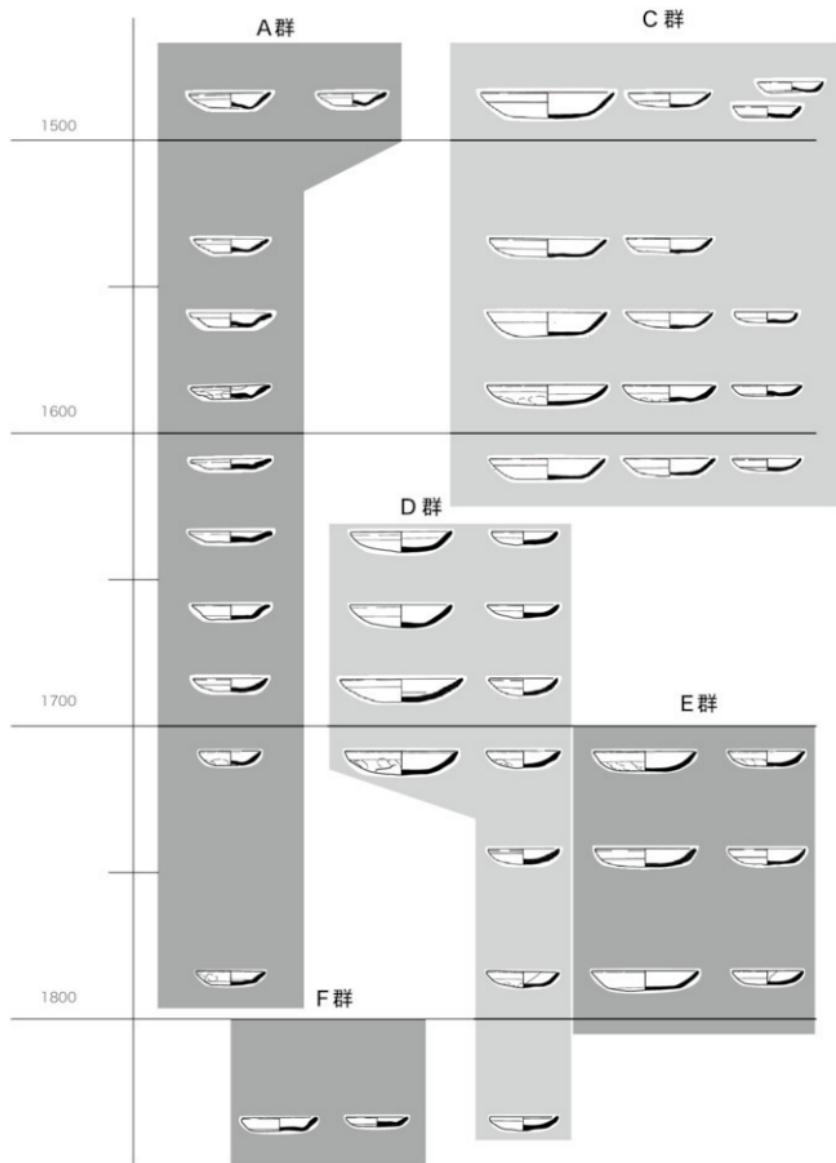


図85 奈良町遺跡 土師器皿変遷表2 (原図中鳥)

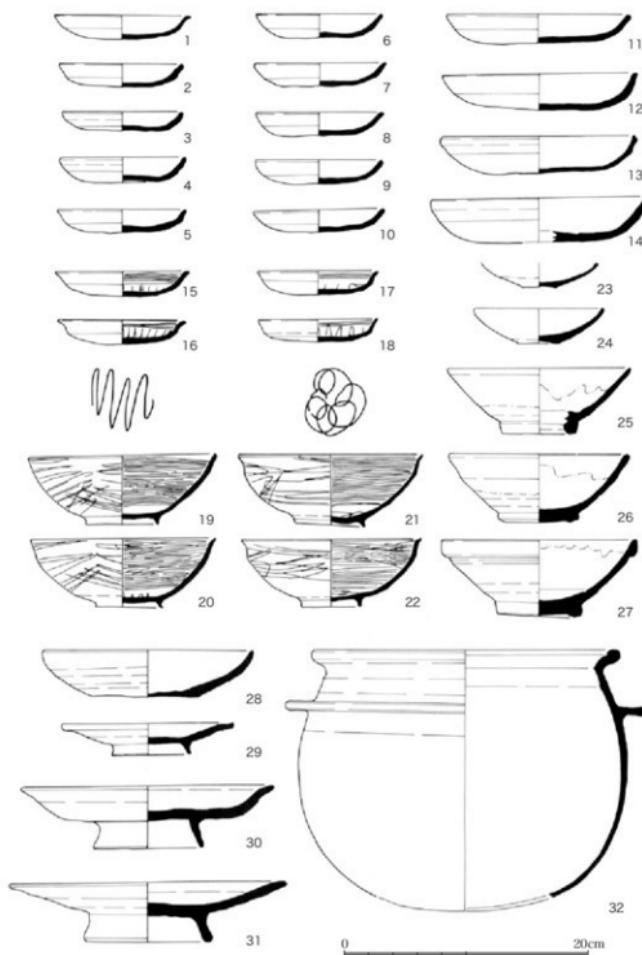


図 86 HJ 第 232 次調査 S E 02 出土土器 (1 / 4)

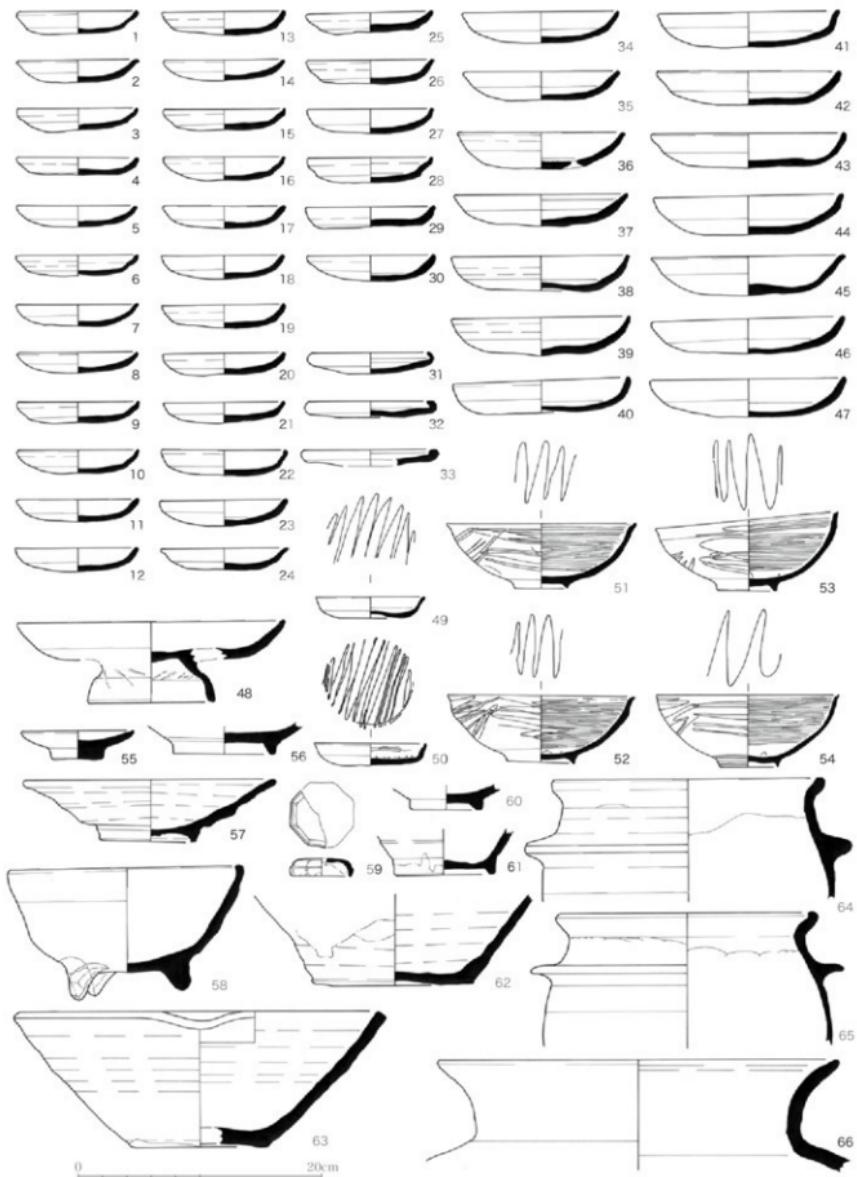


図 87 H J 第 228 次調査 S K 03 出土土器 (1 / 4)

第3章 奈良町遺跡出土の土師器皿の編年

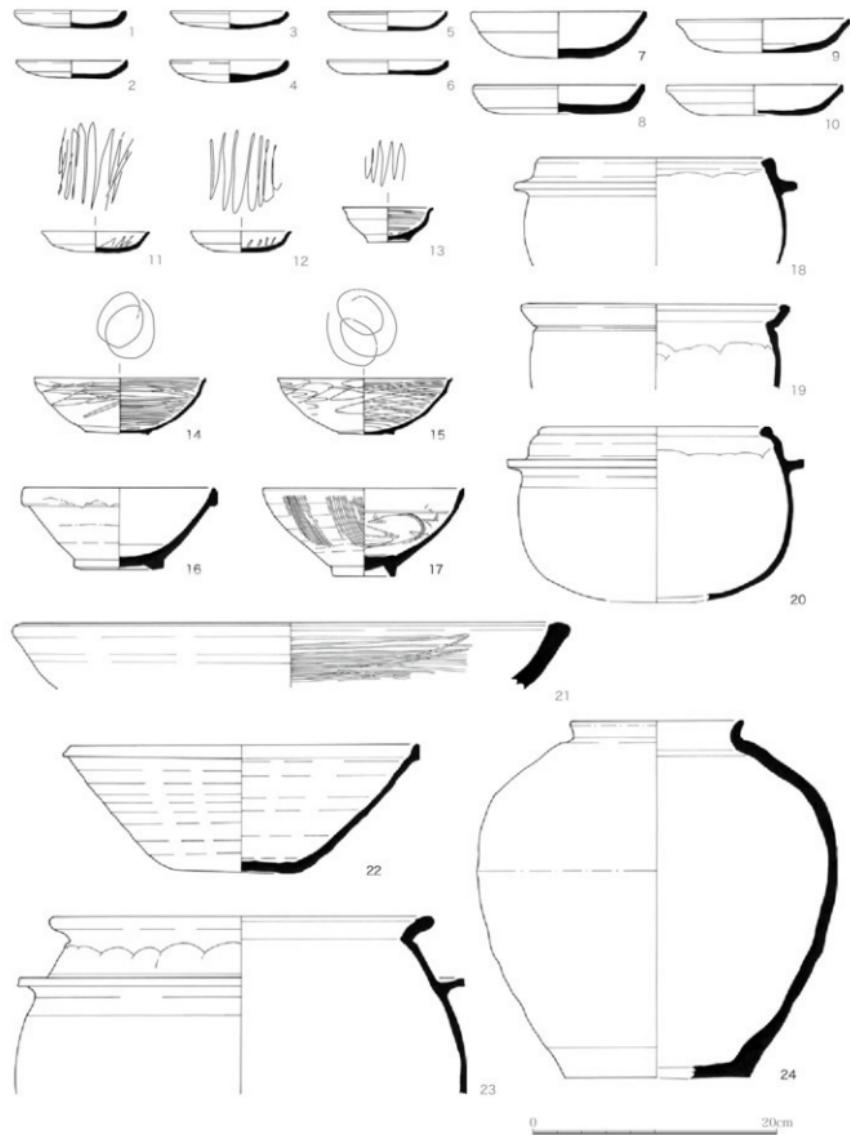


図 88 H J 第 258 次調査 S E 03 出土土器 (1 / 4)

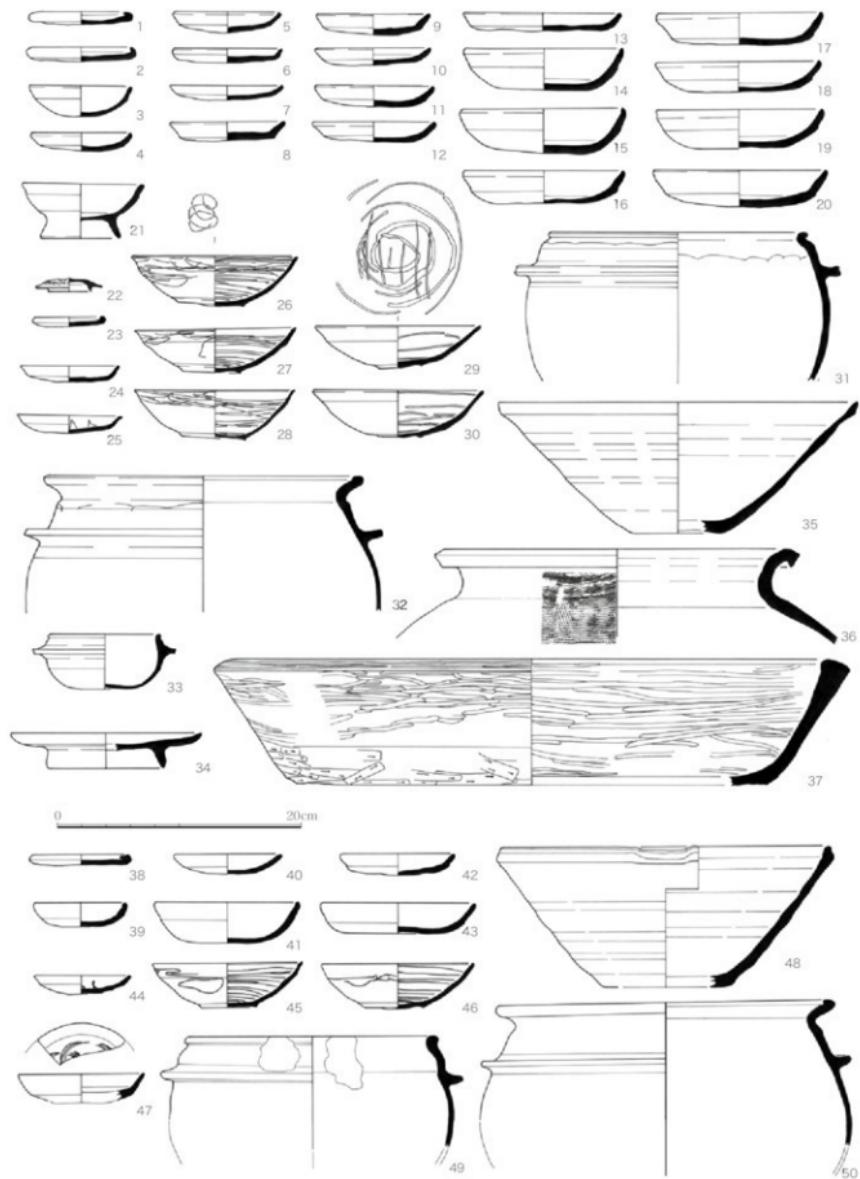


図89 HJ第269次調査 S E 03 (1~37)・GG第07次調査 S E 13 (38~50) 出土土器 (1/4)

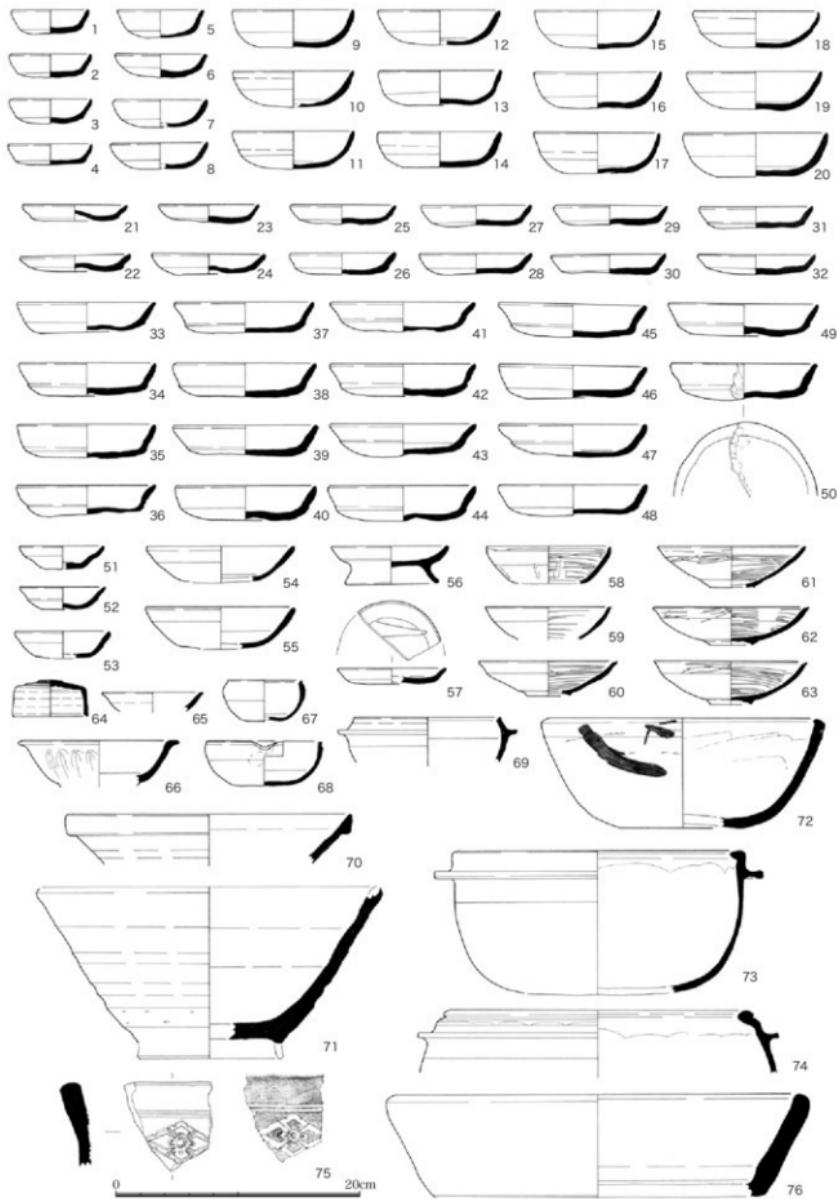


図90 HJ第531次調査 SK16 出土土器 (1/4)

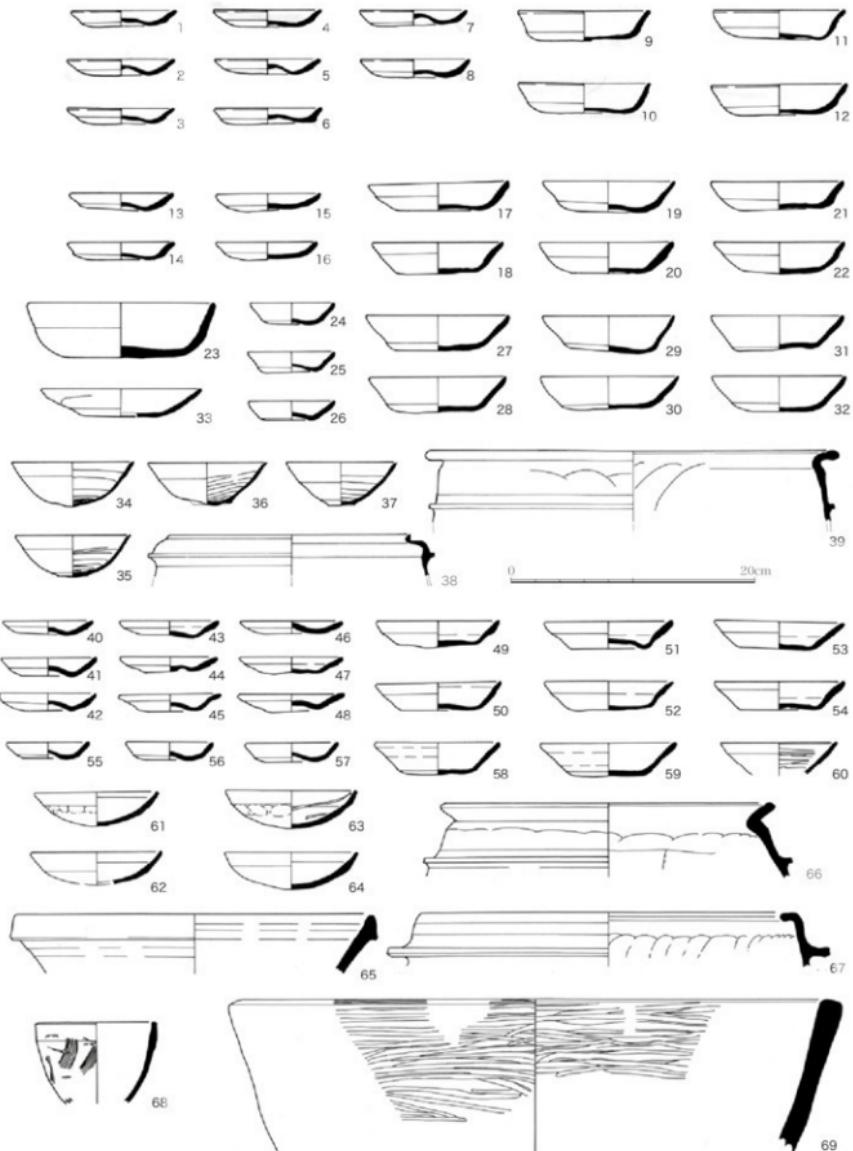


図91 HJ第232次調査 SK 03 (1~12)・GG第31次調査 SK 03 (13~39)・GG第38次調査 SK 03 (40~69) 出土土器 (1/4)

第3章 奈良町遺跡出土の土師器皿の編年

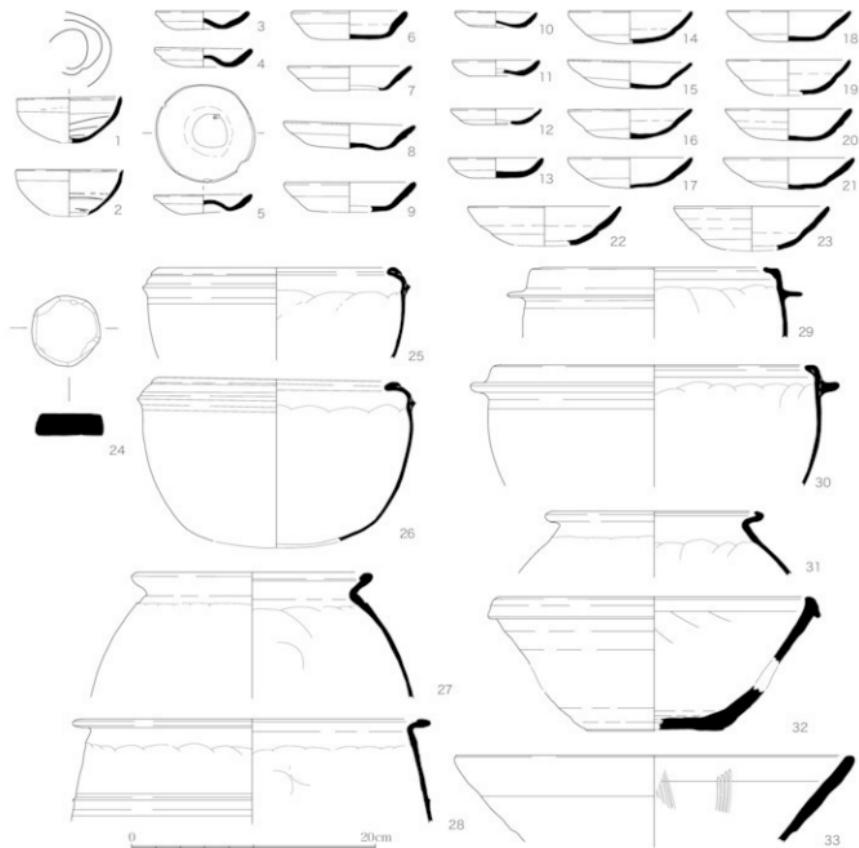


図92 SD第26次調査 SD 05 (2~32)・SK 03 (1・33) 出土土器 (1/4)

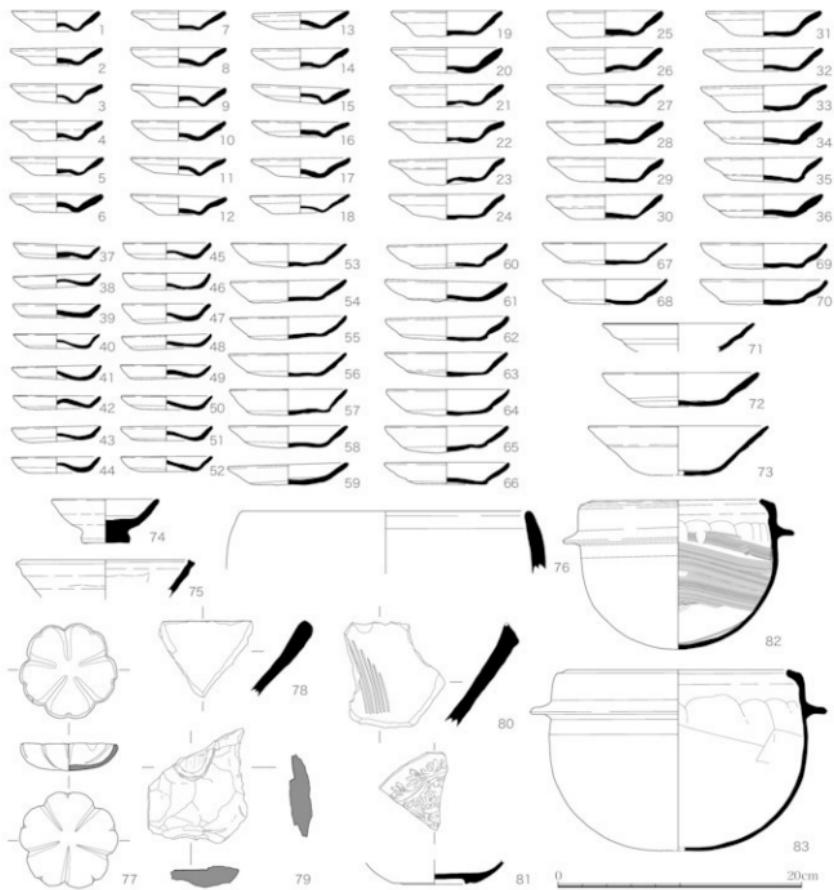


図93 GG第63次調査 S E 01 出土土器 (1/4)

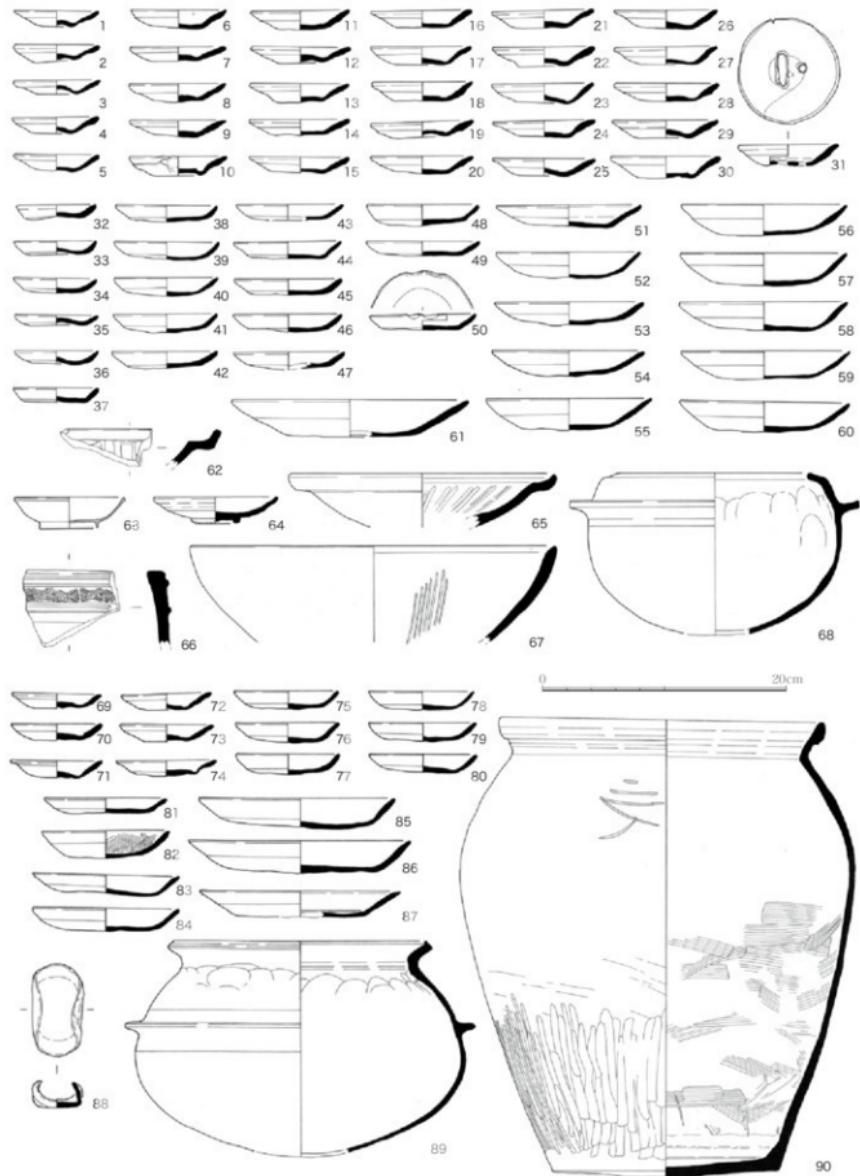


図94 G G第48次調査 SK 15 (1~68)・H J第482次調査 SX 14 (69~90) 出土土器 (1/4、90のみ1/10)

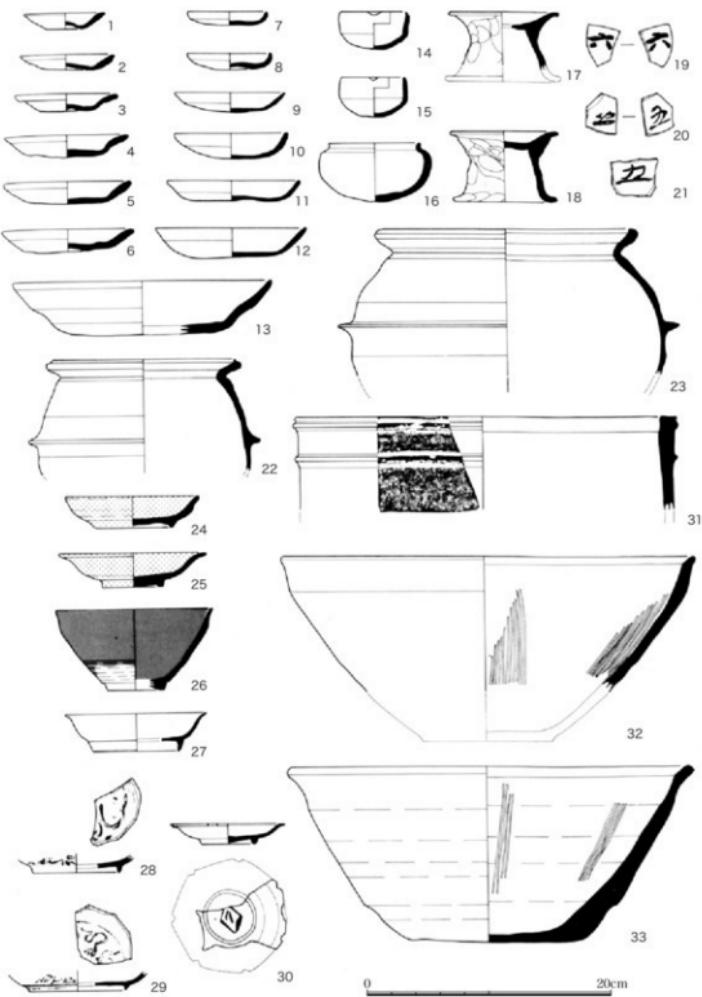


図95 SY第02次調査 SK 07 出土土器 (1/4)

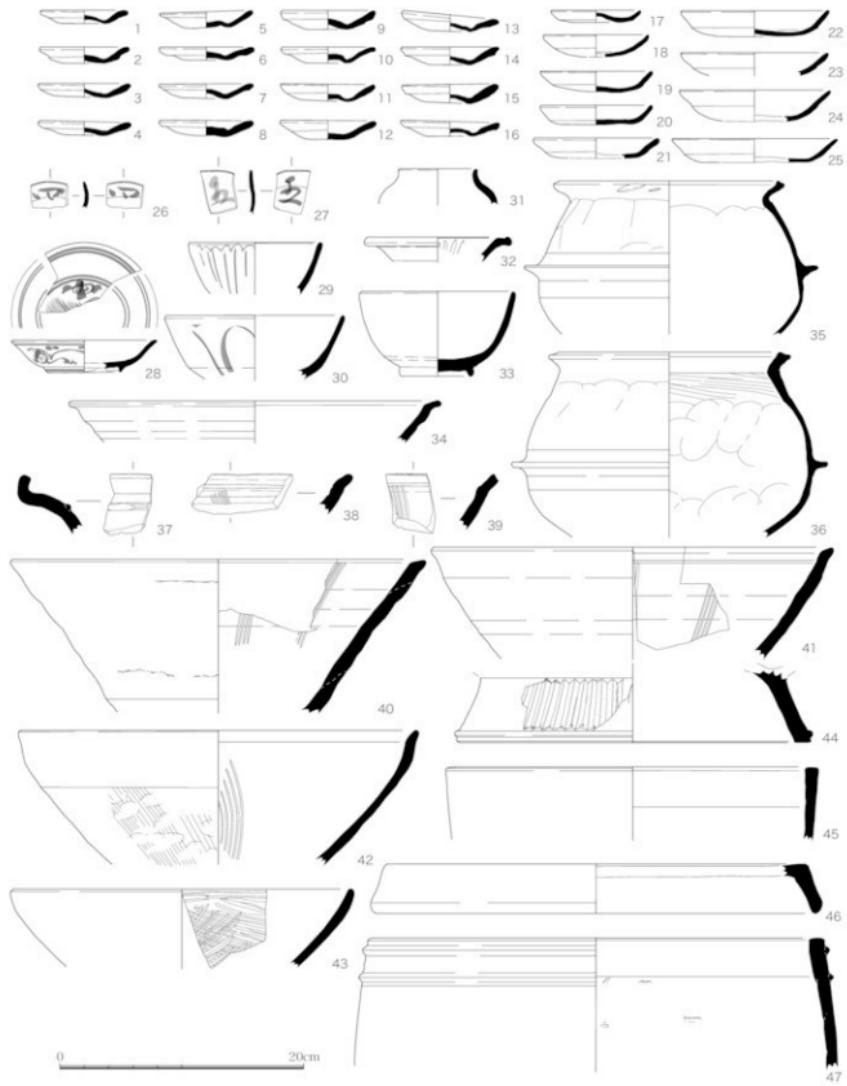


図96 HJ第605次調査 SD05 出土土器 (1 / 4)

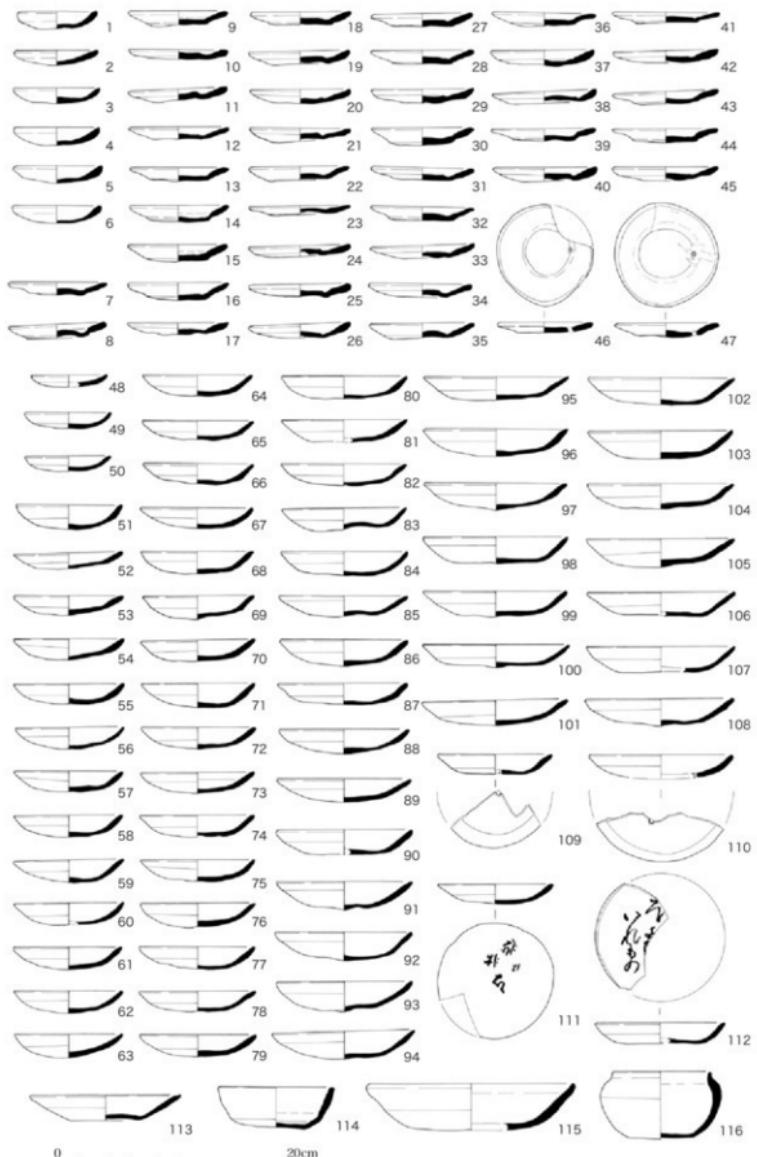


図97 GG第48次調査 SE16 出土土器1 (1/4)

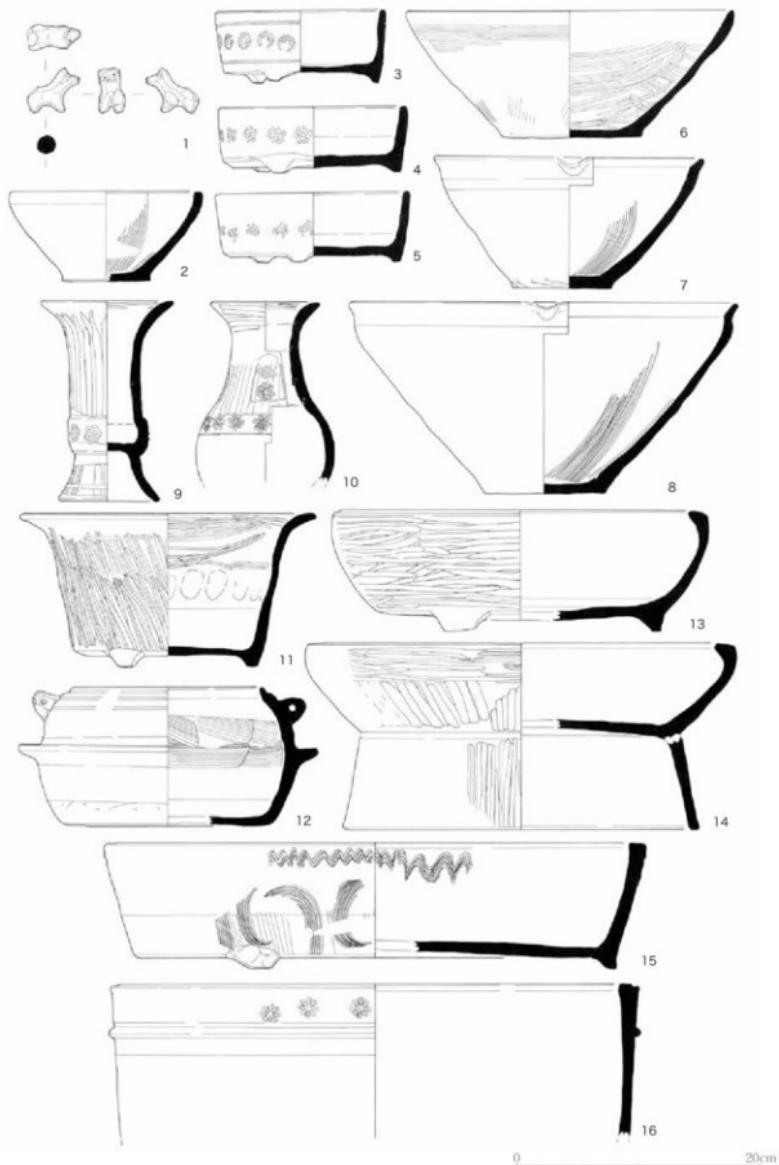


図98 GG第48次調査 S E 16 出土土器2 (1/4)

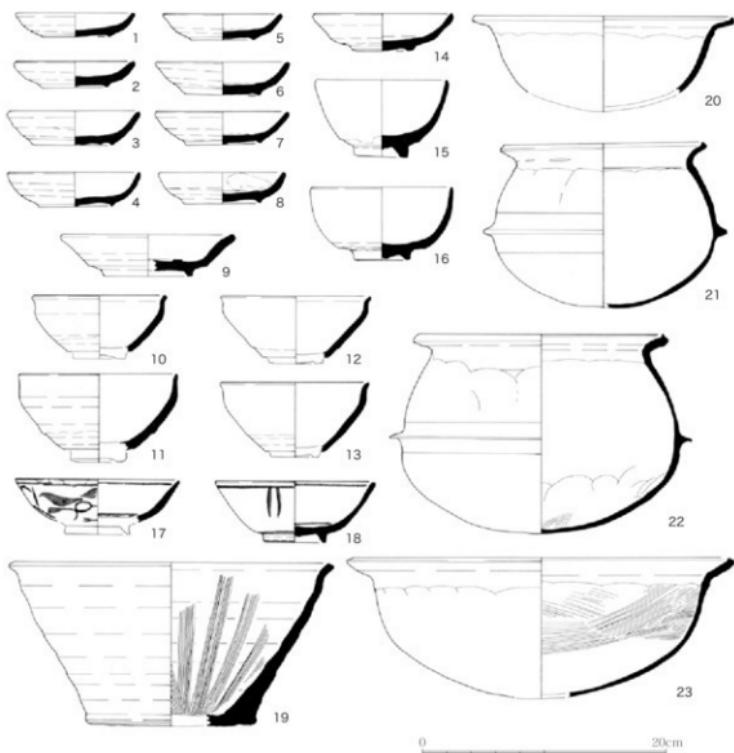


図99 GG第48次調査 S E 16 出土土器3 (1/4)

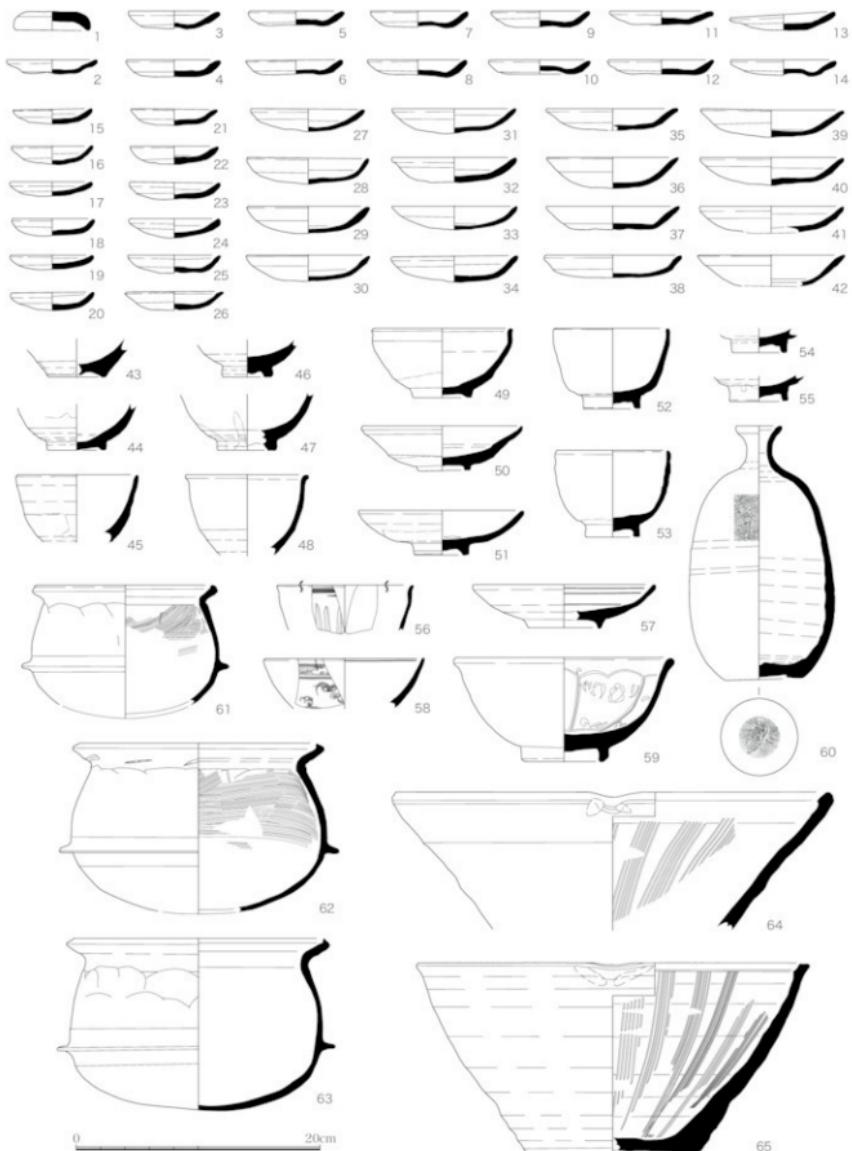


図 100 GG 第04 次調査 SX 06 出土土器 (1 / 4)

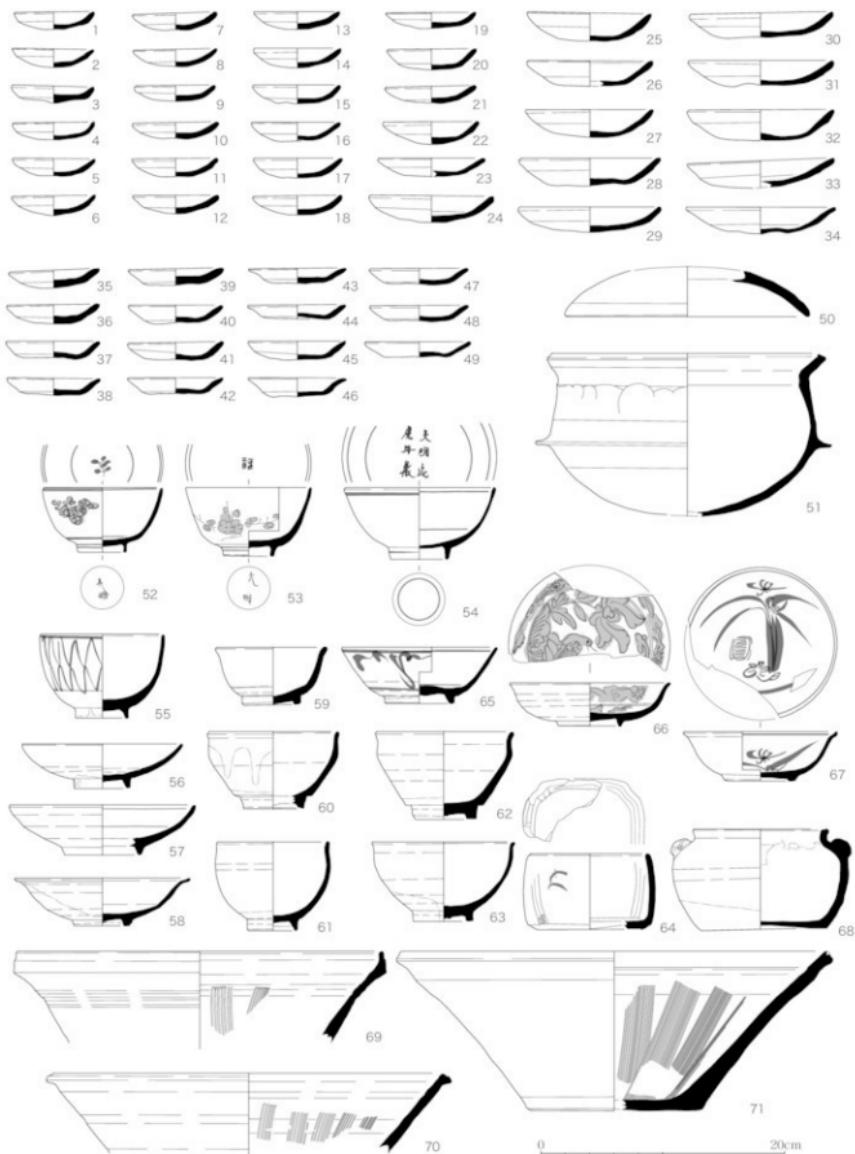


図101 GG第48次調査 S E 26 出土土器 (1/4)

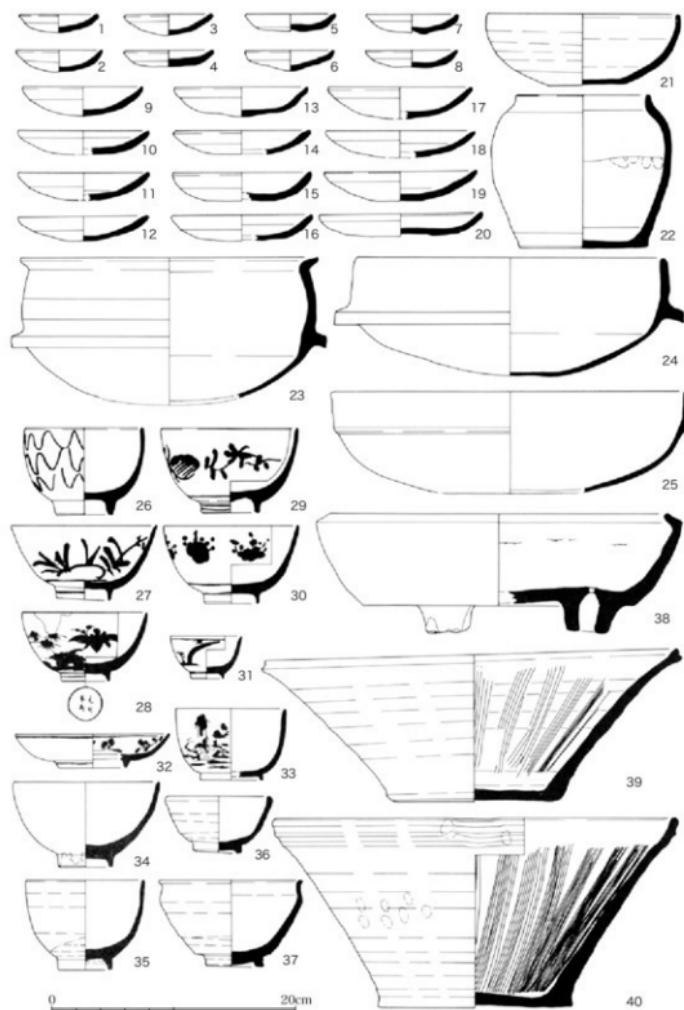


図 102 H J 第332 次調査 S E 06 出土土器 (1 / 4)

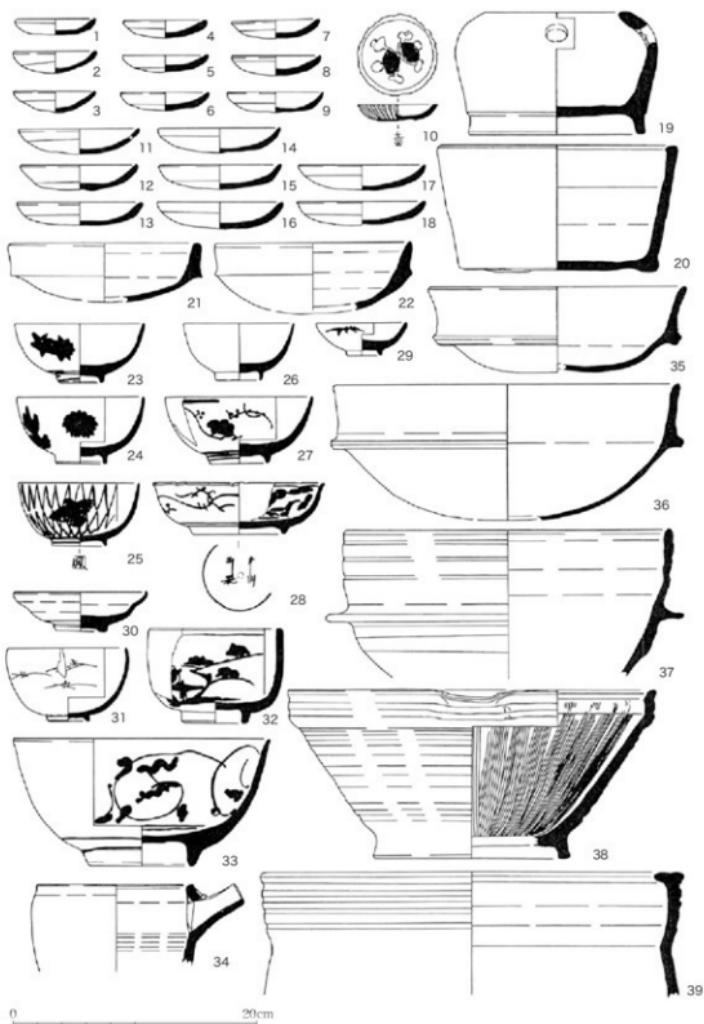


図103 HJ第332次調査 SK 16 出土土器 (1/4)

写 真 図 版



S E 501 出土土器



S K 613 出土土器



9 皿A



34 皿B I 大



23 皿B I 小



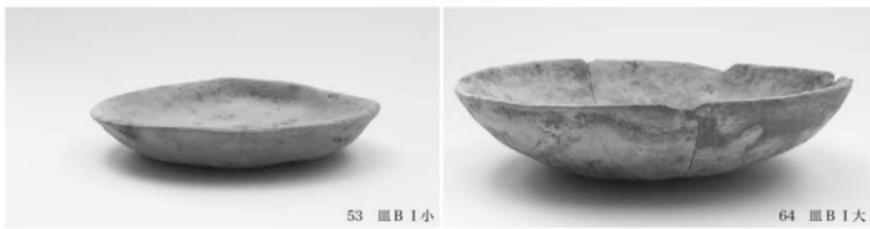
29 皿B I 大



37 瓦器椀



S K 618 出土土器

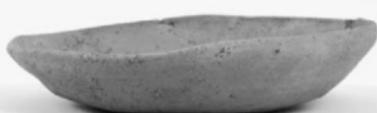


53 盆B I 小

64 盆B I 大



S K 635 出土土器









S K 642 出土土器



219 A 群皿

240 京都産皿



244 A 群皿



280 B 群皿



252 B 群皿



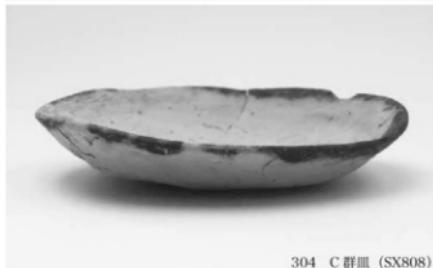
S X 808 出土土器



290 A 群皿 (SX808)



330 A 群皿 (SK651)



304 C 群皿 (SX808)



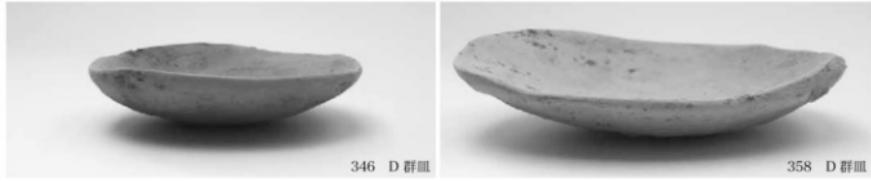
339 D 群皿 (SK651)



S K 651 出土土器



S E 507 出土土器



346 D 群皿

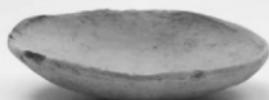
358 D 群皿



S K 656 出土土器



374 A群皿



384 D群皿



374 A群皿



392 D群皿



380 E群皿



399 信楽産陶器 仏飯器



S K 662 出土器



411 F 群皿



428 D 群皿



437 E 群皿



509 赤堀産陶器 皿

印刷・製本仕様データ

表 紙：アートボストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg/m²
巻首囲版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：綴じ開き・糸かぎり綴じ

南都出土中近世土器資料集

—奈良町高天町遺跡(HJ第559次調査)出土資料—

奈良市埋蔵文化財調査センター資料 No.5

印 刷 平成 26 年(2014)年 3 月 15 日

発 行 平成 26 年(2014)年 3 月 26 日

編 集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目 281 番地

T E L 0 7 4 2 - 3 3 - 1 8 2 1

F A X 0 7 4 2 - 3 3 - 1 8 2 2

U R L <http://www.city.nara.nara.jp/>

E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発 行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市三条大路南一丁目 1-1

T E L 0 7 4 2 - 3 4 - 1 1 1 1 (代)

印 刷 関西美術印刷株式会社

630-8325 奈良市西木辻町 153-1

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2014